# 人と神の境界

神榛　紡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人と神の境界

【Ｎコード】
Ｎ７８５６Ｔ

【作者名】
神榛　紡

【あらすじ】
大賞に応募した作品の改稿前です。多分半年くらいしたら書き直した別物と総入れ替えになると思います。
駄作、駄文の駄目駄目作品となっておりますが、それでも良ければお読みください。

※一応最終選考まで残ってましたが、それを前提に読むと痛い目を見ます。

## プロローグ（前書き）

正直に言って、これが最後まで残ってたのは奇跡通り越して何かの間違いだと思います。
次は受賞目指して見ますが、これ以上の駄文になる予感しかしなかったり。

# プロローグ

梳美咲　霧輝の持つ異名は《神弑魔刀》。日本における最上位階級である、天皇直授名者《皇名》。侍、騎士、精霊師、召喚師、獣操師等の、各兵職ごとで最強と認められた者に与えられる名だ。その中で霧輝は侍の頂点に十六歳という若さで立っている。

現代では、騎士と並んで数少ない人間が頂点の兵種だ。他の兵種では、エルフや竜人のような亜人種が頂点を取っている。基本的に、人間は各分野に適応できる代わりに、どの分野も一部が特化した能力を持つ亜人種に敵わないのだ。

そんな中で、霧輝ともう一人のやった事は偉業と言ってもいい所業だ。

（まあ、そんな事は別にどうでもいいけど）

夜道を歩きながら、霧輝はそう思う。他人がどう騒ごうが、霧輝が侍の頂点に立っているのはただ霧輝が強かったからだ。別に、人間が強い訳ではない。むしろ、霧輝は人間という種は人類で最弱だと考えている。

実際、霧輝は自分が神に及ばない事を知っている。ちっぽけな人間など、神の前では等しく無力で、簡単に死んでしまう存在だ。それを、過去の霧輝は身を持って体験している。

「あ、コンビニに寄って弁当を買わないと」

十字路に差し掛かった所で自宅の冷蔵庫が空だった事を思い出し、一人言吐る。自宅へ向かう最短距離は直進だが、コンビニに寄るために右へと曲がった。

夜中という事もあって人気の無い道をあくび混じりに歩く。今日

は高校の帰りに呼び出しを喰らい、五人の挑戦者を叩き伏せた。そう、子供が侍の皇名なら自分でも奪える等と勘違いをした連中を、大怪我をさせないように注意して叩き伏せたのだ。
変に気を使ったせいで、こんな遅くになってしまった。

「はぁ。高校生にさせる事じゃないよな」

本来ならば高校生の霧輝に皇名の位を奪う資格は無い。それなのに霧輝が皇名なのは、とある事件に巻き込まれて、当時の皇名の侍と殺し合いを演じる事になったためだ。それに勝って、特例として霧輝が今代の皇名をやっている。
平和な現代、皇名の最も多い仕事は上位の侍から突き付けられる挑戦の対応だ。

「ていうか、今の時代に皇名とか、絶対いらないよな」

皇名などという異常な存在であるせいで、極一部の人間を除き、学校で霧輝に近付いて来る人間はいない。不良すら、武の頂点である皇名の名を恐れて逃げる程だ。
そんな事を考えていたから、気付くのが遅れた。
霧輝が歩き向かっている先、五十メートル程の場所に一人の少女が立っている。うっすらと蒼色が見える美しい銀髪。氷のような美貌は、着ている簡素なワンピースを王族の着用するドレスのようにすら見せる。
そんな完璧な美少女に見えるからこそ、少女の抱える三つ首の鎌にゾッとする。
知らず、腰の刀に手を掛けていた事実に、霧輝は背に冷や汗が流れるのを自覚した。神と邂逅した時ほどではないが、それに良く似

た雰囲気を少女は持っている。

「・・・・・・竜人――――いや、人型を取っているが、竜、か」

勝てない。そう直感した。まともに戦えば、たとえ自分が最も肉弾戦に優れた竜人だったとしても、敗北する。いや、むしろ、人よりも竜人である方が、戦意の喪失は激しいかもしれない。同じ竜を冠するが故に。

（ただの人であるだけ、僕はまだ幸福か）

もし竜人であったならば、今の数倍、数十倍の絶望を得ただろう事を想い、思う。その上で、霧輝は体に力を入れて無理矢理震えを止めた。

その上で、問う。

「僕の名は梳美咲　霧輝だ。君は、何故ここに現れた？」

その問いには答えず、少女の姿をした竜は霧輝へと歩み寄ってくる。絶対的強者を前に、霧輝は反射的に刀を抜きかけて、無理矢理に抑えた。まだ、少女はこちらに敵意も殺意も見せていない。敵かどうかも分からない相手に抜くのは、信念に反した。

そんな中、互いに手の届く位置まで来た少女が、初めて口を開いた。

「シェリス・ライセキラ・ストラトラシアと申します。ようやく会えましたね、人の《皇》」

形容し難い程に澄み切った音色の声に、霧輝は半ば陶然となる。だが、それを無理矢理に押さえ込み、自我を保って問いを返した。

「ようやく会えたとか、人の皇というのは、一体どういう意味だ？　それは、僕を指しての言葉なのか？」

そんな霧輝の言葉にシェリスと名乗った少女は一度目を伏せて、再び声を出す。

「私は、私達はずっとあなたを待っていました。人の中にあって特別な人。人の頂点に立つ人。私はあなたと出会うために、今ここへと来たのですから」

それから一拍置いて、少女は続ける。

「あなたが皇である事を歓迎します、キリキ」

## プロローグ（後書き）

あえて言おう。皇という単語がこの作品では後半にならないと全く無意味な物だと。

いや、最初はそこも触れて行こうと思っていたんですけど、規定内に収めていく内に忘れてたんですよね。だからこそ、最後まで残ってたのがびっくりなんですけど。

書き直したらこの娘の活躍が大幅に増える予定です。

## 第一境『日常』

チチッ、チッ、チチチッ。
外で雀が鳴く声に霧輝は目を覚ました。重い瞼を開けて、体を起こす。

（どうして、ソファで寝てるんだっけ？）

リビングダイニングの部屋を見回した。霧輝は幼い頃に両親を亡くしており、孤児院を出た今は一人で生活している。皇名としての収入があるから、こうして部屋が二つもある高価な２ＬＤＫのマンションに住む事ができている。
そこで、霧輝は眉をピクリと動かした。

「何か、いい匂いがするな」

そう呟いて、流れてくる美味しそうな匂いを鼻から吸い込む。食べ物の匂いを嗅いで、霧輝はようやく昨日の出来事を思い出してきた。

（そうだ。あのシェリスとかいう竜を泊めたんだっけ）

夜も遅かったから、詳しい話は翌日にでも聞こうと考えて泊まって行かないかと言った所、シェリスは逡巡も無く頷いたのだ。ベッドが一つしかないので、霧輝は今寝ているソファで眠る事にしたのだ。
つまり、今この家には霧輝の他にもう一人いるのだ。

「・・・・・・という事は、キッチンで料理してるのはあの娘な

のか」

一瞬小型の竜が器用に調理器具を使って料理する様を想像して微妙な気分になりつつ、霧輝はソファから立ち上がる。壁に掛けられた時計を見ると、七時になったばかりらしい。

顔を洗ってこようと思ってキッチンと並んでいる洗面所兼脱衣所に向かおうとした所に、お盆の上に料理を乗せたシェリスが姿を見せた。以外にも、エプロンが似合っている。

「おはようございます。ちょうど、朝ご飯ができたところですよ」

「あ、ああ、おはよう。ごめん、客に料理なんてさせちゃって」

「構いません。料理は好きですから。それよりも、顔を洗ってきた方がいいです。外に出られないほど寝癖がひどいです」

そう言ってくすりと笑うシェリスに一瞬声を詰まらせてから「朝はいつもこうなんだ。すぐに直してくる」と返して洗面所に向かった。

「・・・・・・なんていうか、どうも慣れないな」

同じ家に他人――――それもあんな美少女が――――いるなんていう状況はこれまで一度として無かった霧輝は、思わずぼやく。幼い頃から慣れ親しんだ孤児院にも、それなりに容姿が整っている少女はいた。だが、彼女達は他人ではなく家族だからまた違う。

とりあえず寝癖をいつもより少し念入りに直して、顔を洗ってからリビングに戻る。

「ああ、待ってくれてたんだ。先に食べてても良かったのに」

「食事はその場にいる全員が揃って食べる物ですから」

「そうだね。とりあえず、待たせてごめん」

そこからはあまり話す事も無く――滅多に点けないテレビを点けた――食事を進めた。素朴な和風の朝食は、さっぱりとしていて朝からでも箸が進んだ。
そう時間が掛かる事も無く、二人とも食事を終えた。

「ごちそうさまでした。おいしかったよ、ありがとう」
「いえ、素材が良かっただけです」
「少なくとも、僕が作るよりも数段はおいしかったんだ。ああ、皿は僕が洗うから」

言って、霧輝は皿をまとめてキッチンへと持っていく。そこでスポンジに洗剤を含ませて手早く洗っていく。

（さて。泊まってもらったのはいいけど、今日は学校があるんだよな。まあ、今日は普通に休むか）

一瞬だけ悩んだが、ほぼ即決と言っていい速度で決断する。一瞬だけ世話焼きな一人の少女の顔が脳裏を過ぎったが、さすがに一日休んだだけで押しかけてくる事は無いだろうと思い直す。
彼女には、家族だからと押し通されてこの部屋の合鍵を渡しているため、フリーパスでここまで来れるのだ。

（まあ、現状の問題はシェリスさんか。皇とか待っていたとか、色々と聞く事がある）

リビングで手持ち無沙汰にしているだろう少女を思い、考える。秘境の奥地でひっそり暮らしているらしい竜が、どうして今さら人里へ、しかも自分の元へとやってきたのか。
洗い物をしながらいくつも可能性を考えては否定、潰した。

「ごめん、待たせ――――」

「待たせたよね」と言おうとして、霧輝は言葉を呑み込んだ。シェリスは、興味深そうな表情でテレビに映った街頭アンケートの様子を見ている。言うべき言葉を見失って立ち尽くしていると、画面が変わってシェリスが振り返った。

「なぜ、立ったままなのですか？」

「あ、いや、なんでもないよ。それより、学校に休むって連絡するから、話はその後でいいかな」

「ガッコウ？　それは、政府機関の一つですか？」

首を振ってから言った言葉に、シェリスは首を傾げた。どうも、この少女は時々基本的過ぎる事の知識が無い。昨日も、二十四時間営業のコンビニで様々な物を指差して質問をしてきたと思えば、オートロックを普通に知っていたりと知識が変に抜けているのだ。シェリスの質問に、霧輝は昨日と同じ様に答える事にする。

「学校っていうのは、子供を集めて教育する所だよ。政府機関といえばそうかもしれないけど、基本的に学校は独立した場所だから心配する必要は無いよ。今日は、君から話を聞かなきゃいけないから、休む事を伝えるだけ」

「そのような場所があるのですね。私は両親から教育を受けたので、そういった場所に足を運んだ事はありません」

「竜は平均的な知能が高いからできる事だね。人間はそこまで頭が良くないから、人に物を教える専門の人がまとめて教えるんだ」

言って、霧輝はリビングの隅に置かれた電話を取る。壁に貼られた紙の中から《桜ヶ丘学院　高等部》と書かれた番号をプッシュし、

受話器を耳に当てる。

『はい。こちら桜ヶ丘学院高等部です』

「もしもし。二年四組の梳美咲　霧輝です。担任の香村先生はいらっしゃいますか？」

『呼び出しを致しますので、少々お待ちください』

事務的な言葉の後に、単調なメロディーが流れる。それも長くは続かず、すぐに回線が繋がれた。

『お電話代わりました。香村です』

「あ、香村先生、僕です」

『生憎だがボクボク詐欺は間に合っている』

霧輝の言葉に容赦なく女性の声が答える。これでも、霧輝の所属する二年四組の担任で、五年の教歴を持っている教師だ。担当科目は体育が選択科目になった代わりに必須科目となった武芸科である。しかも、当人自身一級資格を持った侍だったりする。

そんな担任の言葉に霧輝は、ボクボク詐欺とはなんだと一瞬考えてしまった。

「梳美咲です。今日はちょっと重要な案件が入ってしまったので休みます」

『またか。その内、日数不足で留年するぞ』

「僕も国の方もそこには気を使っているので大丈夫ですよ」

『まあ、私には関係の無い事だから別に構わないか。分かった。生徒には適当に美女を引っ掛けて遊んでいるとでも言っておこう』

「普通にまともな理由を言ってください」

そんな事を言えば、彼女が血相を変えてやって来るだろう。他の数少ない友人達も面白がって付いて来るに違いない。そうなれば、確実にややこしい事になる。

思わず左手で眉間を押さえた所、ずっとテレビを見ていたシェリスが口を開いた。

「キリキ、昨日キリキがやっていたように別の絵を出すには、一体どうすればいいのですか？」

『ふむ。やはり女か』

「違います。もう風邪とでも言っといてください。――――そこにリモコンが入ってるから、赤いボタンが付いてる方をテレビに向けて、数字のボタンを押せば変わるから」

香村の言葉を即座に否定してから、霧輝は受話器を塞ぎ、リモコンを閉まっている小物入れを指差して指示する。シェリスは初め、いくつも入った小物のどれがリモコンなのか迷ったようだが、すぐにリモコンを見つけて番組を変えた。飲み込みが恐ろしく早い。

「・・・・・・とりあえず、皇名の仕事にも関わる案件なので、変な事は言わないでください」

『分かっている。全部冗談だ。お前が自分から女を連れ込む甲斐性があるはずがない。大方、どこかの王女やらお嬢様やらの護衛だろう？　そろそろ職員会議だから切るからな。とりあえず、こっちは任せておけ』

「お願いします」

香村の言葉に一言答えて電話を切ってシェリスの方へ顔を向けると、真剣な顔でリモコンをいじっていた。それに小さく笑みを溢して、正面に腰を下ろす。

「面白い？」

「とても興味深いです。村にはテレビは無かったので、知識としては知っていましたが、実際に目にするとやはり違います」

「それは良かった。ただ、そろそろ本題に入りたいんだけど、いいかな」
「私としてはもう少し興味の赴くままに行動したい所ですが、与えられた使命は重要なものです。ただ、話せる事と話せない事がある事はご承知ください」
「うん。そういうのは慣れてるから、話せない事は無理に聞いたりはしないよ。話せる時に話してくれればいい。それくらいの時間はあるんだよね？」
「はい。私達は、あなたと長い付き合いを希望しています。今はまだ無理ですが、遠くない未来、お互いに一つの隠し事の無い関係になるでしょう」

霧輝の予想にシェリスは頷く。とりあえず、その突飛な予想は流す事にした。

「それで、まずは皇というのがどういう意味か、聞いてもいいかな」
「そのままです。あなたは人という種の頂点に立つ。その星の元に生まれ、そのように運命として定められているという事です」
「ごめん。その事については理解を保留する。二つ目の質問をするけど、君が、いや、君達が僕を特別な人間だと考えているとして、何故、僕を待っていたと言ったの？」
「近い将来に世界を襲う危機を、あなたに止めていただきたいからです」

シェリスの淡々とした言葉に、霧輝は用意していた言葉を忘れて思考を停止させた。

「・・・・・・・・・ごめん。もう一度言ってもらってもいい？」
「近い将来、この世界に生きる多くの者が死の危機に晒されます。

その危機を止められるのはキリキだけです。ですので、私はその危機への対処をお願いに参りました。これは、人だけでなく竜や妖魔にとっても回避しなければならない危機ですので」

「・・・・・・・・・・・・参ったな。てっきり、人に盗まれた竜の秘宝を取り戻して欲しいとか、そういったレベルの話だと思ってた。世界の危機って、スケールが滅茶苦茶でかいね」

苦い笑みを浮かべて、霧輝は天井を仰ぐ。しばらくそうして思考をまとめた霧輝は、正面からシェリスの目を見つめた。

「君は世界の危機と言ったけど、その原因や見過ごした場合の結果は分かっているって考えてもいいのかな。対処法とかも分かっているなら、それも教えて欲しい」

「申し訳ありません。最長老が予知されたというだけで、詳しい事は私達もわかっていないのです。最長老が仰るには、世界に生きる全てを滅ぼす危機が迫っていて、人の皇であるあなたが、唯一それを防げる可能性を持っているという事だけです」

「それだ。どうも、僕が人の皇で、世界の危機を防げるただ一人の存在というのが理解できない。いや、危機を防ぐ所は予言だからそういうものだと思うとしても、どうして、僕が人の皇だと君は分かるんだ？」

はっきり言って、霧輝は自分が王の器だと思っていない。自分の他に人の上に立つべき人間は山ほどいる。身近な所にもいるぐらいだ。そんな中で、武力以外に何も持たない、人を統べる能力を持たない自分が皇と呼ばれる事が、霧輝はどうしても納得できなかった。

そんな霧輝をしばらく見つめたシェリスは、やがてゆっくりと口を開いた。

「あなたは、皇が人を統べる者と思っていませんか？」

「・・・・・・違うかな。王っていう職業は、多くの人をまとめて導くのが仕事だと思うけど」
「違います。少なくとも、私達の中で言われる皇というのは、統べる者ではありません。皇という存在は、結果としてそうあるべきものです。なるものではなく、全てにそうある事を強制された存在です」
「つまり、僕がその全てから強制される存在って事？」

霧輝の問いにシェリスは頷く。

「最長老が人の皇になる存在が現れると予言された時、場所にいたのがキリキ、あなたでした。実際はもう一人いましたが、そちらは死亡しているので、消去法でキリキという事になります」
「それって、まさか――――」
「はい。あなたが《神》と戦闘した時です。仲間の一人が調査に向かい、記録を残しています。正直、映像を見た者は全員自身の目を疑いました。人が、欠片とはいえ、神に勝利するとは思っていませんでしたから」

目を見開いた霧輝の言葉を、シェリスが肯定する。それを受けて、霧輝はソファに深く体を沈めた。右手で目を覆って沈黙する霧輝に、シェリスも口を閉ざして静止する。
やがて、霧輝が小さく呟くように声を出した。

「ごめん、少し時間が欲しい。そうしないと、取り乱しそうだ」
「はい。落ち着くまで、どれだけでも待ちましょう」
「・・・・・・助かるよ」

静かに答えたシェリスに一言だけ返して、霧輝はじっと身動きをせずに固まる。ただ、持ち前の自制心を最大限発揮して、十分ほど

で顔を上げた。

「本当にごめん。あいつの事となると、今でもまだ自制が効かなくて。とりあえずは、君達が僕に接触してきた理由は全部理解したよ。それで、僕はどんな要求を付き付けられるのかな。それを言うためだけにきた訳じゃないよね？」

「話が早く助かります。こちらからの要求は一つです。あなたは今後、世界の危機に関する事件に巻き込まれていく事になるでしょう。故に、危機が過ぎるまでの間、私をキリキの傍に置いてください。私達がする要求はそれだけです」

「本当にそれだけでいいの？」

予想していたどれとも違う要求に、霧輝は少し驚いた顔をして問い掛ける。シェリスは、その問いに小さく頷いた。

「世界の危機が具体的にどういうものか分かっていない以上、選択できるのはキリキの傍に人を配置する事だけです。ただ、それも無制限という訳には行きませんから、候補から私が選ばれ、こうして派遣されたのです」

「・・・・・・・・・分かったよ。なら、君の気が済むまでここにいて構わない。それぐらいの余裕はあるからね」

承諾した霧輝の言葉を聞いて、何故かシェリスは眉を顰めた。

「どうかした？　何か、気に入らない事でもあったかな」

「先ほどから思っていたのですが、君という呼び方は止めませんか？　これから一緒に生活するのですから、私の事はシェリスと呼び捨てで呼んでください。長く付き合う上で、名前を呼ばないのは逆に不快ですから」

「分かったよ。なら、これからはシェリスって呼ぶ。他に、何か

気になる事が無ければ、少し出かけようと思うんだけど、何かあるかな？」
「いえ。強いて言えば、どこに出かけるのかという点が気になります」
本気で分かっていなさそうなシェリスの言葉に、霧輝は思わず苦笑して告げる。
「ホームセンターだよ。き———シェリスの寝具とかを揃える必要があるからね」

「あれ？　霧輝？」
ホームセンターでシェリスの使うベッドを物色していると、背後から声を掛けられた。振り返った先にいたのはエルフの女性だ。見た目は二十歳前後だが実際は三十代後半で、精霊師の頂点である《精霊姫》メティ・キア・ソーメントが立っていた。
「あ、やっぱり霧輝だった。どうしたの？　今日って学校は休みだったっけ？」
「学校はあるけど。それより、なんでメティがここに？」
「ちょっと家具の買い足しに来たの。それで、そっちの女の子はどちら様？」
美しい金髪や整った容貌に似合わない好奇心に満ち溢れた視線でシェリスを興味深そうに見つめる。その問いに困った顔になる霧輝に代わって、シェリスが自ら前に出た。

「シェリス・ライセキラ・ストラトラシアです。これからしばらく、キリキのお世話になります。どうぞ、よろしくお願いします」
「メティ・キア・ソーメントよ。霧輝の同僚で精霊師の皇名をやらせてもらってるわ。よろしくね、シェリスちゃん」

綺麗な一礼と共に自己紹介をしたすぐに霧輝へと向き直る。

「こんな綺麗な娘を掴まえるなんて、霧輝も隅に置けないわね。でも、この娘が何者か理解して一緒にいるのかしら？」
「分かってるよ。メティと同じで、初見で気付いたから」

やはり一目で見抜いたらしいメティの言葉に頷いて、続ける。

「それにしてもちょうど良かった。メティはこれから何か予定があったりする？」
「なあに、デートのお誘い？　彼女の前でなんて、霧輝も意外に胆力あるのね」
「デートの誘いでもないし、シェリスは彼女じゃないから。そうじゃなくて、予定が空いてるなら、男じゃ買いにくい物をメティに担当してもらいたくて。あ、お金はちゃんとこっちで出すから」

メティのからかいを流して頼むと、彼女は少し考える素振りを見せてから頷いた。

「うん。分かったわ。今日は小さな棚を一つ買いに来ただけだから、その後は霧輝達に付き合ってあげる。報酬は《恋菓堂》のケーキでいいわ」
「了解。それじゃ、お互いここの買い物が終わったら入り口横のカフェで待つって事で」

案件が幾つか一気に片付いた事に安堵して、霧輝は改めてベッド探しを再開した。とはいっても、シェリスの趣味が分からないので、来る前に見せた部屋の広さに合った家具をシェリスが選ぶのに付き添って、支払いと宅配サービスの手配をしただけだったが。

その後メティと合流した霧輝達は、ホームセンターからデパートの立ち並ぶ中心街へと移動して、シェリスが使う日用品や服等を買い揃える事にした。

メティとシェリスの三人でメインストリートを歩く。

「それで、次は何を買うの？」

「とりあえずは日用品かな。歯ブラシとかシェリス用の箸とかを買わないと」

問われて答えると、メティは何か気になる事があるのか、しばらく考えてから再び口を開いた。

「霧輝、あなたってシャンプーとかは何を使ってるの？」

「シャンプー？」

首を捻りつつも霧輝が銘柄を答えるとメティはこれだから男はとでも言いたげに深い溜息を吐いた。

「いい、霧輝。シェリスちゃんは仮にも女の子なのよ？　そんな安物じゃない、ちゃんとした物を使わないと駄目。とりあえず、シェリスちゃん用に一通り揃えましょう。私も一緒に見てあげるから、手早く選んじゃいましょう」

呆れた様子のメティに先導されて、霧輝はシェリスのために生活必需品を揃えていった。その後も服やら下着やら彼女は率先して動

き、そういう所に理解の及ばない男としては、本当に助けられた。素直にそれを伝えると、メティはやれやれと首を振る。

「別に霧輝のためじゃないわ。同じ女として、シェリスちゃんが駄目な環境に置かれるっていうのが我慢できなかったの。霧輝はもう少し女の子の気持ちを学ぶべきだわ。そうしないと、娘が生まれた時に嫌われるわよ？」

「・・・・・・まあ、努力するよ」

霧輝が苦い顔で答える。三人が今いるのは、デパート一階に入っているカフェがやっているオープンテラスだ。時刻は三時を少し過ぎた所で、休憩を兼ねて軽くお茶をする事にしたのだ。

霧輝はぐっと一度体を伸ばしてから、脇にまとめた荷物を見やって呟く。

「それにしても、結構な荷物になったな。やっぱり、人一人増えると大変だ」

「そうね。それが女の子ならなおさらよ。男の子は多少ぞんざいに扱っても平気だけど、女の子はガラス細工よりもずっと繊細なんだから」

「まあ、そうですね。僕も、相手が男だったらここまでしませんし。もしシェリスが男だったら、相当適当な扱いをした気がする」

そう二人が会話する横で、シェリスは真剣にメニューを見ている。座る前に話を聞いたところ、こういった店は初めてらしいから仕方が無い事だろう。

「それにしても、やっぱりメティとシェリスが一緒だと目立ちますね。さっきから男の視線がすごい集中してる。それに、なんか嫉妬と憎悪の視線がすごい痛い」

「私達みたいな美女と美少女を連れて両手に花なんだから、役得の代償だと思いなさい。どうせ、学校じゃほとんど友達もいないんでしょ？」
「ひどいな。友達くらいいるって。それに、皇名の位が目当てだろうけど、結構ラブレター貰ったりするし。全部断ってるけど」
「それが賢明ね。まあ、その内あなた自身を見てくれる娘がいるだろうから、その娘をちゃんと掴まえられるようにだけ気を付けなさい」
「一応、覚えておくよ」

答えて竦めたその肩を叩かれ、霧輝は視線をシェリスに向けた。だが、シェリスは未だメニューを見て悩んでいる。話をしていたメティという事はないので、第三者と判断して霧輝は背後を振り返った。

「・・・・・・光葉？」

そこにいたのは、数少ない友人である松倉　光葉だった。制服姿で鞄を持っているから、学校から直接街へと繰り出したのだろう。セミロングの普段人当たりが良い少女の顔には、怒りの笑みという矛盾した表情が張り付いている。

「少し、聞いてもいいかしら」
「えっと、別に大丈夫だけど」

一度メティへと視線を向けると、笑いを堪えていて助け舟はありえない事が確定したので、光葉が何に怒っているか分からないながらもそう答える。それを聞くや、光葉は隣りから椅子を引っ張ってきて座り、力尽くで霧輝を自分と向き合わせた。

「私、霧輝は今日風邪で休みって聞いたんだけど、どうして、こんな所で美人を二人も連れてお茶してるのかしら。しかも、ショッピングの最中みたいよね。これに関して、何か言い訳があるなら聞いてあげるわよ？」

「・・・・・・ああ、そういえば、風邪って言ったんだっけ」

「霧輝、もう少しまともな理由をでっち上げるべきじゃないかしら。そんなだから、そこのお嬢さんみたいに怒る人がいるのよ？」

「いや、こっちも色々忙しかったから、つい適当になっちゃったんだよね」

メティの言葉に頬を掻きながら答えると、光葉が頬をピクピクと痙攣させる。取り繕っている笑みも、大分崩れてきた。

「言い残す事はそれだけかしら、霧輝？」

「それだけっていうか、今ふと思ったんだけど、僕が学校サボって女の子といたとして、どうして光葉が怒るの？」

「そ、それはっ！」

霧輝の指摘に、光葉が顔を赤くして言葉に詰まる。そこで、シェリスがようやくメニューから顔を上げた。

「キリキ、そこの女性はキリキが学校に行かず、異性との交際をしていた事に怒っているのではありませんか？　私が使う生活必需品を調達していた事をきちんと説明すれば、理解を得られると思いますが」

「ああ、なるほど。光葉はこれがデートだと思ったから怒ってるのか。まあ、学校サボってデートなんてしてたら不謹慎だものな」

整然としたシェリスの言に、霧輝はポンと手を打って納得する。

「ところで、シェリスは何を頼むか決めた？　決まったなら、注文してくるけど」

そう言ってシェリスから注文を聞くと、メティと光葉の分も聞いて霧輝は席を立った。店内まで行って注文を伝え、コーヒーや紅茶と人数分のケーキを受け取って戻って来る。

それぞれの前にケーキと飲み物をセットで置いて座る。

「物じゃ買収されないわよ」

「そんなつもりないって。自分達だけで食べてるのも気分が良くなかったから、これはただの自己満足だよ。気に入らなければシェリスにあげてくれればいいから」

「さすがに二つもいりません」

「だそうだから、食べてもらえると助かるかな」

霧輝に言われて、光葉は渋々といった様子でフォークを持つ。それにホッとした表情を見せて、霧輝もケーキを切り崩す事にした。光葉は、甘い物を食べるとどんなに怒っていても機嫌がすぐに直るから、当面の危機は脱した事になる。

だが、まるで気を緩めた瞬間を待っていたとでもいうように、メティがにこやかな顔で爆弾を投下した。

「ところで、その娘は霧輝の彼女だったりするのかしら？」

問われた霧輝とフォークで指差された光葉が同時に噴き出した。むせ返りながら、二人してメティを睨む。

「い、いきなり何を言うんですか！」

「メティ、変な事をいきなり言わないでほしいんだけど？」

「やだ、ちょっとした質問じゃない。何をそんなに慌ててるのよ」

そう言ってくるメティは笑みを絶やさず、明らかに意図して今の質問をした事が分かる。おそらく、口を挟むタイミングを計っていたのだろう。そして、最も効果的な機に爆弾を投げ落としたという事だ。

「光葉はこれでもクラスの中心で、僕はクラスでも浮いた存在なんだよ。それなのに、付き合ったりするなんて絶対ありえないから」

「・・・・・・・・・・へぇ、絶対ありえないんだ」

「ん？　何か言った？」

「別になんでもない。事実、私と霧輝は付き合ってなんかいない訳だしね。それよりも、そろそろこの人達との関係を教えてくれない？　じゃないと、今すぐ先生に電話するわ。言っとくけど、本気だから」

「いや、何て言うか、そっちの人はメティ・キア・ソーメントって名前で、精霊師の皇名なんだよ。そっちの方は知り合いの娘さんで、近くに引っ越してきたから、今日はその手伝いをしてるんだよ。日用品とか必需品を色々ね」

「・・・・・・・嘘は言ってないみたいね」

光葉はチラッと霧輝達の買い物した袋を見て言う。実際は半分ほど嘘のでっち上げなのだが、とりあえず気付かれなかったらしい。

その事に霧輝が安堵していると、光葉は「よしっ」と言って、宣言した。

「分かったわ。なら、私もその引越しを手伝ってあげる」

予想外の言葉に、霧輝は思わず頬を引き攣らせた。引越しと言ったが、実際は霧輝の住む部屋の一室を軽く改装するのだ。このまま光葉を連れて行けば、一悶着どころでは済まないのは明白である。

「あ、いや、手伝いと言っても、後は買った物を閉まって終わりだから、別に大丈夫だ。わざわざ手伝ってもらうほどの事じゃないよ」

「そうね。私も手伝うわけだし、これ以上は逆に動きにくくなるんじゃないかしら」

「実際に行って、邪魔になるようなら帰るわ。それとも、私が行ったらいけない理由があるの？　ていうか、決めるのはシェリスさんでしょ」

今度こそ空気を読んだメティもフォローするが、それを聞いて光葉は逆に決意を固めてしまう。しかも最悪な事に、その矛先をシェリスに変えてしまった。

（頼むから、うまく断ってくれないかな。僕の物理的社会的な生命線のためにも）

そんな必死の願いが通じたのか、シェリスは無言で首を振る。それに霧輝が肩の力を抜いたのも束の間、

「家主はキリキですから、そういった用件はキリキにお聞きください」

見事に中核を大破させる位置で爆弾を破裂させてくれた。光葉は一瞬思考を止めてから、ギチギチ、という擬音がとても似合う所作で振り返る。

「・・・・・・・・・今の話、意味を教えてもらってもいいかしら？」

（ああ、終わったな）

阿修羅の降臨に、霧輝は妙に達観した心境でそう思った。

「まったく。皇名の仕事なら初めからそう言えば良かったのよ」

梳美咲家のリビングで、お茶を注がれた湯のみ手に光葉がふてくされたように言う。結局、最終手段として政府から皇名として依頼された仕事という事にしたのだ。完璧にアドリブだったが、メティも合わせてくれてなんとか納得してもらった。

「いや、それでもやっぱり、年頃の男女が同居してるのはあんまり知られたくなかったから。親しい人間だったらなおさら、ね」

「仕方ないわね。そういう事なら、黙っておいてあげる。ウチの学校の男子って、そういう事に関しては妙に過剰反応するしね」

「まあ、僕が吊るし上げられる事はありえないとは思うけど、知られたら絶対周囲から向けられる視線がすごい事になるだろうし。僕と光葉だけの秘密って事でお願い。特に、遊騎とかに知られるのは絶対避けないと」

「あー、確かに。万が一にも知られたら、その日の内に他校まで噂が流れるわね」

うんうんと光葉が頷く。フルネームは新文　遊騎と言い、《噂散布機》のあだ名は伊達ではなく、過去に女装癖のある教頭を辞職に追い込んだ《女装辞職事件》が最も有名だ。

余談だが、霧輝が皇名だと学校中に知らしめたのも遊騎である。

「それにしても、皇名が護衛とかもやるなんて初めて知ったかも。ちょっと意外」

「そう？　皇名が護衛に付く事って意外と多いよ。日本最強の名前は広く知られてるから、それだけで防犯効果が高いんだよね。実際、皇名がいるといないとじゃ、テロとかの発生率が一桁違うらしいし」

皇名の人間はまさしく一騎当千であり、そんな怪物がいるのに事を起こすのは、よほど自信があるか、皇名という存在を理解できていない馬鹿だけだ。そして、前者も後者も、滅多にいるものではない。

「まあ、そういうのは全部聞いた話だけどね。会談とかの護衛は、メティみたいな汎用性の高い皇名に回されるし。僕に回ってくるのは、せいぜい個人の護衛までだよ」

「そうなんだ。剣とか武器が目に見える方が牽制になると思うんだけど、そうじゃないんだね。でも、何も持ってなくても威圧になるの？」

「むしろ、無手の方が警戒されるよ。剣や刀、弓みたいな目に見える武器なら、対策を立てる事も難しくないと向こうは考える。何も持ってないと、精霊師なのか元素士なのかとかから考える事になって、結果的に強く警戒する事になるんだ」

皇名同士の実力自体は、そこまで差は存在しない。だが、武器が初めから見えている者と見えていない者では、それを知らない相手に与えるプレッシャーが違う。そもそも、会談の護衛は迎撃ではなく襲撃の抑制だ。故に、侍や騎士の皇名はあまり呼ばれない。

「逆に、個人を護衛するなら僕や騎士の皇名みたいな近接武器を持つ方が便利だ。一定範囲に入った敵を斬るだけでいいし、皇名なら狙撃の銃弾を斬るぐらいはできるから。それに、あまり知られていないけど、一定以上の実力者なら斬撃を飛ばして物を斬れるし」

「斬撃を飛ばすって、都市伝説じゃないの？」
「現実に可能だよ。相当な技量がないと無理だけど、一級の侍なら誰でもできる。僕の場合だと大体千メートルくらいまでなら飛ばせるかな。それだけに専念すれば、千五百まではいけるかも」
「・・・・・なんていうか、本気で普通じゃないわね」
呆れた様子で光葉が言うが、霧輝としては斬撃を飛ばす事など些細な事だ。隠し芸的な事で呆れられても困るだけである。
「他も大概普通じゃないよ。メティだって、普通の精霊師じゃ絶対思いつかないし絶対できないような事を平然とやって見せるからね。召喚師の皇名は一体に限れば《神片》を召喚して使役してみせるよ。まあ、最弱の、って冠詞が付くけどね」

最弱とはいえ、神の欠片を使役する事自体異常だ。同じ皇名なら倒せなくもないのだが、普通に考えればそれだけでもはや無敵に近い。実際、一級の侍でも、一対一ではまず倒す事など不可能だ。二級以下など、どれだけ束になっても勝ち目など皆無と言える。

「ただ、神片は召喚に時間が掛かるから滅多に使わないけどね。わざわざそんな事をしなくても、精霊百体の同時召喚で十分な訳だし」
「百体・・・・・・」
「言っとくけど、その辺の召喚師が呼ぶような雑魚じゃなくて、一体一体がドラゴン級だから。多対一なら、皇名でも一番の実力者だろうね」

そう言ってから、霧輝は心内で思う。

（まあ、彼女の場合はその特異体質に因る所が大きいんだけど）

今代の召喚師の皇名はある特殊な体質によって、史上でも最高の

召喚術を行う事が可能なのだ。元からの才能もあるだろうが、神片の使役まで行けたのはその体質故だと、その当人も認めている。

「皇名って本当にすごい人ばっかりなんだね」

「僕なんかは本当に地味な方だよ。同じ人間でも、騎士の皇名は大財閥の一人娘だし、他は全員亜人種で外見から目立ってるし。十二人全員を並べたら、絶対僕が一番影薄いよ」

「あー。確かに、テレビに出てくるだけでも全員すごいキャラが濃いもんね。霧輝とかメティさんみたいに普通の人ってあんまりいないかも」

「まあ、メティみたいな例外を除いて、皇名になれるような天才はほとんどが性格破綻者だからね。僕みたいな凡人が皇名になれたのは、本当に偶然だよ」

実際、皇名になれるような連中は、誰も彼もがその道一つに人生の全てを捧げるような連中ばかりで、一般常識から掛け離れた変人が九割だ。霧輝やメティのような、常識的な人格者の方がむしろ異端と言えるレベルなのである。

そんな話をしていると、シェリスの物となった部屋から二人が出てきた。ずっと姿が見えなかったのは、先ほど届いた家具に買ってきた物をしまっていたためだ。

「何のお話をしていたのですか？」

「皇名が変人だって話だよ。ほら、今朝のニュースでも一人出ていただろ？」

「あの傀儡師の男性ですか？」

「そう。フルネームはドイル・アジン。《六死繰》の異名を持つ阿修羅族の男だよ」

ドイルは目立つ事が何よりも好きで、大抵どこかのテレビクルー

を連れて歩いている。阿修羅族特有の六本腕で六体の人形を操って戦う際も、とにかく目立つ事を優先して戦い、敵が目立てば怒り、自分が目立てば昂揚して手がつけられなくなる厄介な男だ。

そんな男の名前を聞いて、メティがあからさまに眉を顰める。

「私、しょっちゅうあの男に言い寄られてるのよね。私、ああいう目立ちたがり屋って生理的に受け付けないから、本当に困ってるのよ」

「それは、本当にご愁傷様だね。あいつって意外と粘着質だし、本気で面倒になりそうな時は連絡してよ。僕もできるだけ助けるから」

「うん。その時は遠慮なく、霧輝の事を頼らせてもらうわ。あの男も、さすがに皇名を二人も相手取るような無茶はしないでしょう」

そう言って微笑むメティの笑顔は、たとえメティに対して思うところがない人間でも、思わず心臓を跳ねさせるほど美しい。実際、メティは美形の多いエルフの中でも飛び抜けた美人で、皇名の女性では一位二位を争う人気がある。

「それにしても、霧輝の部屋って殺風景よね」

和やかに話している中、不意に光葉がそんな事を言ってリビングを見回す。その言葉は的を射たもので、リビングには背の低いテーブルとソファが二つ、それに小さな食器棚とテレビぐらいしかない。

「一人暮らしだったから、最低限あれば困らないんだよ。家具にこだわってるわけでもないし、男の一人暮らしならこれが普通だと思うよ」

「えー。私の知ってる男の子の部屋って、ゲームとかマンガとかが散乱してて、アイドルの写真集だけ大切にしまってある感じだけ

ど？」
「光葉、銀月を基準に考えるのは絶対間違ってると思う」
大雑把という言葉を人間にしたような霧輝と光葉共通の友人を脳裏に浮かべながら言うと、光葉は「あはは」と乾いた笑みを浮かべる。
そんな二人を見て、シェリスがおもむろに問いを発する。
「聞きそびれていましたが、お二人はどういう関係なのですか？」
「あれ、言ってなかったっけ？　私と霧輝は同じ孤児院出身なのよ。といっても、私は小学校の時に里親が見付かって引き取られたから、高校に入るまでは結構疎遠になってたんだけどね。高校に入って、また一緒にいるようになったって訳なのよ」
「正直、結構驚いたけどね。桜ヶ丘学院は学費が高いから、孤児院の昔馴染みと会うなんて思ってなかったし。それに、光葉もちゃんと女の子らしくなってたから、初め分からなかったぐらいだったよ」
光葉の言葉に続けて、霧輝が肩を竦める。それに、大きく嘆息した。
「私は一目で分かったんだけどね。嬉しくて話し掛けたら『ええと、会った事あったかな？』なんて言うし。一度、思い切りぶん殴ろうかと思ったわよ」
「お二人は仲がいいのですね」
「それはまあ、家族だからね。光葉だけじゃなくて、孤児院の仲間は皆、血は繋がっていなくても、家族だと思ってるよ」
シェリスの笑みを含んだ言葉に即答する。そんな霧輝の言葉にシェリスは納得した表情を見せ、光葉は逆に不満そうな顔を見せる。

一歩引いた位置から見ているメティは子供を見守る母親のような微笑だ。
和やかな空気がリビングに流れる。
〈ｐｉｒｉｒｉｒｉｒｉｒｉ〉
「あ、ごめん。――――もしもし」
霧輝はポケットから携帯を取り出して耳に当てた。その先から発せられた言葉に、目を険しくする。通話を切って携帯を畳むと、少し申し訳無さそうな顔で三人を見渡した。
「本当にごめん。ちょっと皇名の仕事が入った」

この世界には悪魔も魔物もいるし、危険な幻獣も存在する。しかし、前二者は世界各地に存在する地下迷宮から出る事はなく、幻獣が秘境から外に出る事は皆無に等しい。
本当に危険視しなければならないのは、《妖鬼》と総称される存在だ。
そのいずれもが好戦的という訳ではないが、例外なく人里に住まい、その歴史は人の歴史と共に存在する。その中でも人に害為す者は《鬼》の名を持って分類される。
《屍鬼》《鬼羅》《餓鬼》《獣鬼》《剣鬼》等、大まかな分類で区別される鬼から、固有の名前を有する歴史に残るような鬼も存在する。
そんな鬼の駆逐も、皇名の仕事の一つだ。
「それで、今回はどんな鬼なのかしら」

「《剣鬼》って聞いてる。ただ、通常の剣鬼よりも強い変異個体らしいから、油断はできないよ。するつもりも無いけど」

メティの問いに答えながらも、霧輝は周囲への警戒を怠らない。鬼は基本的に本能的な行動を取るが、思考能力が無い訳ではない。名を残すような鬼に至っては、極めて高い知能を有している。

そんな中で、もう一人の連れが口を開いた。

「キリキに話が来たのは、それが理由ですか？」

「違うよ。僕は基本的に日中学校にいるからね。放課後に起きた都内の仕事は、大抵の場合僕の方に連絡が来るんだよ。その代わりに、遠征する必要のある仕事はあまり回って来ないからイーブンだね」

それよりも、と霧輝は続ける。

「僕としては、シェリスには家で待っていて欲しかったんだけどね。今回はそこまで危険はないだろうし、問題はないだろうけど、やっぱり万が一って事があるし」

心配する言葉に対して、当の本人であるシェリスは首を横に振る。

「キリキの仕事には興味があります。また、実力を測る上でもこの機会は渡りに船だと言えますから。自分の身は守れますから、気にしないでください」

「いや、そういう訳にはいかないよ。メティ、シェリスの事、頼める？」

「構わないわよ。そもそもこれは霧輝の任務だからね。基本的に傍観するつもりだったから、ちょうどいいわ」

「ありがとう。助かるよ」

メティに礼を言ってから、霧輝は改めて目の前の現場に向き直った。

《世田谷経堂グランドホテル》

そう書かれた看板の、今は放置された廃ビルだ。世田谷区の経堂駅から程近いこのビルの中に入っていく姿が、第二階級の侍によって確認されている。

（確か、両腕両足が剣の変異体だったよね）

通常は両腕のみが剣になっている剣鬼だが、今回の変異体は両足も剣となっていて、足の剣で地面を切り裂きながら移動するらしい。追跡は容易だが、圧倒的な手数に出動した部隊はほぼ壊滅。死者こそ出なかったものの、かなりの打撃を受けたらしい。

意を決して、霧輝はビルの中へと踏み込んだ。トラップや不意を打つ奇襲を警戒して、自然とゆっくりした足取りになる。

一階はロビーと受け付けになっていて、見通しは悪くない。天井からは古いシャンデリアが下がっていて、埃に塗れた姿を晒している。

「とりあえず、罠も奇襲もないみたいだな」

呟き、床の傷へと目をやる。何か鋭利な物で切り裂いたような傷が深く付けられており、それは奥にある階段の方へと向かって続いている。報告にあった移動による切り傷だろう。実際、それは入り口外から続いている物と地続きになっている。

その分かりやすく示された傷は、誘っているような印象を受け、霧輝は少し考える。

「一応、報告通りに傷が付いているけど、メティはどう思う？」
「ブラフ、かな。こんな分かりやすい移動痕を残すような相手なら、そんなに怖くないはずだし。上層部もそう考えたから、量に任せた突入じゃなくて、皇名に回したんでしょ」
「やっぱりそう思う？　二級の侍を有してた部隊を圧倒できる実力があるなら、地面に一切の傷を付けない移動も十分に可能なはずだよ。こんな風に、わざわざ切り裂くような移動は、そもそもする必要がない」
とすれば、このビルに釘付けにして逃走したのか、と問われてば答えは否だ。
「多分、より強い敵をより多く斬る事を目的にしているんだろうね。実力に自身を持つ相手の無念や驚愕のような強い感情を餌にしてるのかな。剣鬼の変異体なら、そんな所が妥当な行動理由だと思うけど」
「それなら、もう満足してるんじゃないかしら。二級を含む一部隊を壊滅させたなら、普通の剣鬼なら逃走に入るわよ。まあ、変異体だから通常の個体より空腹の度合いが強い可能性もあるけど、それでも、もう少し利口な手法を取らない？」
「まあ、どういう理由で行動しているにしてもやる事は一つだ。鬼は斬るだけだよ」
そう言ってから、霧輝は再び階段の方へと視線を戻す。
（罠なのはほぼ確実。でも、それしかないなら乗るのが最善かな）
罠だったら罠ごと斬り捨てればいい。そう考えて、結論を出した。
「とりあえず、方針としては相手の誘いに乗る形で傷を辿って、途中で発見できるようならそのまま討伐して、最悪、罠ごと斬り伏

せようと思う。それでいいかな？」
「現状じゃそれ以外にないものね。ま、霧輝なら大丈夫でしょ」
「それがキリキの判断なら、私に異論はありません」

二人から賛同を得て、霧輝は階段の方へと無造作に歩いていく。途中から腰の刀に手を添えて向かったが、結局何も起こらなかった。
それから三階に上がるまでは罠も奇襲も無く過ぎ、三人は怪我も無く廊下に立った。

「どうやら、ここで終わりみたいだね」

そう言った霧輝の視線の先には、廊下に並ぶ扉の一つに入っていく移動痕がある。階段から一直線にそこへ向かう傷以外、三階には何も無い。他の道には埃が均等に積もっていて、可能性を潰している。

「結局、見付かりませんでしたね」
「仕方ないよ。どうせ、罠を張った位置から動いていないだろうし。とりあえず、ここからは僕一人で行くよ。周りに人がいたら、全力で戦えないし」
「そうね。私も間違いで斬られたくないし、シェリスちゃんとここで待ってるわ」

答えて、メティはシェリスと柱を背に立つ。不意打ちがしにくい位置に立った二人を確認してから、霧輝は問題の部屋の前に立つ。そして、スッ、と刀の柄に手を掛けて――――

――――斬った。

居合抜きで扉を一刀両断し、流れるような動作で斬り割った扉を蹴り飛ばす。扉はそのままガラスを突き破って外へと飛び出す。それと同時に、霧輝は一足飛びに部屋へと踏み込んだ。そのまま部屋を見回すが、　どこにも剣鬼の姿は無い。

（はずれか・・・・・・・・・・・・いや、上！）

霧輝が気付いて上を向くのと、天井が斬砕されて落ちてくるのは同時だった。反射的な判断で飛び退り、何とか被弾を避ける。

そして、見た。

霧輝が先ほどまで立っていたまさにその場所に両足を突き立てて直立する影。両腕両足どころではない。体の全てが刃物のような外見の怪物だ。体色は真紅で、横長の眼だけが異様な白さで持って世界を睥睨している。

開いた口の中に見える歯も、刃のように鋭利だ。

【単独か】

ひび割れた、聞くだけで不快になる鬼特有の声で、それは喋る。

【どうやら、人間はかくも学ばぬようだな。ただの一人、それも亜人で無き者が我に敵うと本気で思っているのだから】

「不快だな。声もそうだが、その考えも不快だ」

そう呟いて、同時に呼吸するような気安さで刀を振った。それを受けて瞬時に体を床に伏せた剣鬼の背後、扉で割れた窓ガラスのサッシが真っ二つになり、地上へと落ちていく。

ゆらりと、剣鬼が立ち上がる。

【訂正しよう。どうやら、先ほど刻んだ者どもよりも、遥かにマシなようだ】

そこから先はお互い無言だった。

剣鬼は報告にあった通り、四肢が剣という特異な体を存分に利用した跳ねるような剣で霧輝を襲い、それに対して霧輝はその剣撃を刃でそっと逸らして回避する。縦横無尽な剣鬼の攻撃を前に、霧輝は部屋の中を滑るように移動して回避していく。

それが、途中から突然に入れ替わる。

剣鬼が気付くと、いつのまにか霧輝が背後や懐に入って来ていて、回避に全力を傾ける事になっている。

視線は確実に霧輝を捉えていたはずなのに、いつのまにかその姿を見失う。

確実に捉えて振り下ろした剣が、掠りもせずに床を斬る。

なぜ。

ナゼ。

何故。

霧輝の動きが全く読めないどころか、目で追う事がまずできない。どこから攻撃されるのかが全く分からない。

攻めていたはずなのに、いつの間にか防御に回っている。

【貴様、何をした！】

「特に何もしてないよ」

声に、剣鬼は背後を振り返る。視界に煌く銀閃。回避が間に合わず、防御に剣を立てたが、その剣を霧輝の刀は易々と斬り飛ばした。

【ありえん。人間ではないのか】
「人間だよ、僕は」

呆然と呟く剣鬼に、霧輝は容赦なく刀を振り下ろした。真っ二つに斬られた剣鬼の体が埃が舞う中に倒れ伏す。それはすぐに光の粒に分解していき、霧輝の眼前で霧散した。

勝者である霧輝はそれを一瞥して踵を返し、廊下で待っていた二人の元へと戻る。

「あら、今回は比較的静かに終わったのね」
「そこまでの敵じゃなったからね。埃で視界が悪いのに、目で敵を探すような奴だったから、簡単に翻弄されてくれたよ。スイッチを変えるまでもなかった」

メティの言葉に答えて、シェリスに向き直る。

「まあ、皇名の仕事といっても、普段はこんなものだよ。全力を出すような相手なんて滅多に出てこない。戦争とか国家間の交流試合でも無かったら、意外と平和だから」
「そうですね。少なくとも、それなりの強さを持っている事は理解しました。今はそれだけ分かれば問題はありません」
「それじゃあ、そろそろ戻ろうか。後始末は専門の人達がやってくれるから、僕らには、もうやる事はないからね。邪魔をするのも悪いし」

霧輝はそう言って携帯を取り出し、すぐに閉じてしまう。理解のできない行動に対して、シェリスは素直に尋ねた。

「今の行動には一体どのような意味があるのですか？」

「いや、このビル、街中なのに圏外だったから」

苦笑いを見せ、霧輝は階段を指差して続ける。

「外に出よう。とりあえず、電波の届く場所まで行かなきゃ」

## 第二境『学校』

霧輝はシェリスと二人、早朝の道を歩いていた。霧輝は制服で、シェリスは淡い色のフレアスカートに白いTシャツを着てカーディガンを羽織っている。シンプルな服装なのにすれ違う全員の視線を釘付けにする　ところ、いかに容姿が優れているかが分かる。

何故このような状況になっているかというと、始まりは今朝のこんな会話が発端だ。

『今日は学校に行くから、家で留守番してもらえるかな』

『何故ですか？　私は使命がある以上、常にキリキの傍に控えるつもりです。そこから外れた行動を取らなければならない理由が理解できません』

『いや、生徒でもない人間が学校に来るのは許可されてないんだよ。シェリスが付いて来ると色々と面倒が起こるから、それを回避する意味でも、家に居て欲しいんだよね』

『キリキはこの国の特別階級だと記憶しています。故に、私が傍に控える許可程度は取得可能だと判断します。また、色々な面倒と言われても、具体的な実例を示されなければ従いかねます』

『・・・・・・・・・』

そのような感じで、最終的に霧輝が言い負かされて現状へと至っている。もう桜ヶ丘学院も近く、そこに通う生徒達から向けられる視線に霧輝は胃が痛くなりそうな思いだ。

そんな中、曲がり角から光葉が現れ、霧輝に気付いて小走りに近付いて来る。

「あ、霧輝おはよう・・・・・・って、どうしてシェリスさんがいるの？」

「おはよう。いや、ちょっと訳があって」
「おはようございます、ミツハ。私の希望で、キリキに同行する事になったのです。迷惑を掛けるつもりはありませんので、あまり気にしないでください」
「あ、学校見学とか？　シェリスさんって、私達の学校に転入するの？」

シェリスの言葉を聞いて、光葉が勝手に納得する。それに、霧輝はまさしく渡りに船という思いで頷いた。

「そうそう。まずは一日見学して、良かったら転入の手続きをする予定なんだよ。幸い、明日明後日は土日で休みだからね。もしそうなったら、色々と面倒を見てもらってもいいかな」
「オッケー、任せなさい。バッチリサポートしてあげちゃうんだから！」
「助かるよ」

快諾して胸を張る光葉に礼を言い、三人並んで校門を潜る。その際、警備員がシェリスを訝しげに見ていたが、皇名である霧輝と一緒にいた事から咎められる事は無かった。

「それじゃ、僕はシェリスに付き添って校内見学の手続きをしてくるから」
「ん、了解。それじゃ、教室でね」

玄関で光葉と別れて、スリッパに履き替えたシェリスを伴って職員室へと向かう。

「ん？　そこにいるのは梳美咲か？」

職員室まで辿り着き、いざノックをしようとした所で、横合いから声を掛けられて振り返った。そこにい　たのは見事な和装の美女だ。腰に二振りの刀を佩いて、口の端に鉄針を銜えている。霧輝のクラス担任である香村　梓だ。
いつも白衣に紺の袴なのだが、ここまで袴姿が似合う女性は珍しいだろう。

「香村先生。今日は遅かったんですね」
「何、体育館裏でタバコを吸っていた不届き者を見つけてな。シゴいていたらこんな時間になってしまったんだ。それにしても――」

話しながら、香村の目がスッと細くなる。

「――女連れで登校とはいい身分だな、梳美咲？」
「違いますよ。しばらく彼女と寝食を共にする事になったのですが、彼女が校内見学をしたいと言ったので連れてきたんです。それで、申請のために職員室までわざわざ来たんですよ」

万が一にでも罰則が必要と判断されれば、この教師は相手がどんな偉い身分であろうと相応の罰を与える人間だ。故に、シェリスを視線で制して霧輝が話を作る。そんな霧輝の言い訳が通じたのか、香村から剣呑な空気が消える。

「そういう事情なら構わない。ただ、事前に連絡は入れたのか？校内見学をしたいにしても、事前に連絡をしなければ通らんぞ」
「あー、どうにかなりませんか？」
「・・・・・・・・・ふむ。既定されている校内見学のコースではなく、ただ校内で授業を見学するだけなら、何とかなるだろう。その辺りは私がやっておくから、梳美咲はその少女、あー――」

「シェリスです」
「――そのシェリスという少女を連れて教室に行け。お前が連れてきたのだから、責任持って面倒を見ろ」

そこまで言って、香村は職員室へと入っていった。霧輝も、言われた通りに教室にシェリスを案内する事にする。霧輝の所属する二年四組の教室は三階の中央階段正面にある。まだ朝も早いのであまり人のいない教室に、シェリスを後ろに連れて入る。
と、教室内にいた生徒達全員の視線が霧輝達に向けられた。
まず一瞬の沈黙があり、そのあと、ざわざわと近くにいる生徒同士で会話を交わし合う。

（おい、マジで女の子連れてるぜ）
（ホント、いいご身分だよなぁ。俺もあやかりたいぜ）
（何を考えてるのかしら）
（自慢して喜んでるんじゃない？）

聞こえて来る言葉は全て、お世辞にも友好的とは言えないものだ。いつも通りのそれを軽く流して、シェリスに向き直る。

「チャイムが鳴るまでは近くにいていいけど、チャイムが鳴ったら教室の後ろの方に行ってくれ。そうしないと、他の人に迷惑が掛かるから」
「分かりました。ところで、周囲からはあまり良く思われていないのですか？」
「・・・・・・ずばり聞くね。まあ、この歳で皇名なんて身分だし、休む事も多いから。印象が悪いのは仕方ない事だよ。別に、そういうのは慣れてるからね」

普通は聞き淀む所を躊躇無く聞いてくるシェリスに苦笑いを浮か

べて答える。

「そういう人達の気持ちも僕は分かるからね。僕だって、もし逆の立場ならいい印象は抱かないと思うから。何か、人に言えないような事をして皇名の位を手に入れたと疑う。本来皇名の位を得られない歳でなった人間がいれば、それが当然だから」

「納得しました。つまりは羨望とやっかみ、という事ですね」

「うーん。否定はしないけど、もう少し柔らかい言い方を覚えた方がいいよ。今みたいな状況で言えば、当て擦りや嫌味に聞こえるから。僕はシェリスがそういう性格じゃない事を知ってるけど、他の人はシェリスを言動で判断するしかないからね」

やんわりとたしなめて、霧輝は鞄を自分の席に置く。それから教室を見回して、小さく首を傾げた。

「どうかしましたか？」

「いや、光葉がいないな、って。光葉は僕と違って全員から好かれてるから、心配する必要はないだろうけど、ちょっと気になってね」

答えて少し黙考し、近くにいた生徒を捕まえた。

「ごめん、ちょっと聞きたいんだけど、光葉見なかった？」

「光葉ちゃんなら、『柚花ちゃんの所に行って来る』とか言ってたけど」

「あー、あいつの所か。分かった。ありがとう」

お礼を言って戻って来た霧輝は、シェリスから疑問の視線を投げかけられて、肩を竦めつつ説明する。

「中等部の後輩に柴桜　柚花っていう生徒がいるんだよ。契約術の天才で、年齢制限が無ければ皇名確実の娘で、光葉のお気に入りなんだ。まあ、柚花を好いてるのは光葉だけじゃなくて、学院のアイドルみたいな存在かな。一応、同じマンションだよ」

「一応、ですか？」

「基本的に同じマンションで生活してるけど、家業の手伝いでマンションに戻って来ない事も珍しくないんだ。週に一度は実家の方に泊まるみたいだし、マンションにいるのは週三日か四日じゃないかな。それで学校の方を休んだ事はないから、本当にすごいよ」

暗に自分には無理だというニュアンスを込めて言う。そして実際、霧輝は去年も出席日数ギリギリで、進級も危ぶまれたほどだ。というか、普通の生徒だったら完璧にオーバーしていて、そこは皇名という階級のおかげである。

（いや、休んでるのも大抵皇名の仕事だし、当然の処置か）

思い直して頷く霧輝に、シェリスが首を傾げる。そんな二人の元に、先ほどの陰口に参加していなかった一人である大柄な少年が近付いてきた。銀髪の鋭い双眸を持つ少年は、親しげな笑みを浮かべて片手を上げた。

「よう、霧輝。風邪は治ったのか？」

「あ、おはよう銀月。風邪は方便だよ。本当は別件」

「おはようございます。キリキ、どちら様ですか？」

「・・・・・・槍術師の都竹　銀月だよ。見ての通り獣人の《蒼狼族》で、僕を除いた、学内武芸ランキングで高等部第一位でもあるんだよね」

説明を受けて、銀月はニッと笑みを見せる。

「都竹　銀月だ。霧輝の友人をしている。まあ、クラスの全員が敵じゃないという事だ。よろしく、ええと―――」
「シェリス・ライセキラ・ストラトラシアです。こちらこそ、よろしくお願いします。呼ぶ時は名前で構いません」
「そうか。よろしく、シェリスちゃん。で、霧輝。なんで部外の女の子を連れてきてるんだ？　彼女って訳じゃないんだろ」

銀月の問いに霧輝は頷く。

「ちょっと訳ありでね。僕が面倒を見る事になったから、選択肢の一つとしてここへの転入も考えてるんだ。今日は事前に校内見学をしてもらおうと思って」
「お前も大変だな。皇名っていうのは、戦うだけじゃなくてそういう事もしなくちゃいけないのか？」
「人によってはね。適正もあるから、ある程度社会に適応できる人じゃないと任されないよ。ただでさえ人間離れした実力なのに、性格まで人間離れしてる人が多いから、護衛とか、他人と行動する任務をできる人は限られるんだよね」

例えば、ドイルは絶対に不可能だ。二十四時間テレビカメラやストロボに追いまわされる生活など要人にはさせられない。他の面々も、性格面にどこかしら欠陥がある。そのため、要人護衛や会場警備等で重要度の高いものは、自然限られた皇名に任される事になる。

「僕は高校生だから都内だけの護衛だけど、メティとかは国外まで出るぐらい忙しいみたいだよ。二月に一度はお土産渡されるし」

そのお土産にしても、警護の仕事みたいな余裕のあるものだからこそで、妖鬼に対する処断で動く場合はそんな余裕など無い。臨機

応変に対応できるメティは、貴重な戦力として、かなりの頻度で国内外のあちこちに出張させられている。

「あの人も大変だな。そういや、霧輝も長期休暇になると、たまに部屋を空けるよな。やっぱり、お前も駆り出されてるのか？」

「歳も考慮して、比較的安全な場所にだけどね。それでも、イギリス王家との対談に同行したりとかするよ。護衛はともかく、あれはストレスが溜まるよ」

本来霧輝などには縁が無い上流階級の世界で、世界でも最強クラスの武士として晒されるのだ。そういった場所では、霧輝の存在は恰好の娯楽でしかない。歳と階級だけは立派で、精神性は小学生並の集団から向けられる好奇の視線は、耐え難いものがある。

「あんまり想像できないな。俺にとっては完全に雲の上の世界だ」

「その雲の上の世界に僕は出させられてるんだけどね。ただの護衛なのにスーツを着て護衛対象に付き従って。外周警備に回して欲しかったんだけど、最年少の皇名だからってそれも許されないし。何度も逃げたくなるよ」

「俺には理解できない悩みだな。という事は、そっちの娘もどこかいいとこのお嬢様なのか？」

視線を向けられて、霧輝が答えるよりも早くシェリスが首を横に振る。

「違います。私はキリキと対等の関係を望んでいます。それに、金銭的なやり取りはありませんから、契約と呼ぶ事もできないでしょう。私がキリキの傍にいる事を望み、キリキが承諾した関係です」

「・・・・・・シェリス、誤解を誘発するような言い方はしないでほしいんだけど？　シェリスは個人ではなく一組織の使者という形で要求を持ってきて、僕は拒否する理由が無かったから承諾した。それ以外に何もないでしょ」

「？　私は初めからそう言ったつもりですが」

言葉を受けて首を傾げるシェリスに、霧輝は嘆息して首を横に振って説明を諦めた。

「はは。つまり、その娘も皇名のしがらみの一つって事か。本当に大変だな」

「どうだろうね。どうも、僕個人に掛かる問題のような気もするけど。それより、遊騎はどうしたの？　姿が見えないけど」

「ああ、あいつなら今日は休みらしい。新しく構築したプログラムに欠陥が見付かったとかで、しばらく徹夜だと」

肩を竦めて見せる銀月に、霧輝は苦笑する。遊騎の言う新しいプログラムは、十中八九隠しカメラや盗聴器の統括をするプログラムだろう。霧輝が把握しているだけでも、学院内にそれぞれ五十は設置されている。

（根っ子の所で善良だから、別に構わないけどね）

女子更衣室やトイレに仕掛けたり、集めたデータで人を脅すような人間ではないから、霧輝を含めて、カメラや盗聴器に気付いている人間は皆見逃している。

そんな所に現れたのは、先ほど別れた光葉だ。一人ではなく、中等部の制服を来た少女を連れている。

「あれ、霧輝もう来てたんだ」

呑気な顔でそう言った光葉を置き去りにして、中等部の少女が全力ダッシュ。一息に間合いを詰めて霧輝へと飛び付いて来る。椅子に座っている状態でそれを避けられるわけも無く、霧輝は努力と根

性でそれを受け止めた。

「先輩！　柚花は今日もまた先輩と会えて嬉しいです！」

「はいはい。とりあえずちょっと離れようか。それと、走ってきた勢いのまま飛びつくのはすごく危ないからやめようね」

「昨日の分も霧輝先輩分を摂取しないと柚花が死んでしまいます！　死因は寂しい病です！」

「それはまた、斬新な死因だね」

お前はどこのウサギだと言いたくなるセリフだが、柚花は兎の獣人ではなく、八重桜の《樹人》――――西洋で言うところのドリアードである。彼女らは桜色の髪と瞳を遺伝として持ち、あらゆる草木と契約も無しに心通わせるという特性を持っている。

そして、もう一つの特徴がこの過剰な愛情表現だ。樹人は無意識にその人物の本質を見抜き、その本質に惚れるのである。それ故に相手を完全に信頼し、どこまでも心を許した結果としてこの過剰な愛情表現がある。

それ故、樹人に好かれる事はその人となりが素晴らしい物だという証明になる。

「相変わらず柚花ちゃんは霧輝まっしぐらだな」

「素晴らしいですね。樹人が他の人種を愛する事は滅多にありません。人の本質を見抜くが故に自己と同等以上の正しさを相手に求めます。その目に同じ樹人以外が適う事など、皆無と言って構わない程です。これには素直に感嘆せざるを得ません」

霧輝にギュッと抱きついて離れない柚花に銀月が笑い、シェリスが賞賛する。その中でただ一人、光葉だけが常識的な行動として柚花を引き剥がしに掛かった。

「離れなさい、柚花ちゃん！　霧輝だって男の子なんだから、そんな事したら襲われて危ないんだからね！？」
「嫌です。先輩分が補給し終わるまで離れません！」
「駄目！　とにかく離れなさい！」
「光葉先輩の言葉といえども、これは譲れません！」

どうにかして霧輝から引き剥がそうとする光葉と、そうはなるまいと抱き付く腕に力を込める柚花。女の子二人にもみくちゃにされて、霧輝は助けを求める視線を銀月に向ける。
だが、向けられた銀月は肩を竦めて一言。

「チャイムが鳴るまで我慢しろ」

その言葉通り、結局チャイムが鳴るまで二人の攻防は続いたのだった。

午前の授業が終わり、午後に武芸科の授業を控えた昼休み。霧輝達は食堂で食事を取る事にして、高等部校舎と中等部校舎の間にある大きな食堂棟へと向かった。
食堂棟は、一階を丸々使った学生食堂と二階の購買に収まらず、三階にはカフェテラスと職員食堂が、四階には大学部の人が出しているテナントが入っている。学生食堂は質より量、カフェテラスは量より質を求める学生で賑わい、大学部のテナントはそれらが入り混じって混沌としている。

「いつも思うけど、いくら高等部と中等部兼用の食堂だからって、ちょっとやり過ぎだと思うんだよね。全部合わせたら、下手したら初等部の子供も入るだけの収容人数だし」

霧輝の言葉に、光葉が苦笑しながら頷く。

「確か、学食が六百人、カフェテラスが二百人、大学部のお店が三百人だっけ？」

「職員食堂が百で合計千二百人だな。ただ、大学部の店は当たり外れがあるよな。今はどこが一番人気だったっけか」

「環境保護学研究会だったかな。安くて量があって味も水準以上らしいよ。量の方は調整ができて、男女問わず人気らしいね。一番売れてるメニューは確か麻婆豆腐定食だったかな。次点がヒレカツ定食で、どっちもすごく美味しいらしいよ」

三人でそんな会話を交わしながら階段を上る。今日は学生食堂の方が混んでいたので、せっかくだから四階まで行こうという話になったのだ。シェリスはそんな三人の後ろに付いて階段を上っている。チャイムが鳴ってすぐに食堂の方へ来たので、柚花はいない。

やがてという程でもないが、四人の耳に喧騒が聞こえてきた。

「お、今日は当たりだな」

「当たり、ですか？」

「やってるのが大学部の学生だからね。その人達の都合で開いたり閉まったりするから、開いてる店の数がその日によって違うんだ。今日は喧騒が大きいから、開いてる店が多いっていう判断だよ。それを端的に当たりって言うんだよね」

首を傾げたシェリスに説明して、階段の向こうを指し示す。四階の賑わいが、もう目に入る位置まで来ていた。

「シェリスさんは何か食べたい物とかある？　うちの大学部の人って酔狂な人ばかりだから、大抵の食べ物はあるわよ」

「一番すごかったのは珍味研究会だったよね。メニューに虫の名前が羅列されてた時は目を疑ったよ。三日で消えたけど」

イナゴや蜂の子等はともかく、蝉やカブトムシの名前を見た時は全員が引いた。ただのユニークだと思った生徒が注文して本当に虫が盛られて出てきた時は、四階が阿鼻叫喚の地獄絵図になったほどだ。

霧輝の言に、注文した生徒こと銀月が顔を顰める。

「嫌な事思い出させるなよな。ちょっとしたトラウマだぞ、あれは」

「あはは。それでも完食したのは尊敬するよ。———まあ、とりあえず君の好きな物を上げてみたらどうかな？　僕達は特に食べたい物も無いから、シェリスが言ってくれたら悩む時間が省けるし」

霧輝に促されて、シェリスは少し迷いながらも口を開く。

「・・・・・・それでしたら、牛丼、という物が食べてみたいです」

「牛丼ね。銀月、吉原屋って今日は出てる？」

霧輝が少しギリギリなネーミングのお店の名前を言って、それを受けた銀月が階段横の掲示板を見る。そこには今あるテナントの名前が羅列してあって、吉原屋という書かれたプレートの上にも、営業中を示すランプが灯っている。

「ああ、やってるな。あの店なら、ウェイトレスがあれだからすぐに座れるだろ」

「そうね。じゃ、シェリスさん、行きましょうか」

光葉がシェリスの手を引いて歩き出した前で銀月が人を掻き分け、最後に霧輝が付いて行く。霧輝が先頭を行けば人込みも左右に割れるだろうが、そういうズルをしないのが、三人の暗黙の了解だ。

「で、あれが吉原屋ね。味も良いし男の子には量もあるんだけど、見ての通り、接客に難有りで人入りはそこまでじゃないのよね」

光葉が視線で示す先、ウェイトレスの男達が客からの注文を取っている。その態度は実に堂々としたもので、ニコニコ笑顔で接客の態度だけを見れば十分に合格だ。

着ているのがフリフリのエプロンドレスでなければ。

「確か、当初は女性部員がウェイトレス、男性部員が厨房で料理をする、って話だったらしいけど、男勢の料理の腕が壊滅的という事実が発覚して売り場変更。ただし、衣装がウェイトレスの物しかなく、再発注の予算も無かったからこうなったんだよな」

「うん。初めは受けてそれなりに人も入ったけど、毎日見てると気持ち悪い以外に感想無いからね。それでも味はいいから、こうして人が入ってるんだよね。でも、テナントを出してからもう一年以上経つんだし、ウェイターの制服を発注すればいいのに」

「私としては、一年もあったんだから料理ぐらい覚えられたと思うんだけど」

銀月がそうなった理由をシェリスに説明した後に、霧輝と光葉が酷評する。まあ、目の前でフリルたっぷりの衣装を着た男にうろつかれれば酷評もしたくなるというものだ。

ある意味シェリスにカルチャーショックを与えかねない店のテーブルに座る。

「牛丼四つ。あ、量とか注文ある？」

「俺大盛りで」
「私は小盛りでお願い。シェリスちゃんは？」
「普通の量が分からないので、普通の量でお願いします」
「了解。じゃあ、大盛り二つと普通と小盛りが一つずつでお願いします」

注文を言うと、ゴツイ男性ウェイトレスは厨房の方へ走っていった。男なので、下着が見えそうな――――見たら絶対吐く――――豪快な走りだ。ただ、それでも埃が立たないようには気を付けているのが微妙だ。
それを見送りながら、シェリスが一言。

「世の中には不思議な場所があるのですね」

端的なその言葉に、霧輝達は顔を見合わせて苦笑した。それから雑談をしていた三人の所に牛丼が運ばれて来る。光葉の前には普通のお店で使っているような大きさの器でご飯を半分ほどに盛った物が、シェリスの前には同じ器で一杯分の量の物が置かれる。
そんな中、霧輝と銀月の前に置かれた丼に、シェリスが目を瞬かせる。

「キリキ、その量を食べきれるのですか？」
「まあ、毎日それなりに動くからね。これぐらいは普通に食べられるよ」
「・・・・・・朝夕もその量に合わせた方が良いですか？」
「夕飯はともかく、朝からこの量に合わせたら、ちょっと辛いんじゃないかな。別に、量が足りない訳じゃないし、今のままでいいと思うよ」

眼前のラーメン丼よりさらに一回り大きな丼を見て苦笑いしなが

ら答える。それに反応したのは銀月だ。

「ちょっと待て！　朝夕とか夕飯とか、まさか、お前ら一緒に住んでるんじゃないだろうな！」

「ちょ、銀月、声がでかいって。注目されてる」

「そんな事はどうでもいい！　まさか、お前はこんな美少女と寝食を共にしていると言う訳じゃないだろうな！　そんな裏切りは俺が許さんぞ！」

「銀月、うるさいわよ」

喚く銀月の手に光葉が冷静な動きで銀月の丼から抜き取ったフォークを刺す。ぎゃー、と叫んでのたうつ銀月を見下ろして冷静に告げる。

「あんたは一々反応が大げさ過ぎるのよ。放っておいたって霧輝がこの娘に手を出せるはずが無いでしょ。それぐらいなら、とっくに柚花ちゃんに手を付けてるわよ」

「それもそうか」

光葉の言葉に、銀月は一瞬前までの取り乱した様子が嘘だったかのように冷静さを取り戻す。それを見て、霧輝は思った事を素直に口にした。

「なんていうか、光葉と銀月って仲がいいよね」

「誰がこんな奴と仲がいいのよ！」

「うぎゃあああ！」

「・・・・・・・・・光葉、何もしてない銀月を刺すのはやめた方がいいと思う」

再びフォークを刺されてのた打ち回る銀月を同情の目で見やって

言う。二度も人体を刺したせいで、フォークは血がバッチリついてしまっている。

「別に騒ぐのは構いませんが、冷める前に食べませんか？」

シェリスがそんな騒動を無感動に眺めて言い、四人はようやく食事を始めた。

ちなみに、銀月曰く、今日の牛丼は血の味がしたらしい。

霧輝達刀剣を選んだ生徒を担当するのは、担任教師でもある香村教諭だ。香村の教育における基本方針は体力と経験で、一年生はひたすら基礎体力作りをさせられ、二年からは基礎もそこそこにすぐ実戦組み手に入る。

「武芸なんていうものは千差万別。自分の型は自分で見付けるしかない」

というのが理由だそうだ。そして驚くべき事に、この教育方法で育った生徒達は全員とまではいかないが、戦場で優秀な成績を残す者が多い。

（まあ、ガチガチに固めた剣じゃ、柔軟な対応なんてできないもんね）

銀月の突きをいなしながら考える。普通、槍は槍、剣は剣で試合うものだが、霧輝と真正面からやり合える剣士がいないための処置だ。ただ、それでも大きな溝があり、銀月に対しても霧輝はほとんど攻めない。攻めたらそこで終わるからだ。

「くそ、一発ぐらいは当たりやがれ！」
「やだよ。刃引きしてあるとはいえ、当たったら痛いし」
「お前はさっきから俺を殴りまくってるじゃねえか！」

授業が始まって小一時間も全力で霧輝を追い回している銀月はもう息が上がってきている。本来ならこんなに早く息が上がる事等ないのだが、何発も入ってはさすがに体力も底がつくのだろう。時間も時間なので、そろそろ終わらせる事にする。
先ほどと同じく槍をいなすと見せて、周囲の空気に同調しながら銀月の意識から外れる。その上で背後に回り、手に持った訓練用の鉄製木刀（？）を首筋に突きつける。

「・・・・・・・・降参だ。ったく、何度見てもすげぇな。どうやったらそんな簡単に背中を取れるんだよ」
「どうやって、って聞かれても。手を合わせてたら、どこが相手の死角か分からない？」
「普通は分かりません。お前が異常なんだよ」

そう言って槍を自身の体に立て掛け、先ほどから体表に浮かんでいた汗を拭う。木刀を下ろした霧輝は、涼しい顔で第三訓練場を見回した。
第三訓練場は高等部校舎と中等部校舎から見下ろせる位置にあり、食堂棟ともう一方にある鍛冶科棟に囲まれたそれなりに広い中庭だ。そんな中で、剣や刀、槍に斧などの近接武器を持った二年生の生徒達が組み手をしている。
ここにいる約四十人は、全員がある程度の練度で完成された生徒達だ。教科の成績表で言うならば、全員が五段階で最高評価を受けた者達である。それはつまり、指南が必要な位置にいないという事だ。それゆえに香村はこんな風に手合いばかりしているのか。

「でも、皆集中し切れてないよね」
「そりゃ、中等部の教室から丸見えだからな、ここは。だが、全員が全員、集中してない訳じゃないだろ」
「そうだね。二割ぐらいはちゃんと集中してるかも」

全体を見回し、その立会いを見て霧輝はそう判断する。だが、それも仕方が無いだろう。普通、剣闘士でも無い限り、衆人環視の中で平然と戦いに集中するなどできはしない。

「皇名はそういう機会も多そうだよな」
「休日なんかにたまにね。僕は学生だから、そんなに公式試合なんか出ないよ。氷坂凍辺りは世界剣闘大会とかに出る事もあるけど、僕はそんな時間の余裕なんてないし。上も、これ以上僕に目立たれるのは困るだろうしね」
「どうしてだ？　最年少って事で十分目立ってると思うが」

怪訝そうに言う銀月に、霧輝は苦笑して首を振る。

「そうでもないよ。先代の侍は傍流と言えども皇族だったからね。あんな事をしたからと言っても、僕が皇族を斬った事に違いはない。功績ゆえに新しい皇名として迎える事になった上層部の人達は、これ以上皇族の機嫌を損ねないように必死だから」
「勝手に皇名にして、勝手に迷惑に思ってるってか。本当に腐ってるな」
「誰だって、感情を無視して仕事できるわけ無いからね。なんせ皇族は、この世界で数人しか残っていない《神人》だから。実際、数人を除いて、僕は良く思われてないし」

神人。その言葉に銀月は黙り込む。それは畏怖の現れであり、遣

る瀬無さもある。だが、それでも神人に逆らうなどあり得ない。神の力の一片を受け継ぐ神人を止めるなど、人にできる事ではないからだ。この世に、神人と正面から戦える種族は存在しない。

（できるとすれば、それこそ神か、竜ぐらいだろうね）

そう思い、霧輝の視線は自然と高等部校舎前に佇む少女に向く。今は何の気配も出していないが、絶大な力を秘めた竜の少女なら、あの神人とも対等以上に戦えるだろう。ただ、霧輝としてはそんな事にならなければと本気で思う。

「・・・・・・・・・そんな事になれば、街が消えかねないからね」

過去に一度だけ見た神人の猛威を思い出し、呟く。

「？　何か言ったか？」

「別に何も言ってないよ。それより、まだ休憩に入らないのかな。そろそろ全員が疲れ始めてるように見えるけど」

「ふむ。では、そろそろ貴様らを除いて全員休憩にするか」

「「――――げ。香村先生」」

掛けられた声に、銀月と霧輝が声を揃えて振り返る。鉄針を上下に揺らして笑みを浮かべているが、目が全く笑っていない。完璧に怒っている。

「まあ、梳美咲は皇名になるだけの実力があるから良しとしよう。強い事はそれだけで正義だ。だが、お前は違うよな、都竹？」

「は、はい！　すみませんでした！」

銀月、プライドも何も無く土下座。いやまあ、この教師を前にした対応としては間違っていないのだが、それでも霧輝はちょっとぐらい躊躇は無いのだろうかと思ってしまう。

「ふん。とりあえず、後で十人連続組み手をしてもらおう。それよりも、新文がどこにいるか知らないか？」

「遊騎ですか？　プログラムの見直しをするとかって聞きましたけど、家にいるんじゃないんですか？」

「いや、家の方にも携帯にも電話をしたんだが、出なくてな。ちょっと面倒な案件が発生して、あいつの情報網を頼ろうとも思ったんだが。知らないなら別にそれでいいんだ」

香村にしては珍しく歯切れの悪い言葉に少し違和感を覚えつつも、霧輝は別の方法を提案する。情報通なら、もう一人心当たりがある。

「その案件って、柚花だと駄目なんですか？」

柚花はこの学校に存在するほぼ全ての非動物と契約している。そうでなくとも、樹木の全てを味方に付けられる柚花なら、植物さえあればどこでも情報を引き出せる。

霧輝のその案に、香村はやや苦い顔になる。

「あいつは中等部だからな。高等部の案件であいつを動かすのは、そっちの教師をまず説き伏せる必要がある。それに、書類上の手続きが色々と面倒なんだ」

「・・・・・・要は、高等部の教師が協力を仰ぐ事に問題があるんですよね？」

「？　確かにその通りだが・・・・・・・・・まさか――――」

「そうです。僕が柚花との間に入れば問題は無いでしょう。高等部の一生徒が個人的に中等部の生徒から協力を受けても、それは個

人の交友関係の問題ですからね。僕が皇名という事も合わせて、文句を付けるような事はしたくてもできないと思います」

どうでしょう、と問い掛ける霧輝に、香村は眉を寄せて唸り考える。だが、それ以外に現状の打開策を思い付かなかったらしく、渋々といった様子で頷いた。

「仕方が無いな。放課後、職員室に来い。柴桜と、協力者も数人なら構わん」

「分かりました」

「まあ、案件自体はどうという事は無い。あまり気負ったりする必要は無いからな」

それだけ言って、香村は休憩を告げるために組み手をする生徒達へと向かって行った。

時間もすぐに過ぎて放課後になり、霧輝は柚花とシェリスを連れて高等部職員室にいた。

「ふむ。結局その二人なのか」

「あ、いえ。やっぱり向き不向きがありますから。外せないメンバーはともかく、他は内容で決めようかと思ったんですよ」

「なるほど。確かにその通りだな」

霧輝の言葉に納得した様子で頷き、香村は自分の机の引出しを開けて書類を取り出した。一枚目には《第一案件Ｂ》と書かれている。

「Ｂ、という事は、危急ではないがそれなりに重要度の高い案件

という事ですか」
「私と先輩、二人の初の共同作業としてはまあまあ及第点ですね」
「いや、一応シェリスもいるし、必要なら迷わず増やすからね？」
嬉しそうな柚花にそう言って書類を受け取る。それを捲って、霧輝の目が細くなった。その反応を見て小さく笑う香村に、少し厳しい目を向けて問う。
「これ、Aにしてもいいような気がするんですけど、どうしてBなんですか？」
「優先度を決めるのは教頭だからな。ただ、これに関しては仕方が無いだろう。それなりに経験のある人間でなければ見落としてもおかしくない」
「？　先輩、どういう事ですか？」
横から資料を覗き込んでいた柚花が尋ねる。それに、霧輝は真剣な表情で答えた。
「この、フェンスを縦に二メートルも切り裂いてる所だよ。うちの学校は別に有刺鉄線を張ってる訳でも、返しがある訳でもない。侵入するならよじ登るのが良作なんだ。他の場所にもいくつか穴はあるし、普通、わざわざフェンスを切り裂いたりしない」
「でも、この犯人はそれをしてるんですよね。なら、ただそこまで考えなかっただけだと思いますけど、何かおかしいんですか？」
「まずは切り裂いた長さだ。侵入するだけのために、わざわざ二メートルも金網を切り裂く必要はない。一メートルも切れば、人間なら十分に通り抜けられる。それを、わざわざそうしなかったのには何らかの理由があるはずだ」
「・・・・・・例えば、二メートルの穴を開けなければ通れないほど大きな体を持っている等の、不可避の事情を抱えているという

事ですね」

答えた香村の言葉にシェリスが続ける。そこまで言われて、柚花もやっと得心がいった表情になる。それを見てから、霧輝は説明を続けた。

「後は、切り裂かれた場所だね。ここはあまり人の通らない道に面していて、敷地内は雑木林だ。壁やフェンスを上れない相手にとっては、最善の場所だよ。つまり、こいつはそれ相応の知能を持っている事になる。人目や隠蔽を気にするだけの頭をね」

そう言ってから、霧輝は少し思案の表情を見せる。それに、香村が怪訝そうな顔で声を掛けようとしたが、それよりも早く霧輝が「ただ」と言った。

「この条件の相手を見付け出せと言われると、少し困るんだよね。もう少し早かったら良かったんだけど」

「――――どういう意味だ？」

「これが妖鬼の所業とするなら、なんですけど、該当する鬼を先日斬っているんですよ」

「ああ。あの剣鬼ですか」

シェリスの言葉に、霧輝は頷く。

「これ、発見が昨日の夕方になってますよね。それも、いつもこのコースを散歩してるおじいさんだ。という事は、一昨日の夜からその時間までに行われた事になります。それなら、時間的にも一致するんですよ」

昨日斬った鬼が初めて発見されたのは朝七時三十分。フェンスか

ら出たとすれば、世田谷区経堂駅は方向的にも時間から見ても一致する。それを伝えると、香村は拍子抜けした表情を見せた。

「という事は、校内で発生して、フェンスを裂いて外に出たという事か？　それなら、気にしただけ損という事ではないか。全く、人騒がせだな」

「そうだといいんですけどね」

霧輝は資料を見ながら、呟くように言う。それに、香村を含む三人は怪訝な顔を向ける。資料に視線を落とす霧輝はそれに気付かず、しばらくしてから顔を上げた。

「まあ、何かあったとしても、その犯人は死んでるから問題ないでしょう。何かあれば、その時に片付ければいいだけの話ですからね」

「ふむ。妥当だな。こういう事は以前にもあったのか？」

「高位の鬼なら何らかの目的を持って動く事はままありますよ。トラップだって仕掛けますし、多数の人間を供物に神を降ろそうとした鬼も何度か見ました。ただ、死んだ後に自動で発動するような計画を考えていた鬼は皆無でした。過去の例から言えば、大丈夫だと判断できます。最も危険な日中に何も起こらなかったのですから、多分平気でしょう」

一応学院内を精査する事も少し考えたが、結局それは口に出さずに平気だという判断を下した。過去例から見て、それは待ちがった判断ではない。

それが誤りだったと発覚するのは、もう少し後の事だ。

とりあえずの危険は無いとその場の誰もが判断し、香村もその方向でこの案件を纏める事にした。結局霧輝達の出番は無く、三人は連れ立って職員室から出る。

そこで、霧輝は柚花に頭を下げて謝罪した。

「ごめん、柚花。無駄足をさせた」

「謝らないでください！　柚花は、先輩のためなら地球の裏側にだって行っちゃうんです！　これぐらいの事ならいつでも呼んでください！」

「そう言ってもらえると助かるよ。でも、無駄足まで踏ませて何もしないのは僕の方が納得できないな。この後時間があれば何か奢るけど、どうかな？」

「こ、これはデートのお誘いですか？　絶対行きます！　死んでも行きますよ！」

興奮して承諾する柚花に若干冷や汗をかきながらも頷き、霧輝はシェリスを振り返る。

「という事なんだけど、シェリスもそれでいいかな」

「問題ありません。私がしなければならない事はキリキと共にいる事ですから」

「そうなんだ。じゃあ、そうだな。確か新作が出たって聞いたし《苺々堂》にしようか。別の場所がいいなら、そっちでいいけど」

洋菓子全般に強いのは恋菓堂だが、苺を使ったお菓子は苺々堂が有名だ。恋菓堂もこだわりの強いお菓子ばかりだが、苺々堂の店主が持つ苺に対する執念には及ばない。ただ、苺以外のお菓子が置いてないので、近所ながらも客の食い合いで潰れる事は無い。

二人から異論も出なかったので、霧輝は二人を連れて学院を後にした。

「それにしても意外でした」

霧輝に従ってバスに乗った所で、柚花が言葉通り意外そうな顔で言った。それに霧輝は顔をそちらへ向けた。人がほとんど乗っていなかったので、三人並んで座れたのだ。

「ええと、何か変な所あった？」

「いえ、霧輝先輩がこういった情報に詳しいなんて知らなかったので。私、恋菓堂の方ならチェックしてるんですけど、苺々堂の方は二ヶ月に一度くらいしかチェックしないんですよ。だから、新作が出たのとか知らなかったです」

「ああ、それは偶然。昨日、苺々堂のケーキが好きな知り合いと会って、その時に聞いたんだよ。一度行こうと思ってたから、今回はちょうど良かったよ」

メティが苺々堂を贔屓にしているので、よく話す霧輝はそれなりに苺々堂の事も聞いている。そのため、霧輝としても苺々堂は他の店と比べて敷居がそれほど高く無い。

そうこうしている内にバスがすぐに苺々堂の近くに来たので、三人は代金を支払って降車した。バスは三人を置いて走り去っていく。

「じゃ、行こう」

「はい、先輩！」

「・・・・・・柚花、腕を組むと歩きにくいんだけど」

抱き付いて腕を組んできた柚花に困った顔で言うが、嬉しそうな顔でさらに体を寄せて来ただけで離れる様子は無い。幸い右腕で無かったので、諦めて先を急ぐ事にした。

その際にシェリスが何か思案しているのを見て、首を傾げる。

「シェリス、どうかした？」

「・・・・・・いえ。特に問題はありません。ただ立っていては

日が暮れてしまいますから、早く行きましょう」
「？　まあ、なんでもないならいいけど」

シェリスの言葉に、気を取り直して苺々堂を目指す事にする。といっても、バス停から徒歩一分、ほとんど目と鼻の先だ。この場所から、すでにはっきりと苺々堂の看板が見えている。迷う余地など一ミリたりとも存在しない。

「あ、そうだ。苺々堂の店主は見かけ無骨だけど繊細だから、驚いたりしないようにね。あの人、本当に簡単な事で泣き崩れるから」
「・・・・・・・・・気に留めておきます」

店の前で一つ注意事項を告げてから、霧輝は扉を開けた。その際に、するり、と柚花が絡めた腕を抜いて離れる。

「いらっしゃい」

そう言って三人を迎えたのは、ヤクザも逃げるんじゃないかという大男だ。無骨な顔と鍛え抜かれた体に、パティシエの服が見事に似合っていない。これが世界大会で優勝した経験を持つのだから、世の中というものは分からない。

「楼峰さん、新作が出たって聞いたんですけど、まだありますか？」
「ああ、大丈夫だ。まだあと五つある」
「じゃあ、それを三つと紅茶を三つお願いします。紅茶の方は新作に一番合うやつで。それと、テイクアウトじゃなくてここで食べていきます。――――僕が持っていくから、二人は先に席に着いてて」

注文を伝えてから二人を先に行くよう促す。それから、いそいそ

と紅茶の準備を始めた楼峰　天欧に向き直る。

「元気でしたか？」

「ああ。そっちは聞くまでも無さそうだな。可愛い女の子を二人も連れて歩くぐらいだ。人生楽しくてたまらないだろう」

「彼女達はそういうのじゃないですよ」

チラッとテラスの方に座って歓談している二人を見やりながら肩を竦める。そんな霧輝に対して、楼峰はやれやれといった様子で首を振る。

「お前もそろそろ、彼女ぐらい作ってもいいと思うがな」

その何気ない言葉に込められた意味に、霧輝は苦笑と悲嘆が入り混じった顔になる。

「まだ、僕はそういう事ができるほどに割り切れてません。あの事について心の整理ができるまで、自分の事なんて最低限の事しか手が付きませんよ」

「・・・・・・天璃は、そんな事を望んでいないと思うぞ」

「こればっかりは、僕自身の心の問題ですから。今度、線香を上げにきます」

ケーキと紅茶を受け取り、悲哀の色が強い笑みを一瞬だけ見せて踵を返す。その時にはもういつも通りの顔で、表向き平然とシェリス達の所へと向かった。

「先輩、何を話してたんですか？」

「どっちかが僕の彼女か、って聞かれたから、どっちも違うって答えてきただけだよ」

「えー、柚花が彼女だって答えてくれても良かったんですよ？」
「考えておくよ」

上目遣いに言ってくる柚花の言葉を流してケーキを並べる。新作のケーキは、真っ赤な苺をふんだんに使っているためにものすごく赤い。それが見た目の美しさに繋がっているところがプロの妙技なのだろう。

「美味しそうですね。カロリーは高そうですが」
「まあ、シロップとかも躊躇無く使ってるから。でも、そこを気にしてたら食べれないからね。味は大丈夫だと思うし」
「そうですよ。ケーキを食べたらその分運動すればいいんです！さあ、味が落ちる前にいただいちゃいましょう！」

そう言って柚花が率先してケーキを切り崩した。それを口に運び、顔を輝かせる。

「美味しいです！　今まで食べた中で一番美味しいかもしれません！」
「・・・・・確かに美味しいですね。お母様の作ったケーキよりも美味しいと思います」
（基本的にお母さんが基準なんだな）

柚花につられるようにして食べたシェリスの感想にそう思う。シェリスと話していると、結構な頻度で母親の話が出てくるのだ。きっと、それだけ良い母だったのだろう。

「うん。確かに美味しいかも」

一口食べてそう感想を漏らす。見かけは甘過ぎて後を引きそうだ

が、濃い苺の風味とシロップの甘さが口の中で一気に広がるのに、飲み込んだ時にはさっぱりしている。それのおかげで、二口目以降も同じ様に味を楽しむ事ができる。

「ですよね。売り切れてなくてラッキーです。また機会があれば絶対に買いましょう」

「確かに、味の批評が広まったら、放課後まで残ってる事はなさそうだね」

「同意します」

三人で賞賛しながらケーキを食べていると、カランコロン、と鳴って店の扉が開けられた。開け放たれた出入り口から、見知った顔がニコニコしながら入ってくる。

そして、振り返った霧輝はその人物と目が合った。

「・・・・・・メティ」

「あれ、霧輝。こんなに早くまた会うなんて珍しいじゃない。天変地異でも起こるのかしら。だったら急いで避難しないと」

「こんな事で天変地異が起きてたら、今頃地球から人類は消滅してるよ」

霧輝の返答に「冗談よ」と笑って返して、メティは霧輝達が食べているのと同じ新作のケーキとコーヒーを注文。それを受け取ると堂々とした所作で霧輝達のテーブルに座った。

そんなメティを、柚花が不機嫌になって睨む。

「むー。誰も座っていいなんて言ってないですよ。別のテーブルに座れば良いじゃないですか」

「一人で食べたって寂しいじゃない。あんまり狭量だと、霧輝に嫌われちゃうわよ？」

「ぐっ。し、仕方がありません。例外的に今回だけ許可します。次はないですから」

柚花を簡単に言い包めて微笑み、メティはコーヒーにミルクと砂糖を入れてかき混ぜる。メティはかなりの甘党で、今も大量投下された砂糖に柚花がうっと顔を背ける。柚花の場合、コーヒーはブラックで紅茶もストレートで飲むから、その分キツイ光景だろう。

「シェリスは平気なんだ。普通、初めて見た人は何かしら反応するんだけど。紅茶には砂糖を一つしか入れてないけど、実は甘党だったりとか？」

「いえ、私ではなくお母様がたくさん砂糖を入れるのです。私は砂糖もミルクも一つしかいれません。ブラックはブラックで体に悪いですから」

「正論だね。僕もそれぞれ一つかな。紅茶は種類によっては二つ入れることもあるけど、そっちも基本的には一つだよ」

霧輝の場合、基本的に普通の味付けを好んでいる。濃く味付けされた物が食べられないという訳ではないが、率先して食べようとは思えないのだ。この嗜好は光葉も同じだから、おそらくは孤児院で育ったためにこういう風になったのだろう。

（そういえば、院の食事っていつも薄めだったかも）

ふと孤児院で食べていた味を思い出して感慨に浸る。しかし、袖を引っ張られてすぐに現実へと引き戻された。

「何、シェリス？」

「少し、席を外します。すぐに戻ってくるので、待っていてください」

「分かったよ。まあ、とりあえず、気を付けてね」

霧輝の言葉にコックリと頷き、シェリスは店を出て行った。そのまま、霧輝達から見えない位置まで行ってしまう。

「先輩、どうかしたんですか？」

「まあ、ちょっとね。シェリスにもシェリスの事情があるって事。詮索は良くないから詳しくは聞いてないけどね」

「そうね。彼女の場合、そこそこ複雑な背景がありそうだし、わざわざ聞くのはいい事とは言えないわね」

シェリスがここにいる理由を知っていて、事情も理解できる霧輝と、竜が人の中にわざわざ来ている事から複雑な背景を察しているメティが笑って答える。

「そう言えば、イギリスのお姫様が近々来日するかもって話は聞いた？」

「いや、聞いてない。お姫様って、上と真ん中と下の誰？」

「真ん中って聞いたわね。多分、霧輝が指名されるんじゃないかしら。あのお姫様って、霧輝の事を気に入ってるみたいだし」

「勘弁して欲しいよ。神人に好かれても体力が持たないんだよね。あの人種って、素でフルマラソン走っても汗一つかかないし。イギリスのはテンションが高いんだよ」

以前会った時のことを思い出して辟易とした顔をする霧輝に、メティが笑う。だが、柚花の方はとてもそんな余裕など持てない。

「先輩！　今のお話は本当ですか！？」

「本当と言えば本当だよ。会談中にロンドンの街を引き摺りまわされるのを気に入れられたと表現してもいいなら、だけどね」

猛者百人抜きの方がまだマシなんじゃないかという経験がフラッシュバックして、身震いしながら答える。あれは、もはやトラウマのレベルだ。
そんな答えのどこにそんな要素があったのか、柚花はショックを受けた表情を浮かべる。

「あはは。柚花ちゃんもそんなに気にしたら駄目よ。皇名ってそれだけで皇室の婚約者候補なんだから、他国のお姫様に気に入られた程度の事で一々ショックなんか受けてたら大変よ？」
「皇室の婚約者候補！？　そんな話聞いてませんよ！？」
「あら、歴史を振り返れば公然の事じゃない。皇室の五人に一人は皇名とくっ付いてるのよ？　明文化こそされてないけど、適度に血を薄めるのは必要だからね。それならば、可能な限り優秀な血を入れようって事らしいわね」

メティの言葉に、柚花は蒼白を通り越して灰になる。さすがに憐れみを覚えて、霧輝は一応フォローを入れる事にした。

「知ってるとは思うけど、皇室の結婚は半分以上が近親婚。最低限従兄弟同士の結婚にしているみたいだけど、神人の血を薄めない事に関しては相当だよ。そのために国からの管理まで受けてる。つまり、皇室の結婚を決めるのは半分政府になるね」
「となれば、霧輝の名声欲しさに結婚を強要されるかも。ちょうど、御年十七歳になる女性が天皇本家にいる訳だし」
「メティ、人が最低限のフォローを入れておこうと思ったのに、何て事を言うのさ」

霧輝が抗議すると、メティは意外そうな顔で反論した。

「あら、下手に希望を見せるから、いつまでも追っかけてくるのよ？　こういう時は、突き放してあげるのが優しさだと私は思うわ。それとも、利用できるだけ利用して捨てる腹積もりだったの？」

「いや、利用とかそういうつもりは無いけど、ここまで叩きのめす必要はなかったと思うんだけど。確かに優柔不断は悪いと思うよ。でも、それにしたってできるだけ傷つけないような話し方があると思うんだよね」

「無理よ、無理。優しくしようとする方が深く傷付けるわ。こういう時は、きっぱりと断って、きっぱりと諦めさせてあげる方がいいのよ」

「この前、別な娘には『結婚しても別れさせればいい』とか言ってた人の言葉とは思えないよ。まあ、どっちの発言がまともかはこの際置いとくけど」

明らかに今言っている言葉の方が正論だが、先日自信満々に言っていた言葉と正反対の言葉を吐かれると、霧輝としてもさすがに一言物申したくなる。

ただ、これを聞いた柚花の反応までは計算に入れてなかった。

「・・・・・・・・・・・・・ですよね」

「え？」

「・・・・・・・そうですね。別れさせればいいんです。天皇だろうが神様だろうが、恋に階級なんて関係ないんですよね。そうです。何を怯える必要がありますか」

ブツブツと呟く柚花に、どこか変なスイッチでも入ったのかと身構える霧輝。不気味な行動に身を引こうとした瞬間、ガバッ、と柚花が顔を上げた。

「先輩！」

「は、はいっ」
「もしも先輩が他の人を選んでも、柚花は諦めません！　どうやっても、先輩を手に入れて見せますから！」
やっぱり変なスイッチ入ってる、と慄く霧輝の正面で、メティは、これだからこの男は、とでも言いたげに片手で額を押さえた。離れた場所では、ティーカップを磨いていた楼峰すらも、やれやれ、と首を横に振っている。
「・・・・・・何かあったのですか？」
そんな中にちょうど戻って来たシェリスは、呑み込めない状況にキョトンと首を傾げてそう言った。

今日の夕飯はカロリーを抑えた日本食だった。野菜中心のおかずはヘルシーで、多分、放課後に食べたケーキを気にしているのだろうと霧輝は思う。
そんな夕食を終え、皿洗いと風呂掃除を終えた霧輝が戻ってきたところで、シェリスは話を切り出した。
「今日の事は良かったのですか？」
「えっと、どれかな。イレギュラー自体は結構あったと思うし、それに付随した問題もそれなりの数だったから、ちょっと分からないんだけど」
実際、今日起きた問題を数えれば両手の指では足りないかもしれない。
だが、そんなとぼけた言葉にシェリスは首を振って、やや咎める

ような視線を霧輝へと向ける。シェリスの目は、言うまでも無く分かっているでしょう、と語っている。
最終的に霧輝が折れて、やや大げさな仕草で肩を竦めた。
「仕方が無いよ。柚花の能力だと、変に刺激するかもしれないし」
霧輝が言っているのは、香村から聞いたフェンスの件だ。実際の所、霧輝が斬った鬼の行動からして、発生場所から移動する際に発覚を恐れる訳が無い。なぜなら、わざわざ敵を集めて襲撃するような行動を取るような性格だからだ。その行動原理に従えば、門の警備員を殺して外に出るのが普通だ。
つまり、鬼は何らかの目的があって、本来の行動から外れていた事になる。
「一体何を仕掛けていたのかは分からないけど、日中の活動で刺激されない場所にある事は間違いないんだ。なら、可能な限り刺激しない調査方法を取るべきだよ。幸いにも、仕掛けた鬼はもういない訳だし」
「それですが、なぜ、鬼は目的を達成する前に姿を現し、暴れたのでしょう。その点が不可解です。行動が一致していません」
「確かにそうだけど、当人はもう僕が殺したんだ。そればっかりは知りようが無いね。何か背後があったとしても、行動に移される前に学校の仕掛けを解けば問題ないよ。そもそも、鬼の行動原理は人類と違う。考えるだけ徒労だと思う」
そもそも、捕食行動でも領域侵攻でもなく、ただ人間を殺すという行為自体が生物から逸脱しているのだ。快楽殺人者よりも、鬼の行動原理は理解の及ばぬ場所にある。
「その論理だと、明確な組織だった行動はともかく、一時の共謀

ならばあり得るのではありませんか？　人に理解できない行動を鬼が取ると言うのなら、過去の例など当てにならないと思われますが」
「その通りだね。まあそれならそれで、正面から叩き潰すだけだよ。皇名という存在は、そもそも力であらゆる害を破砕する存在だから。それに、そういった事は大規模になればなるほどに時間が掛かるし隠せなくなる。だから――」
「――だから、事を完遂されるまでに叩けば良いと言うのですか？」

シェリスの問いに霧輝は頷く。

「幸いと言ってはなんだけど、何かを仕掛けた鬼が剣鬼の変異体なら、発覚した時点で手遅れというのはまず無いよ。《名持ち》じゃなければ、そこまで警戒する事自体意味がない。そこは絶対だから」
（まあ、言うほど油断ができる訳でもないけどね）

口では否定しながら、霧輝は内心で思う。名持ちの鬼は特異だ。その中には他の妖鬼を無意識下から操るような者もいる。そういうタイプが、裏に居る可能性を霧輝は失念していたのだ。

「・・・・・・・・・その場合、下手に騒ぎ立てるのもまずいけど」
「何か言いましたか？」
「ううん。ちょっと独り言だから気にしないで。とりあえず、僕の結論は変わらないよ。仕掛けられた物を刺激しないように足で調べる。それが最上だ」

呟きに反応したシェリスに最終結論を告げ、席を立った。そろそろ、風呂に入れているお湯が溢れる頃合いだ。

この時はまだ、霧輝も事態を甘く見ていた。それを改めるのは、翌日の午後になる。

## 第三境『対峙』

翌日、霧輝は昨日調達した桜ヶ丘学院高等部の女子制服をシェリスに着せて、高等部の校舎へと足を伸ばしていた。シェリスの転校手続きと、先日の剣鬼が仕掛けた何かを探すためだ。そのための時間はあまり無い。

学院のグラウンドでは、野球部やサッカー部といった普通の部活が活動していて、そこから少し離れた実技訓練場では剣術部等の将来実戦部隊を目指す者達が真剣な顔で剣や槍を振り、召喚術や精霊術の練習をしている。

それらをカフェテラスから眺めながら、霧輝達は人を待っていた。

「遅いですね」

「まだ時間じゃないから仕方が無いよ。いつも、約束の時間ギリギリに来るんだよね。たまに、迷って三十分以上遅れる事もあるし。まあ、この学院の卒業生だから、迷う事はさすがに無いと思うけど」

霧輝がそう言って時計を見た所で、カフェテラスに一人の女性が駆け込んできた。息を切らしながらやって来た女性を見て、霧輝は声を掛ける。

「予想外に早かったね、メティ。そんなに息を切らして、何かあったの？」

「・・・・・・ちょっと・・・・・・・いきなり鬼が出てね。時間ギリギリだったから、走ってきたの。だから、気にしないでちょうだい」

「そうなんだ。・・・・・・とりあえず、座ったらどうかな？」

霧輝に勧められて、メティは深呼吸をして息を整えてから座った。

そして、テーブルの上にあるそれに目を止める。

「校内の地図？」

そこ広げられていたのは、学院内の構造を示した案内図だ。それも、初等部から大学部まで揃っている。たんなる案内図をコピーした代物だが、その内何割かの部分が青と赤で塗り潰されている。その内、初等部校舎は全て青と赤で塗り潰されている。

「とりあえず、異変があれば気付く、または仕掛けるのが不可能な場所を青く塗ってから、初等部の校舎を調べ終わった所なんだよね。見れば解るとは思うけど、調べ終わった場所が赤ね。まあ、その前になんで呼んだのかを説明しないと駄目か」

問いに簡単に答えた後、霧輝はそう言って肩を竦めて見せる。その軽い態度とは裏腹に真剣な目を見て、メティも真剣な顔で続きを待つ。

「端的に言うと、鬼がこの校舎になんらかの仕掛けを施した可能性があるんだよ。その仕掛けを発見するために、不測の事態が起きても対処できる実力者が必要だったんだよ。ただ、残念ながら都内に残ってる皇名でこういう事に動員できるのはメティだけだったけどね。まあ、そこは仕方が無い事だから諦めたよ」

「・・・・・・・・事情は分かったわ。でも、それなら柚花ちゃんを含めた方がいいんじゃないかしら。あの娘の実力は皇名に程近い場所にあるし、何よりも、そういった何かを探す事に掛けてはかなりの能力を発揮するのは分かってるわよね？」

「それは簡単。下手なアプローチをして、その仕掛けを作動させるような事があってはならないからだよ。だから、今回は念には念を押して、足を使って探す事になる。それに、柚花は実戦経験が無

いから、大事な場面で甘さが出る可能性もあるしね。柚花が死んでも、僕には責任が取れないからね」

つまりは足手纏いだとはっきりと言う霧輝に、さすがのメティも黙り込む。そんな中で、シェリスが静かに発言する。

「キリキは、もしかすれば死ぬ可能性があると考えているのですか？」

端的な問い。それに、霧輝は躊躇無く頷いた。

「最悪は、そうなるよ。柚花はまだ、絶対的な存在がこの世にいるという事を理解していないんだ。今考えている最悪が無いと確定するまでは、彼女を引き込むわけにはいかないよ。今回は最悪、神が降りるかもしれないからね」

神。その一言に二人が凍りつく。もし神が降りれば、竜ですら単独では助からないのだ。もしも神の降臨を許せば、東京は消滅する事になる。

身を凍らせる二人に、霧輝は表情を緩めて笑ってみせる。

「まあ、最悪は、だよ。今の所は、鬼が仕掛けただろう危険の種を取り除いておこうという程度だから。仕掛けた鬼――――この前僕が斬った剣鬼なんだけど――――は死んでるんだから、そこまで身構える必要はないよ」

「お、驚かせないでよ。本当にそんな危険な案件なら、防衛庁の本隊も使った大規模な作戦行動を取る事になるじゃない。母校にミサイルが打ち込まれるとか、絶対嫌よ」

「皇名が二人も事に当たるんだから、起きても校舎半壊で済むと思うよ。要は、仕掛けられた何かを破壊できれば良い訳だしね。も

し何かが発動したら、仕掛けられてた部屋をメティが精霊術でドカンとやれば、被害は最小限にできるから」
「・・・・・・自分が実行犯にならないから、気軽に言いますね」
「シェリス、そこは指摘しちゃ駄目だって。そういう不都合な事実は伏せて相手を納得させるのが、賢い人のやり方なんだよ」

詐欺の心得みたいな事を言いながら、霧輝が唇に人差し指を当てる。だが、すでに口に出した言葉は戻せない。

「霧輝、もしもそうなったら、霧輝に命令されて仕方が無くやった、って言うからね」
「あはは。そうならないためにも、何か起きる前に見付けなくちゃね。まあ、もし本当にそう言っても、皇名同士に上下関係は無いから信じてもらえないと思うけど」
「確かに、年下に命令されたと証言しても、信憑性は低いでしょうね」
「ひどい。シェリスちゃんにまで見捨てられたっ！」

霧輝に続けてシェリスからも追い討ちを掛けられて、メティがわっとテーブルに突っ伏して泣き出す。だが、霧輝もシェリスも全く動じない。泣き落としの効果が全く無い事を早々に悟ったメティは、すぐに泣きまねを止めて顔を上げた。

「まあ、ふざけるのはこの辺にして。これから、どう探索をしていくのか聞いても構わないかしら」
「基本は虱潰ししか無いと思う。一応、調べる場所は極力少なくなるようにしてある。ただ、その絞った範囲で見付からなかった場合は、青く塗ってある部分から可能性が高い場所を優先して潰して行く事になる」
「・・・・・・確かに、それぐらいしかないわね。でも、それな

ら人海戦術をした方がいいんじゃないの？　そうすれば、一日で青い部分も含めて全て調べられるわ。その方が効率的だと思うんだけど」
メティの当然の問いに霧輝は「それはできないよ」と首を横に振る。
「そんな事をすれば、都内に潜んだ名持ちに知らせるようなものだ。皇名二人がここにいる事自体がすでに危険を冒してるのに、これ以上名持ちの興味を寄せれば、収拾の付かない事になる可能性がある。それに、そんな事をすれば、その分他が手薄になる」
「あくまで少人数を動かす事で、他の戦闘員を実質的な牽制に使う、という事ですね。他が動かない内に、事を片付けるのが目的ですか」

納得した様子でシェリスがまとめる。メティは、そんな二人の弁に反論を思い付かず、口を閉ざす。そこまで重い内容の話をしながらも、霧輝は軽い笑みを浮かべている。人によっては、霧輝の頭を疑う程の軽さだが、二人は咎めない。

（当然だろうね。この程度の虚勢、二人なら見破るのも難は無いだろうし。ただ、二人とも、少し状況認識が甘いかな。神は存外簡単に降りるってことを実体験として知ってるのは僕ぐらいだろうから、仕方が無いけど）

心の中で冷や汗をかきつつも、霧輝は続ける。

「最悪、皇名が二人もいれば事態の収拾は簡単なはずだからね。じっくり焦らずに行こうか。・・・・・・焦燥は何も生まないからね」

最後に付け足された言葉に、シェリス達は無言で頷いた。

結局何も見付からない内に夕方となり、霧輝はシェリスと共に帰途に着いていた。並び歩きながら、シェリスがポツリと呟く。

「結局、見付かりませんでしたね」

「・・・・・・・」

シェリスの言葉に、霧輝からの返答は無い。完全に黙殺された形に、僅かな怒気を孕んだ視線を向ける。だが、それはすぐに困惑のそれに変わった。

「キリキ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ん？　シェリス、今何か言った？」

「何も見付からなかったと、そう言ったのです。一体、歩きながら何を考えていたのですか？」

「・・・・・・・ちょっとね」

曖昧な笑みと共にそう答えてから、再び黙考に入る。しばらくそれを見ていたシェリスだったが、呆れの溜息を吐いて放置する事にした。

それを横目に、霧輝は苦笑を表に出さないように噛み殺す。

（まさか、手詰まりと言う訳にもいかないしね）

霧輝は実の所、学院に仕掛けられたそれを、すでに見付けている。それは脆弱で単体の効果すら持たないような物だった。だが、だからこその手詰まりである。

その仕掛けは《連唱陣》と呼称されている。

単体では何の効果も無い魔方陣を決められた規則性を持って配置し、その中心点で術を発動させる技術。陣を張られたら最後、下手に張られた陣に干渉すれば何が起こるか解らない。しかも、中心点に現れる魔方陣への干渉は不可能という代物だ。

もはや、現状ですでに手遅れだ。奴は、霧輝の在籍する学院を最後にしたはずだから。

（これは、挑戦状か。それとも、僅かなりとも残っているのか）

そこまで考えて、霧輝は小さく首を横に振る。

（希望を持つのは絶対に却下だ。向こうから挑発してきているなら、決着を着ける好機だと考えるべき。だけど、僕にやれるのか？）

もし、隣りにシェリスがいなければ、霧輝は心から衝き上げられる衝動に任せて叫んでいただろう。今だって、シェリスから見えない右拳を、爪が深く食い込むほどに握り締めている。

その脳裏を過ぎるのは、過去の過ちに対する後悔と罪悪感。

「・・・・・・・・・・これば かりは、どうしようもないな」

小さく、口の中だけで呟く。それにシェリスがこちらを見たが、すぐに気のせいと判断して前に向き直った。それを確認してから、溜息を噛み砕いた。事態は限りなく最悪だ。付け加えて、何があっても大規模な動きができない現状に歯噛みする。

もし現状を上告すれば、そんな霧輝の言葉など握り潰される。そして大部隊が動く事になり、誰も望まない最悪の喜劇が起きる事になる。

そんな悲観的な思考に没頭する横で、シェリスが唐突に口を開いた。

「・・・・・・今日はハンバーグにしましょう」
「？」
「晩御飯です。今日は白いご飯にハンバーグとサラダと海鮮スープにします。メニューの中に、何か苦手な物はありましたか？」
唐突な話に首を傾げた霧輝に、シェリスが淡々と問うて来る。明らかに気を使っている言葉に、今度は隠す事も無く苦笑した。
「真剣に聞いていると言うのに、笑うのは失礼ではありませんか？」
「いや、ごめん。今日はシェリスの転入が決まった日なんだから、せっかくだし寿司の出前を頼まないかな？　日本の場合、祝い事は赤飯かお寿司がオーソドックスだからね。生の魚が駄目なら取りやめるけど、どうする？」
「・・・・・・生の魚ですか。食べた事はありませんが、興味はあります」
「じゃあ、決まりだね。頼んでから作る時間もあるし、今から頼んでおこうか」
言って、霧輝は携帯電話を取り出してお寿司屋の電話番号をプッシュして耳に当てる。その顔に先ほどまでの影や眉間に寄っていたシワは無く、シェリスもホッと一息つく。
そんなシェリスが初めての握り寿司に悪戦苦闘したのは別の話だ。

「――――で、掴んだ瞬間ボロボロと――――」
「それ以上言わないでください」

クスクスと笑いながら言う霧輝に、顔を赤く染めて俯いたシェリスが言う。それらを見比べて、メティは感心したように頷いてみせた。

「霧輝とシェリスちゃん、出会って間もないのにすごく仲が良くなってるわよね」

「四六時中一緒にいるわけだし、仲良くなる以外の選択肢なんてないと思うけど。嫌い合ったら、この先すごく大変だからね。それに、僕もシェリスも、相手のことが考えられない馬鹿じゃないし」

「正論ね。なんていうか、正論過ぎてつまらないわ。もっと、霧輝がシェリスちゃんを手篭めにしたとか、面白いエピソードは無いの？」

第三者だからこそ言える発言に、霧輝は人目も憚らず大きく嘆息する。

「手篭めとか、仲良くなる要素皆無だし、現代だと完璧に違法だから」

「えー、ほら、心壊すとか中毒にするとかあるじゃない」

「完全無欠に犯罪だから、それ。平和を守る立場にある皇名とは思えない発言だよね、本当に。これで世間じゃアイドル的扱いなんだから世の中本気で分からないよ」

「ひどいわね。カメラとか他の人の視線がある場所じゃ言わないわよ。それぐらいは、私だってちゃんとわきまえてるわ」

本気で心外そうに言うメティに諦めて、霧輝は周囲へと視線を移す。三人がいる場所は、防衛省を挟んで反対側にある靖国神社だ。その敷地内の、普通は人が入らないような雑木林の中で話している。この場所にいるのは、別に伊達や酔狂ではない。

ここで軍の二部隊を壊滅させた妖鬼を討伐するためだ。

だが、ここにあった本当の問題はそんなものではなかった。
メティは肩を竦めた後、視線をスッとそれに向けた。その目には、先程までのふざけた様子は微塵も感じられない。というより、ついさっきまでの会話は半ば現実逃避であり、三人は終始一定以上の緊張を持っていた。

「それで、これはどうするの？」

そこにあるのは複雑な魔方陣だ。先日学園で見付けたのと同じ、連唱魔方陣である。

「現状は放置以外に無いよ。というか、この時点ですでに妨害は不可能だ。相手の策に乗る形になるけど、陣が発動して起こったアクションを片っ端から潰す。これ以外に方法なんてない。こういった陣はヨーロッパの魔女が詳しいけど、呼ぶだけの時間は無い」
「これが神を降ろすための陣だったなら、どうするのですか？」
「神を斬る」

シェリスの問いに、霧輝は即答した。それに、メティが驚いて目を見開く。

「無理よ！　只人の身で神を殺す事なんでできないし、そもそも、神殺しは世界条約で禁止されている最大の禁忌よ！　下手すれば、皇名の位を剥奪されて《神犯者》よ！？」
「神ならすでに一度殺してる。だからこその神弑魔刀の二つ名だよ」
「・・・・・・嘘でしょ？　天皇家が神殺しを黙認してるって言うの？　ううん、それよりも、過去に神を殺したなんてありえないわ。それこそ、世界中の歴史に載るような事件なのよ。隠蔽があったとしても、皇名すら知らないなんて考えられないわ」

「信じ難いようですが、真実です」

力無く木にもたれかかったメティに答えたのはシェリスだった。

「キリキは過去、確かに神と戦闘を行い、斬り殺しています。細かい神名などは不明ですが、そこは間違いありません。私がここに出向いている理由の一つは、神殺しの監視という項目も含まれていますから」

「理由の一つ？　それって一体――――」

「構えて！」

メティの言葉を遮って叫びながら、霧輝が刀を振るった。キン、という音と共に、鈍色の鋲が地面に転がる。もし霧輝が弾かなければ、メティの頭蓋を貫通していたコースだ。

「遠い。弓師かもう一人近接戦闘職がいれば良かったんだけど。これじゃあ追えないな。たぶん、距離を詰めたら逃げられる」

「同意です。追うにしても、すでに機を逸したでしょう。私達が気付かないような距離から鋲を飛ばしてくるような手練れです。今から追ったとしても、敵影を捉えられるとは思えません」

「・・・・・・一応精霊を飛ばしてみたけど、少なくとも半径五百メートルにはいないわね。人間技じゃないわよ、これ」

戦闘になってスイッチの切り替わったメティが言う。その周囲には青緑色のシルフィとノームが踊っている。火と水がいないのは、これが本格的な戦闘ではないからだろう。本気なら、周囲一体が精霊に埋め尽くされる事になる。

「エレティアなら追いつけるかもしれないけど、伝導物が何もないから。もうお手上げ」

「？　水では駄目なのですか？」
「ウンディーネが構成する水は全て理論純水なんだよ。だから、電気は通らないんだ。水が電気を通すのは、電解質の物質が溶けているからだしね」

シェリスの疑問に答えながら、霧輝は刀を収めた。ただ、いつでも抜けるように、手は柄に添えたままだ。

「おそらく、今回の襲撃は警告か宣戦布告だろうね。お前達の動きは全て分かっている。止められるなら止めてみろという感じかな」
「そこまで言ってるかしら。普通、止めてみろじゃなくて手を出すなじゃない？」
「いや、止めてみろで合ってるよ。手を出されたくなかったら、知り合いの首の一つや二つは送りつけてくる。名持ちっていうのはそういう存在だよ」

言いつつ、霧輝は内心で訂正した。

（いや、あいつならそこまではやらないか。むしろ、無駄に凝った脅迫文とかだろうな）

そこまで考えてから、首を振って思考を打ち消した。今は、そんな事を考えている場合ではない。

「一旦ここから離れよう。どこか、安心できる場所で話がしたい」

霧輝の言った言葉を吟味して、メティが候補を一つ上げる。

「防衛省に行く？」
「・・・・・・・・・いや、僕の部屋に行こう。まだ、知らせる

べき時じゃないよ」
「やっぱりそう思う？　お偉いさん達に教えたら、絶対に余計な事をするものね。今は、私達だけで算段をつけるしかないわね」
珍しい事に、メティが大きく溜息を吐く。実際、防衛省だけではなく、政治家や官僚はそれほどにひどい。天皇家や、政治的背景を持たない第一監査機関が無ければ、とっくに日本は潰れているだろう。
腐敗した政治はひとまずおいておく事にして、霧輝は二人に視線を向けて口を開く。
「とにかく、そういった事も含めて、一度今回の件を整理しよう。具体的な作戦立案もしなければ、無意味に死人が出ることになるからね。異議は？」
二人から異議が上がる訳も無く、霧輝達は雑木林から出るべく踵を返した。

「とりあえず、決戦の場所だけははっきりしてるわね」
テーブルに広げられた地図を見ながら、メティが険しい顔で言う。その言葉に、霧輝は肯定の意味を持って頷いた。
「桜ヶ丘学院と靖国神社。この間にある重要施設は防衛省しかないからね。残り二つの陣は印をつけた場所で間違いないはずだよ。どういう意図があるのかはわからないけど、敵は防衛省で連唱陣を発動させようとしている」

「・・・・・こうなって来ると、防衛省から人を避難させた方がいいんじゃないか、っていう気になるわね。でも、避難中に陣を発動させたら危険だし、難しいわね」
「その事ですが、一つ構いませんか？」
「何か分からない事でもあった？」

シェリスが手を上げて、二人の視線がそちらに集中する。

「いえ、一つ気になったのですが、敵は何故、準備を終わらせていながら動かないのでしょう。準備が終わったのならば、すぐに発動させるのが効果的ではありませんか？」
「いや、そこは不思議じゃないよ。連唱陣は同じ陣でも時間で発現する効果が違うんだ。今回、学院に仕掛けられていたのは《黄昏の門》で靖国神社が《黎明の門》だったから、おそらく北と南も《門》の陣が刻まれてるはず。そうじゃなくても、連唱陣では東西の門の方が意味が強いからね。十中八九、これは召喚連唱陣だ」

しかも、時を待っていると言う事はそれだけ大きな存在を呼ぼうとしているという事だ。普通に使うなら、連唱陣の効果は大体一週間から半月の間同じものになる。ただ、巨大な術になると発動が一秒でも狂うと失敗するものもあるらしい。
それを伝えると、シェリスは軽く小首を傾げた。

「それならば、発動時に妨害してしまえばいいのではありませんか？」
「駄目なのよ。過去にそういった超高度な連唱陣をたった一秒ずれて発動した事があるんだけど、たったそれだけの失敗で、連唱陣の内側が消失したのよ。当然術者も失敗した負荷によって死亡したけど、陣の内側で次の手順を待ってた百人の術師も死んだわ」
「つまり、妨害するにも陣の中にある全てが犠牲になるんだよ。

そして、切り捨てるには防衛省は大き過ぎるんだ。はっきり言って、たかだか四体の剣鬼を殺すために切るのは割に合わない。もしかしたら、それを狙ってこの布陣なのかもしれないけどね」

もしも陣の内側が一般人の民家だけなら、住民を避難させて消滅させても影響は小さい。そういった問題は、仮住居を用意して、損失を補償すればいいからだ。だが、国の防衛を司る機関を消滅させれば、その影響はとても計り知れない。

「それでは、儀式中は中に入らない方が良いですね。もしわざと儀式を失敗されれば、私達は死ぬ事になります。それは、避けるべき事柄でしょう」

話を聞いたシェリスの提案は至極真っ当な物だ。だがしかし、それに霧輝は首を振る。

「わざと失敗するなんて事はありえないよ。いや、偶然でもありえない。そんなミスをするような相手じゃないよ。もし失敗するとしたら、皇名級の怪物が妨害に出た時だけだ」

「・・・・・・少し前から疑問だったのですが、今回の敵に付いて、あなたは何か知っているのですか？　時折、言動にそのような事実が見受けられます」

「そうね。できれば話すのを待っていたかったけど、そろそろそんな事も言っていられなくなってきたわよね。勝つためにも、話してもらえないかしら」

「・・・・・・・・・・・・・・分かったよ。ただ、この話はここだけにしてもらうよ」

二人に見られ、霧輝は両手を上げて降参のポーズを取った。それから、一度瞑目して気持ちを切り替えてから告げる。

「――今回の黒幕は、僕が殺した神の残った半身だ」

その言葉の反応は二人でそれそれ違った。メティは普通に驚きで目を見開いて硬直して、シェリスはやはりという表情で目を瞑った。

「シェリスは見ていたと思うけど、僕が神を殺した時には、もう一人いたんだ。僕が、神を殺せたのはその仲間が神の半身を自身の命を犠牲にして送り返したからだ。その神の半身が再び僕の前に現れたのは、それから半年後だった。僕がその神を殺したのが五年前だから、四年と半年前になるかな」

「・・・・・・・・その頃って、霧輝が皇名になった時期よね」

「そう。当時の侍の皇名が神降ろしの祭事を行おうとした時だ。その時は僕も含めて、全員が儀式は失敗したと考えていた。いや、記録上は今もそうなっているはずだよ」

自嘲気味に「報告していないからね」と言った霧輝に対し、シェリスが一つ頷く。

「つまり、その祭事は失敗していなかった、という事ですね。きちんと神は降りていたという事ですか」

「そうだね。半分だけだから、成功と言っていいのかは分からないけど、神が降りたという事は純然たる事実だ」

「それならば、なおさらに疑問です。かつて相対したのですから、キリキは神が危険な存在だという事を体験として理解しているはずです。報告し、組織で対処に当たるのが、最も自然な行為でしょう。なのに、何故そうしなかったのですか？」

あくまで整然とした正論で問い掛けてくるシェリスに、霧輝は苦

い顔をした。浮上して来た何かを必死に噛み砕き、それから、ようやく口を開く。

「確かに、シェリスの言う事はもっともだよ。でも、僕にはそれができなかった。いや、違う。できなかったんじゃなくて、したくなかったからしなかったんだ。それだけじゃない。その半神と出会った時に斬れたはずだった。なのに、それすらもしなかった」

「・・・・・・つまり、それをできなかった程の何かがあったのですね？」

「そうだね。回りくどい言い方はもう止めにしよう。———言ってしまえば簡単な事だ。その半神が死んだはずの相棒、いや、それこそ僕の半身とも言えるあいつの、天璃の姿をしていたんだよ」

楼峰　天璃。楼峰　天欧の一人娘で、幼少の頃から霧輝と共にいた少女だ。光葉とは違い、その存在は霧輝にとって文字通り半身のような存在だった。天璃が死んでしまった後、一ヶ月も部屋から出る事ができず、食事もほとんど喉を通らなかった。

「刀なんか、半年後のあの事件まで持てなかった。僕にとって、彼女はそれだけ大きな存在だったんだ。その姿を前にして、僕は何もできなかった。いや、さっきも言ったけど、しなかったんだ。あれが、天璃じゃない事は分かっていたのに」

そんな霧輝を前に、あの神は何もしないで去った。その姿の有効性を試したかったのか、また顕現した顔見せだったのかは分からない。だが、その後は頻繁に霧輝の前に姿を現すようになった。ただ、今まで直接的な戦闘になった事は一度も無い。

それを、霧輝は意図的に全て隠してきたのだ。

「その神は、霧輝に対して恨みを抱いているのですか？」

「分からない。今回みたいに従えている剣鬼を仕向けてくる事はあるけど、刃を交えたり、言葉を交わした事は一度も無いんだ。姿を見せてもすぐに立ち去るから、目的が何かなんて、分かりようが無い。ただ、今回は今までにない規模だ」

過去に起きた中では、最大でも多数の剣鬼を差し向けてきた程度だ。

「だから、もしかしたら今度こそ接触できるかもしれない。今回の件は明らかに天皇家に協力を要請するべき事だ。それをしないのは完全に私的な理由だよ。絶対的な安全より、自分の欲を優先したんだ。別に、軽蔑してもらっても構わないよ」

霧輝はそう言って肩を竦める。ただ、軽蔑されても報告するつもりは微塵も無かった。霧輝にとって、天璃に関わる事はどんなものよりも優先される。

「別にいいんじゃない？」

言ったのはメティだ。霧輝と同じ様に肩を竦めて見せる。

「皇名の中で、国家や天皇に忠誠を尽くすのは義務だ、なんて考えてるのは虎琥ちゃんぐらいよ？　むしろ、最低限義務として戦いはするけど、それ以外は自由に動いて当然。そう考えてる連中ばかりだわ。まあ、私もその一人なんだけどね」

だから、その程度の事で気にする必要は無いと。そんなメティの言葉に同意するように、シェリスもこっくりと頷いた。

「私はキリキがそのテンリという女性を失った戦いを見ています。

神との戦いにたった二人だけで挑むのは普通ではありえません。それを無茶や無謀ではないと信じられる相手だったのですから、論理的な思考で処理できないのも仕方が無い事だと思います」

「・・・・・・ありがとう。それだけですごく気が楽になった」

今まで体に込められていた力を抜いて、霧輝は微笑んだ。

「キリキ・・・・・・」

「大丈夫だよ。精神的に吹っ切れたから、たぶん、今の方が鋭いよ。あの神とも、ようやく本気でやり合えそうだ」

「それなら良かったわ。ただ、その前に連唱陣の件を片付ける必要があるのを忘れないでね？　天皇家を頼らない以上、私達だけで潰さなきゃいけないんだから」

「分かってる。そっちはさっさと終わらせるよ。私用にできるだけ多く時間を割かなくちゃいけないからね」

おどけたメティの言葉に笑って返し、霧輝は立ち上がった。

「黎明と黄昏の門があるなら、発動する時間はおそらく夜明けか日没だ。少し早いけど、そのためにも夕飯にしよう。シェリス、今日は僕が作るけど、構わないよね？」

「はい。異論はありません」

「あらあら、今日は、っていう事は、普段はどうなのかしら？」

霧輝とシェリスの会話を聞いて、メティが目聡くからかう。それを流して霧輝は台所に向かう。背後でメティがシェリスを問い詰める声が聞こえたが、それは努めて無視した。

「さて、何を作るかな」

呟きながら、冷蔵庫を開ける。といっても、霧輝はそこまでレパートリーが多い訳では無い。材料を買わなかった事から、必然的に何を作るかは限られてくる。

（あ、サーモンがそろそろ賞味期限切れるな。カルパッチョとカルボナーラにするか）

サーモンやトマト、タマネギ等、カルパッチョとカルボナーラの材料を取り出してから、鍋に水を入れて火を点ける。それを待っている間に手際よくカルパッチョを作っていく。孤児院で料理が当番制だったので、包丁の扱いはお手の物だ。

ちょうど盛り付けが終わった所で鍋の水が沸き、塩を適当に入れて、パスタをちゃんと扇状になるよう注意して入れる。ここで塩を入れ忘れたり、ちゃんと扇状に入れないと、パスタが湯がく途中でくっ付いてしまうから厄介だ。

ただ、後は十分ほどの間、時々菜箸で掻き回せばいいだけだ。霧輝はその間を使って、先程作ったカルパッチョをラップして冷蔵庫にしまった。放置していると、カルボナーラを作る熱でサーモンや野菜が傷んでしまう。

（戦闘中にお腹が痛くなりましたとか、冗談にならないし）

報告書に食中りで敗北などと書かれるのは、霧輝もさすがに嫌だ。それに、体調管理は幼い頃から叩き込まれてきているので、今まで怠った事はない。

そのまま孤児院にいた頃の思い出に思考をシフトしていきながらも、霧輝はテキパキと残りの作業を終えた。冷蔵庫から大皿に持ったカルパッチョも出して、リビングに持っていく。

「お待たせ。戦闘があるかもしれない事を考慮して少なめにしたけど、大丈夫だった？」
「別に構わないわよ。それにしてもちょっと意外ね。てっきり和食が出てくるものだと思っていたんだけど、洋食が出てくるとは思わなかったわ」
「ああ、うん。僕はどちらかというと洋食の方が作るのは得意なんだよね。シェリスが作れば和食だったと思うんだけど、メティって洋食は嫌いだったっけ？」

三人分の料理を並べ、カルパッチョの取り皿を置きながら聞く。メティはその問いには首を振って否定し、それからクスッと笑った。

「？　何か変な事でも言ったかな」
「違うわ。純正の日本人で侍の頂点である霧輝が洋食を作って、出自はともかく、見た目は西洋の白人系にしか見えないシェリスちゃんが和風っていうのが、ちょっと面白くて。他の誰かにどういう料理が得意そうに見えるか聞いたら、絶対逆に答えるわよ」
「確かにそうかもしれませんね。私は母が日本食を好んでいたので自然と覚えましたが、キリキの場合も何か理由があるのですか？」

メティの意見に同意して、シェリスが聞いてくる。それに霧輝は、自分が洋食を得意になる過去の原因を思い出して苦笑いする。

「僕の場合は光葉の我侭だよ。僕と光葉がいた孤児院は、大抵和食でたまにカレーとかだったんだよね。それで、和食ばかりに飽きた光葉に注文されて洋食を作ったんだけど、それから僕が当番の日は洋食っていう風に、なぜか決まってたんだよね」

光葉に頼まれて初めて作ったのは簡単なスパゲティだったのだが、それを皆がちゃんと食べてくれたのが嬉しかったというのもある。

だが、そうなった一番の理由は、霧輝が料理当番の日になると、光葉が今日はどんな料理を作るのか聞いて来たからだ。

「そのおかげで、孤児院だと僕だけが洋食を作れるんだけど、逆に、和食のメニューが苦手になったんだよね。精々、白飯を炊いて野菜を炒めるのが精一杯だよ。だから、シェリスが作った和食って、かなり久しぶりだったんだよね」

「あー。霧輝って滅多に外食しないものね。外で食べるとしても焼肉とかカラオケとかだし、シェリスちゃんが来たのは本当にラッキーだったのかもしれないわね」

「そうだね。そういった意味では、すごく感謝してるよ。シェリス、ありがとう」

「いえ。迷惑を掛ける事の方が多いですから。それでも、何らかの形でお役に立てていたのならば幸いです。お二人とも、せっかくの料理が冷めてしまいますし、おしゃべりはこの辺りにしてそろそろ食べませんか？」

感謝の言葉に、シェリスは照れもせずにそう返す。言われた二人はその意見に同意して、フォークを手に取った。

〈ピンポーン〉

いざ食事にかかろうとした瞬間に鳴ったチャイムに三人は顔を見合わせる。家主として霧輝は仕方なく立ち上がった。二人に先に食べているように言って、玄関へ向かう。

「はい、どちら様ですか？」

中からそう声を掛けるが、返事が無い。オートロックのマンションではないし、いたずらな子供がピンポンダッシュでもしていった

のだろうかと一瞬考えたが、否定する。そのためだけに、八階にある霧輝の部屋までやって来る理由は無い。

（とすれば、罠かな）

霧輝は過去、何度かそういったトラップを仕掛けられた事がある。開けた瞬間に斬りかかって来たり、手榴弾を仕掛けたりするのはまだ可愛い方だ。バズーカや毒ガス、ひどい時は数十人からなる襲撃を受けた事もある。

「一々修理とか、お金と時間の無駄なんだよね」

確かに皇名の給料は高いが、そんな風に修理ばかりしているとすぐに無くなってしまう。仕事上の関係で襲われたならともかく、個人的な襲撃は経費で落ちないから困る。

溜息をついた霧輝は、下駄箱から小型モニターを取り出した。それを操作して、玄関の外を映し出す。何度も襲撃を受けた際に、どんな罠があるのかを知るために無断で着けた隠しカメラだ。それで、今回はどんな罠か調べる事にする。

だが、そんな霧輝の予想を裏切って、存在していたのは別の物だった。

「――――封筒？」

首を傾げて倍率を上げてみるが、そこにあるのは茶色い封筒が一つきりだ。しかも、別に厚さがある訳でもなく、これにどうやって罠を仕掛けるのだろうというレベルの代物である。少なくとも、霧輝は何も思いつかない。

念のためにも他のカメラの映像も確かめたが、どこにも襲撃者の様子はない。眉を顰めつつも、警戒を解く事無く玄関を開ける。

（上、にも無しか）

何か注意を引くものがあったなら、その逆方向から奇襲を受ける事は意外と多い。だが、今回に限ってはそれもなく、霧輝は普通に封筒を拾い上げる事ができた。封筒の重さからしても、中に何かが仕掛けてあるという事もなさそうだ。

一体何のためだったのだろうかと思いつつ、霧輝は封を切った。その中から出てきたのは、たった一枚の紙だけ。

《明日夕刻に門は開く》

その紙切れに書かれていたのはその一言のみ。だが、霧輝はその筆跡に見覚えがあった。そこから導き出される結論は、宣戦布告だ。止められるものならば止めてみろと、絶対の自信の元にそう告げている。

「・・・・・・わざわざ警告してきた事、絶対に後悔させる」

小さく呟き、二人に日時が分かった事を伝えるためにリビングへと足を向けた。

翌日。防衛省は皇名二人からもたらされた信じ難い情報に混乱を極めていた。名持ちの鬼が、防衛省のど真ん中に神を降ろすための陣を張っているというのだ。しかも、皇名の力と技を持ってしても破壊は不可能というのだ。

「とにかく、住民の避難勧告、いや、第一次緊急事態宣言を！」

「それよりも軍だ！　第一級部隊を召集し、陣の発動を阻止しなければ」
「天皇家に連絡を入れるのが先だろう！　神を送り返せるのはあの方々しかいない！」
緊急で開かれた会議は、始まってからこの三十分間、全く話し合いの体を成していない。それを無言で見ていた最年少らしき少女が、スッと息を吸い込んだ。それを見て、霧輝を含め、先程から静観していた数人が耳を塞ぐ。次の瞬間。
「コンの、静まらんかい、ド阿呆どもが！」
鼓膜を破ろうとするかのような雷が落ちた。それで、一気に会議室は静かになる。
「貴様らは何のために給料を貰っておる。こういった有事の際に適切な対応をするためじゃろうが。慌てれば解決するのか？　え？」
見た目にそぐわない言葉使いと迫力で、先程まで混乱していた官僚達を睨み据えていく。その様こそが、この場の支配者が誰かを物語っていた。
必護　風巳といい、防衛省と国軍を天皇より与かる必護家の現当主だ。表向きには防衛大臣が最高権力者だが、実際に今の国軍を取り纏めているのはこの十歳をようやく越えたようにも見える幼女のような少女だ。実際、本当の歳も十四と異常に若い。
そんな少女に向かって、霧輝は意見するために手を上げた。
「ちょっといいかな？」

「なんじゃ。このギリギリまで事を隠しておった張本人が今さら弁解か？」
「違うよ。はっきり言うと、こうして言ったのは勤めている人達を夕方になる前に全員ここから退去させて欲しいという事を伝えるためで、対処を押し付けるためじゃないんだ。一言で言うと、この件は僕に全権を預けて欲しい」
いくら皇名と言えども、あまりにも乱暴過ぎる要求に会議室が騒然となる。だが、そんな事など意に介する様子も無く、霧輝はこの場の長を見る。
「――神を殺す事はこの世界でも最大の禁忌じゃ。それを分かっておるのか？」
「僕の二つ名を知らないはずがないと思うけど？　神を殺す程度の事なら、僕は一片の躊躇も無くやってみせるよ。そもそも、風巳さんはその名前の由来を知っているよね」
「念のために聞いただけじゃ、神殺し。本当に一柱も二柱も変わらぬというのならば、斬って見せるがよかろう。どうせ、妾を含めて、この国でお主を止められる者はほとんどおらぬわ。天皇家の者どもは主に関しては静観を決め込んでおるしの」
「必護様！？」
笑みを浮かべての肯定に、官僚の一人が叫ぶ。叫びこそしなかったが、他の官僚たちも同意見なのだろう。驚きと困惑の入り混じった表情で顔を見合わせている。
そんな中、これまでずっと沈黙を通していた防衛大臣が口を開いた。
「静かにしなさい。幕僚長、あなたはどう思いますか？」

紅の角を持った《竜人》の防衛大臣は、同じく沈黙を保っていた《獅子族》の男性に問い掛ける。それに、ライオンの鬣のような髪をした男は静かに意見を口にした。

「俺の個人的な感想としては却下すべき事だ。だが、現状ではその理由が無い」

「私も同意見です。最善策は国軍を召集して天皇家の方にお出向きいただく事ですね。神の降臨はどのような犠牲を払っても止めるべき事ですから」

「そうだ。だが、連唱陣はすでに張られているため、それを解き剥がす事はできない。それができるのは、現在は召喚師の皇名である呼恋　歌漣のみ。だが、彼女は今、北海道の方へ行っている。天皇家の方々は、風巳殿が仰ったように傍観だろう」

二人の会話を聞いて、風巳も頷く。

「ふむ。では、決まりじゃ。この件は、暫定的に梳美咲　霧輝皇名に任せよう。無論、お主が敗北せし事を想定して、国軍は呼集して後方に待機じゃ。それに、天皇家の方々に要請を出す準備も整えておくように」

「はっ！」

霧輝と二人の最高責任者を除いた全員が了承の声を合わせて立ち上がる。それぞれ慌しく出て行くのを見送ってから、霧輝は三人に顔を向けた。

「風巳も、神楽岡さんもオードレスさんも、協力に感謝します。おかげで、余計な事を考える必要が無くなりました」

「気にするな。妾は天皇より国防を任されておるのだ。今回は主の策が最良と判断しただけに過ぎぬ。それに、あの腐った官僚ども

を押さえ込んだのは祈焔とマルドじゃからな。妾は大した事などしておらぬ」
「我々も最善だと認めたからだ。そうでなければ徹底的に拒絶していた。感謝される程ではない。それよりも、万全を尽くすために残りの時間を費やすべきだろう」

オードレスの言葉に神楽岡も頷く。その言葉に、霧輝はやや迷うような顔を見せてから、腰に佩いた刀をポンと叩いて見せた。普段佩いている普通の刀――――それでも結構な名刀なのだが――――と違って、唾の無い黒漆の簡素な拵えは、天正拵と呼ばれるものの変形させた打刀は、名刀を越えた異質な存在感がある。

「《黒三日月祓》。神弑魔刀の内、魔刀の二文字の由来となった刀です。私の準備はこれだけあればそれで終わりですから。メティは今、屋上で精霊を集めていますし、安心して後方に待機していてください」
「ああ、それが噂の魔刀ですか。確かに、鞘に収まっているのに、一般の武具とは一線を隔した存在感がありますね。では、私は各方面への連絡と書類処理が残っていますので失礼します」
「うむ。任せたぞ。あまり根を詰め過ぎぬようにな。さて、妾も戻るとしようかの」

一礼して去っていく神楽岡に風巳が声を掛け、自身も去っていく。それと入れ替わりに、休憩室にいるよう言っておいたシェリスが姿を現した。すぐにこちらに気付き駆け寄って来る。

「キリキ、お話は終わったようですね」
「ああ、うん。オードレスさん、この少女は、僕の所に同居しているシェリス・ライセキラ・ストラトラシアです。シェリス、この人は陸上幕僚長のマルド・オードレスさん」

「マルドだ。名字でも名前でも自由に呼んでもらって結構」
「シェリスと申します。私の方も、どうかご自由にお呼びください」

霧輝が間に入り、双方共に自己紹介。その後、オードレスの方がやや躊躇気味に霧輝に向かって話を切り出した。

「先程同棲していると言ったが、この少女は一体何者なのだ？」
「その質問に答える前に一つ訂正しますが、同棲ではなく同居です。そして質問の答えですが、残念ながらお答えできません。それと、皇名の権限で、シェリスに対する身辺調査は全面的に禁じます。シェリスの周囲の人間を調べるような間接的な調査も、です」
「承知した。くれぐれも気を付ける事としよう。それでは、俺もこれで失礼させて貰う。霧輝殿に戦神（マルティス）の加護がある事を祈っている」

そう言って立ち去っていくオードレスを見送ってから、シェリスがポツリと呟くように言う。

「・・・・・これから神と戦うかもしれないという時に神の加護とは、意外にユニークな方ですね」

霧輝としてもそこは同感だったが、立場上無言でそれに答えるしかない。少し考えて、答えられない話題から話を逸らす事にした。

「それより、どうしてわざわざ来たのか教えてもらいたいんだけど。休憩室で待ってて欲しいってちゃんと伝えたよね？」
「それはきちんと聞きました。その意図も理解し、納得しました。ですが、予定時間を過ぎても戻って来なかったので、何か異常があったのではないかと思い、ここに来ました。自分がどれだけの危険を冒したのかは理解していますから、説教は甘んじて受けます」

「・・・・・・・・全部分かった上で動いているならいいよ。ただ、周知されてしまうと僕が庇う事もできなくなってしまう可能性があるから、次からは可能な限り自重して欲しい。これは命令とかじゃなくてお願いだよ」

霧輝は真正面からシェリスの目を見て話す。もしもシェリスが竜という事を知られれば、それこそ国家単位で物事が動く事になる。人間にとって、竜は神に次ぐ重要事項なのだ。

（それに加えて、竜が、完全な人型を取れるという事が知れれば、世界的な混乱を招く事になる。下手をすれば、中世ヨーロッパで起きた魔女狩り以上の人災が起きる。それは、絶対に避けるべき事だからね）

人類ではそれこそ神人や霧輝のような皇名が組むかしなければ対抗できないとされる存在が、他の人間と何ら変わらない姿で世間に紛れている可能性。それは、人々を恐慌に陥れるには十分過ぎる事実だ。

だからこそ、霧輝はシェリスの正体を多勢から隠す必要があるのだ。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもないよ。夕方からの戦いの事を考えていただけ」

怪訝そうなシェリスに首を振り、嘘をつく。それに納得したのかどうかは分からないが、シェリスはそれ以上の追及はして来なかった。変わりに、別の事を聞いてくる。

「話は変わりますが、キリキは今回の敵が何を望んでいるか分かっていますか？」

「あの神は闘争を何よりも好むからね。降ろした神と僕との三つ巴の戦いを望んでいるのかもしれない。後に考えられるとすれば、僕を殺すために他の神を利用するつもりかも。神と二連続で戦うのは、僕としても厳しいからね」

言いつつ、霧輝自身それはないだろうと考える。もしそんな風に策を巡らしてまで殺す事に拘るような性格なら、昼夜問わずに従える剣鬼を使って霧輝を襲わせ、疲労が極致に達した所を襲撃すればいい。こんな事をするより、その方が遥かに簡単だ。

それはシェリスも分かっているのだろう。霧輝の意見に拘泥する事も無く、別の意見を忌憚無く述べる。

「もしかすれば、キリキに神を殺させる事が目的という事も考えられます」

「その理由は？」

「特に確固とした理由がある訳ではありませんが、キリキを殺すならば別な方法がありますし、三者が入り乱れる戦闘が戦闘狂に楽しめる物であるとは思いません。後方援護が整えられる状況から考えると、それしか思いつきませんでした」

「なるほど、確かに一理あるね。・・・・・まあ、結局は全部仮説の域を出ない。いつか、機会があれば当人に聞けばいいか」

おざなりな事を言って、不意に視線を階段がある方向へと向けた。

「どうかしましたか？」

「気付かない？　顕在化していない精霊がかなり増えてきてるよ。メティの奴、これはさすがに集め過ぎだと思うんだけど。ちょっと息苦しいし」

「確かに精霊の気配は濃いですけど、分かるのですか？」

意外そうに聞いて来たシェリスに、霧輝は頷く。

「神を殺してからは、結構そういった事も分かるようになったんだよね。まあ、神霊を半分とはいえ取り込んだからかな」

「――取り込んだ？」

「あ」

霧輝はうっかり言ってしまった言葉に、しまった、という顔をした。

「簒奪、ですか？」

防衛省の中に入っている食堂の隅で、シェリスが問い返すのに霧輝は頷いた。

「そう。詳しい事は分からないけど、一番近い表現は簒奪だと思う。実際、相当特殊な状況だったし、そもそもが斬った神も特殊な顕現をしてたからね。天津宮の宮里から聞いた話だと、神が司る得意分野で勝ったからじゃないか、っていう話らしいよ」

「得意分野というと、刀という事ですか？」

「いや、そんな狭い括りじゃなくて、刀剣全般の扱いと斬刃――つまりは全てを斬る神だね。実際に僕が斬ったのは半分だけど、それでも山くらいは簡単に斬れるよ。一度も試した事はないけど、湖くらいなら余裕で割れるんじゃないかな」

これまで機会が無かったし、無用に神威を振るうような性格でもなかったために、山は斬った事があっても湖や海を斬り割った事は一度も無い。だが、その神威を掌握する身としては、何となくでき

るという確信があった。

「殺した神の力を奪うなんていう現象は、確実に珍しい部類だよ。明らかに人間の分を越えた力だから、滅多な事では使う気にならないけどね。神とかが相手じゃないと、この力はあまりに卑怯過ぎるから」

「確かに、神の力をそのまま振るう事が可能とあれば、それは竜からしても警戒しなければならない程の事態です。ですが、信じ難いというのもまた確かですね」

「そうだね。もしこの力を全開で使えば、神人の持つそれの非じゃない。神の子と言えども、受け継いでいる力はあくまで一部という事なんだろうね。神人で初めて竜の子供と互角だって聞いてるし。僕の存在は本当に破格だろうね」

その意味では、霧輝を擁する日本は世界でも最強と言えるかもしれない。もし、日本が侵略戦を行えば、強国全てが手を結ばなければ対抗など不可能だろう。霧輝一人の存在は、それほどまでに危険なモノだ。

ただ、現在このような状況にあるのも、霧輝の存在が原因だ。

「言うのが遅れちゃったけど、本当にごめん、シェリス。こんな事が無ければ、今日は転入初日だったのに」

「別に構いません。学校には興味がありますが、私が最優先しているのはキリキの傍に控える事です。そのためならば、私はどこまでも行きましょう」

「それでも、だよ。僕が平穏から程遠い状況に君を巻き込んでいる事に不実を感じているんだ。完全に僕の自己満足だけど、謝罪ぐらいはしないと気が済まなかったから。それと、君とメティが話を聞いてくれて心が軽くなった。ありがとう」

「その件に関する謝礼は二度目です。ただ、それで気が済むのな

ら、甘んじて受けておきます」

頷いて、シェリスは「それよりも」と続ける。

「本格的な戦闘が始まる前に言っておきます。私は基本的に戦力としては数として入れられないと考えてください。自衛ぐらいは可能ですが、それ以上は期待なさらないようにお願いします」

「分かってるよ。君はあくまで客分なんだ。初めから数に入れてないから、安心して、見物してもらえばいいよ」

「そういう意味で言ったのではありません」

笑って即答した霧輝に対して、シェリスは首を横に振る。

「人型である事を放棄すれば別ですが、私は、この姿では治癒術しか使用出来ません。他の者ならば戦闘可能な力を持つ者もいるのですが、私の場合はそういう血筋ですから」

「なるほど。赤や黒みたいな破壊に特化した存在じゃなくて、青や白みたいに守護や治癒に秀でた血筋なんだ。で、シェリスはその中でも治癒に特化していると」

「少し違いますね。私が治癒に特化しているのではなく、私の血族は癒す力を生誕した瞬間から持っているのです。エルフの《霊視眼》や竜人の《竜化》と同じ様なものです。創造主が定めた《生種属性》ですね」

生まれた瞬間から精霊を見る事ができるエルフや、竜と同等の硬度を持つ鱗と翼を生やす事ができる竜人と同じ様に、真正の竜にも、それぞれ生誕より持つ種族としての力を、人が生種属性と呼ぶものを持っているらしい。

（となると、白竜や青竜に言われている守護と治癒の一方は後か

ら身に付けるものなのかな。まあ、そんな事を知るような機会はないだろうね）

「なるほど。それなら、今からでも家で待っていてもらってもいいんだよ？　別に逃げたりなんかしないし、君は僕がどんな力を持っているのかを知った。力以外の要素なんて、平和な時分でも十分に調べられるんだからね」

「それには及びません。私は全てを承知でここにいるのです。死ぬような失敗はしないので、気にしないでください」

「・・・・・・気が進まないけど、仕方ないね。僕が時間を掛けなければいいだけだし。ただ、できるだけメティの傍にいるようにして欲しい。それができないなら、僕は多少乱暴な方法を取っても、君を戦場から追い出すから」

「分かりました。誇りに懸けて誓います」

本気の眼で言う霧輝に、シェリスは誓約する。

「代わりに、キリキも絶対に生きて戻ってきてください。私の使命はあなたの傍にいる事なのですから、今死なれる訳にはいかないのです」

「そうだね。まだまだ色々と教えたい事があるから、こんな所じゃ死なないよ。絶対、生き残って見せるから。安心して観戦していてくれればいいよ」

「当たり前です。安心できないような無様は私が許しません。終始圧倒して勝利する事。それが最低条件です」

淡々とした通牒に「ははっ」と笑う。

「駄目な奴と言われないように頑張るよ」

「そこは頑張るなどという言葉ではなく、普通に断言してくださ

い。母が言うには、大事な場面で意地を張れない男は駄目な男だと聞きました」
「戦う前から駄目だって言われる訳にはいかないね。分かったよ。絶対に圧勝してみせる。これでいい？」
「初めからそう言えば良かったのです」

問い掛けると、シェリスはうっすらと、だが確かに笑みを浮かべて頷いた。出会ってから初めて見た笑顔の美しさに、霧輝は思わず見惚れる。

「――どうかしましたか？」
「・・・・・いや、なんでもないよ。まだ夕刻には時間があるし、街で時間を潰そうか。何か希望があるなら、聞くよ」
「それなら――」

一時間後。霧輝はシェリスを連れて東京都内に存在するとある孤児院を訪れていた。

「小さい子供しかいませんね」
「平日の十時だし、仕方ないよ。小学生は三時、中学生は四時ぐらいには全員帰って来るけど、それまではずっとこんな感じだから」

数人の職員が赤子をあやし、五歳程の子供が年下の面倒を見る。三つ葉孤児院では昔からずっとこのルールで動いている。
そんな孤児院の風景を眺める二人の前にお茶を置き、優しげな老婆が正面にゆっくりと腰を下ろした。

「いきなり押しかけてすみません、院長先生」

「いいのよ。ここの子供達だって、霧輝君が来てくれたら皆喜ぶんだから。それに、ここはあなたの家でもあるのよ。育った家に帰ってくるのは自然な事だわ」

そう霧輝に答えてから、院長の視線はシェリスへと向けられる。

「それにしても、まさか霧輝君がガールフレンドを連れて来るなんてねぇ。今日はお赤飯を炊いた方がいいのかしら？」

「院長先生、別にそういう関係ではないので赤飯は炊かないでください。シェリスはただの友人ですよ。特に何かあった訳ではないですから」

「あらそう？　シェリスさんは優しそうだし、ぴったりだと思うのだけどねぇ」

残念そうに院長先生が言う。それから、不意に態度を改めて、霧輝を正面から見やった。

「それで霧輝君、今日は平日だけど、学校はどうしたのかしら？」

「仕事の関係で休みです。ここに来たのは、少し時間が空いたからですよ。学校の方に行かないのは、話を聞いたら付いて来ようとする友人達がいるからです」

「そうなの。じゃあ、シェリスさんも仕事の関係で知り合ったのね？」

老いて、なおも鋭い眼が光る。ここで受け答えを間違えると、たとえ孤児院からすでに出た人間であっても雷が落ちる。霧輝自身こそその経験は無いが、孤児院にいた頃から、今まで何人もの実例を見てきた。

「若干仕事とは異なりますが、そう考えてもらって構いません。少なくとも、関われるだけの実力と立場を有している事は断言できます。そうでなければ、後でどれだけ恨まれる事になっても置いて

行きますよ」
「そうね。あなたは孤児院から出る事になったあの事件でも、天璃ちゃん以外は断じて連れて行かなかったものね」
「・・・・・・・・・あの頃は、本当に奢っていました」

院長は、霧輝が天璃と共に神に挑み、天璃を死なせた当時の事を知っている。なのに、天璃を死なせた霧輝の事を怒らないのだ。当時の事情を知る全ての大人と同じで、霧輝は悪くないと言う。それは、霧輝にとって最大の責め苦だ。
頭を振って思考を切り替える霧輝に、シェリスがそっと顔を寄せて来た。

「・・・・・・・・・この方はあの件を知っているのですか？」

言っているのは、おそらく半神が天璃の姿を持って降りているという事実の事だろう。それに、霧輝は小さく首を振る。

「・・・・・・・・・いや、知らない。それは言わないで欲しい。変に期待や希望は持たせたくないし、僕が天璃を二度殺すと言えば、確実に反対するから」

その答えに頷き、シェリスは院長に向き直った。

「院長先生、そのテンリという方とキリキは、どういう関係だったのですか？」
「おや、霧輝からは何も聞いていないのかい？」
「わざわざ言う必要も感じませんでしたから。一応、天璃が僕のせいで死んだという事だけは話してありますが、それ以外は何も話していません」

霧輝の言葉を受けて、院長は「ふむ」と手を顎に添えた。

「・・・・・・なんと言えばいいかね。霧輝君と天璃ちゃんは、それこそ一心同体だったね。家族とか親友とか、そういった言葉じゃ足りない。半身のような間柄だよ。霧輝君と天璃ちゃんは、文字通り二人で一人だったのよね」

「一心同体。つまり、恋人関係だったという事ですか？」

「違うから。院長先生はそう言ったけど、僕の認識としては親兄弟よりも――――親も兄弟もいないから想像だけど――――気の置けない関係だったんだ。何も言わなくてもして欲しい事をして欲しいタイミングでしてくれるし、逆もまた当然の関係だよ」

霧輝が訂正する。それを聞いて、シェリスはコクリと頷いた。

「分かりました。要するに、キリキとテンリは老夫婦のような間柄だったという事ですね」

「いや、全く分かってないと思うんだけど。恋人から一気にパワーアップしてるし」

「私もそれが妥当だと思うけどねぇ。端から見ればはっきりそう見えるけど、霧輝君にしてみれば、近過ぎて見えなかったんだろうね。多分、天璃ちゃんも同じだろうさね」

霧輝の言葉を、院長がばっさりと斬り捨てる。この件に関しては、他の誰もが同じ答えを返してくるだろう。反論が無意味だと、言われずともはっきりと自覚できた霧輝は反論しようとして呑み込んだ。代わりに、話題を変えられないかと試みる事にする。

「そういえば、連馬はどうしてますか？」

「おやおや、この子はわざとらしく話を逸らして」

「キリキ、見苦しいですよ」

即座に二人からため息混じりの言葉が放たれて、霧輝は突っ伏したい所を堪えるのに相当な努力を要した。

「それはもういいですから。で、どうしてるのか、知りませんか？」

「さあねぇ。『修行に行く』って言って出て行ったままだよ。未だに何の連絡もなし。全く持って薄情なものだよ」

「そうですか。連絡が来たら、教えてください」

二人の会話に付いていけないシェリスが、首を傾げた。

「・・・・・・連馬とは誰なのですか？」

「今はどこにいるかもしれない、同じ孤児院の男の子だよ。色々とあって、僕はあいつに恨まれてるんだよ。どうにかして行方を知れないかと思ってるんだけど、国内にいないのか、五年以上立つ今もまだ見付かってないんだ」

「その割りにはあまり心配そうじゃないですね」

「いや、連馬って生存能力が異常に高いんだよ。俺と天璃の二人で人身売買してたヤクザの事務所を潰した事があるんだけど、こっそり付いてきてて、銃弾と刃物が乱舞してる中で三十分も生き残ってたのは正直に驚いた。いくら逃げ回って隅で震えてたとしても、銃弾の一発や二発は喰らってもおかしくないし」

連馬がいるのには全部終わってから気付いたんだけど、と霧輝は付け足す。それを聞いてシェリスは納得の表情で頷いたが、代わりに院長の顔がビキッと引き攣った。

「霧輝君。今のお話、詳しく教えてもらってもいいかしら？」

「い、院長先生。いや、知り合いの弟が突然いなくなったとか言

われて、天璃がヤクザに攫われたんだって主張したんですよ。それで、僕と天璃の二人で助け出そうって事になってですね。ええと・・・・・・・・・・・すみませんでした！」

「・・・・・・・・・・はぁ。まあ、過ぎた事です。これで誰かが怪我をしたとかだったら許しませんが、その弟さんは助けられたのでしょう？」

「あ、いえ。ええと、その子は猫を追いかけて路地裏の方へ迷い込んだらしくて、しばらくしたら自力で帰ってきたらしいです」

「・・・・・・数年振りに懺悔室の鍵を開ける必要があるかもしれませんね」

「すいません本気で勘弁してください！」

プライドも何も無く土下座を敢行。その体はガタガタと恐怖で震え、懺悔室というのが何か分からないシェリスでも、恐ろしい物だという事が理解できる程だ。シェリスからは見えないが、霧輝はちょっと涙目だったりする。

「全く。これからは、そういう蛮行を控えるようにしないといけませんよ。命の危険があるような事をしてはいけません。あなたを含めて、子供達は私より長生きする義務があるのですからね」

「・・・・・・・・・普通にあと百年ぐらい生きそうな人より長生き？　無茶振りじゃ――」

「何か言いましたか？」

「いいえ何も言っておりません院長先生！」

軍人でもここまで絶対服従ではないだろうというレベルの反射的な返答。もはや驚愕や呆れといった感情を通り越して呆然としてしまう領域だ。

「まあ、いいでしょう。ところで、今回の仕事はまた機密なので

すか？」
「すみません。事は国の信用にも関わりかねない内容ですので」
「構いません。あなたの仕事がそういう事であることは理解しているつもりです。ただ、親の代わりを務めた者としては、怪我をしてしまうような事はして欲しくないだけです。わがまま、というのは理解していますが、これだけはどうしようもありません」
「すみません」

霧輝としては、顔も知らない肉親よりも遥かに大切な育ての親だ。その要望を叶えられない事に、頭を下げる以外何もできない。

「構いません。あなたはあなたのしたい事をしたいようにしなさい。その代わり、一度決めた事は、最後まで曲げてはなりませんよ」
「・・・・・・はい」

親からの言葉を噛み締める霧輝の隣りで、シェリスは若干羨ましそうな表情をしていた。

霧輝はその後、シェリスとメティと共に防衛省の正面玄関前に立っていた。
腰には黒三日月祓を佩き、無言で日が暮れ始めた空を眺めている。
まだ、夕刻と呼ぶには日が高い。

「少し周囲を見回ってくるよ」
「私も行きます」
「大丈夫。ちょっと敷地内を一回りしてくるだけだから。敵もいないだろうから、交戦する事は無いよ」

即答の形で言ったシェリスにそう返して、一人で歩き出す。
一回りと言っておきながら、その足は全く迷う事も無く一点を――グランドヒルの裏へと向かう。
そこに現れた存在に、シェリスも、メティも気付いていない。いや、気付く事ができないのだ。
本能が、その存在を知覚する事を拒絶するために。
だが、霧輝は違う。霧輝だけは例外的に、むしろ半ば強制的にそれを知覚してしまう。知覚できてしまう。
普段ならば、知らなければ良かったと思う。だが、今回に限っては好都合だ。単独で、たった一人でそれと向かい合えるのだから。
時間はまだあるのだからと、霧輝はゆっくり《それ》へと近付いていく。
はっきりと見えなかった存在が、目鼻がはっきりと見えるように。
漠然としていた予感が確定した事に対する喜びが心の内から溢れる。
愛する者の姿を再び見れた事に対する喜びと、他者がその姿を騙っている事に対する怒りがない交ぜになって複雑な心境になってしまう。
それらを含め、言いたい事はたくさんあるが、最初の一言は決まっている。
相手に間違いなく声が届く場所まで近付いて、霧輝は静かに相手を見据えて口を開く。
それが、開戦の口火になる。

「久しぶりだな、名も知らぬ神」

ここに、神の半身を取り込みし人と人を取り込みし半神の戦が開幕する。

## 第三境『対峙』（後書き）

改行入れるのに読み返してて、本気で駄文だな、と思いました。
とりあえず、急展開に次ぐ急展開で詰め込み過ぎだな、という印象がばっちりと。
その辺り、どうにかしないといけないですね。

## 第四境『神と人』

防衛省の敷地に気休め程度に植えられた木々が、残らず斬り飛ばされた。

たった一度の交差でそれだけの被害。もし防衛省の職員を退避させていなかったり、軍隊を引き連れていれば、その分だけ死者が生み出された事だろう。

たった一人の人間とたった一柱の神が、たった一度ずつ手に持った刃を振るっただけでこうなったと言っても、誰一人信じないだろう。まさか。ありえない。そんな言葉を返されるのがオチだ。

（だけど、これが現実なんだよね）

たったの一撃が全てを断つ最悪の刃。一度振るえば森が切り開かれ、二度振るえば山が切り崩される。三度で島が、四度で海が、五度で大陸が真っ二つになる。

そう言われても笑えないのが神の業。全力で山が吹き飛ぶ程度の神人など、可愛い物だ。

こうして神の力を持つ者が暴れれば、様子見の軽い一撃で森が無くなる。たとえ皇名であろうとも、一撃で死にかねないような戦闘だ。霧輝が神を半分とはいえ殺せたのは、本当に運が良かったとしか言いようが無い。

それを今度は実力で成そうというのだ。無理ぐらいはしなければならないだろう。

（ただ、無闇に神威を使うのは間違いだな。圧縮して、余分を無くさないと）

霧輝は身の内で暴れる神の力を無理矢理に従え、掌握する。同時

に、向こうの神威も、少女のか細い体躯に集束した。これで先程のような事は起きないが、誤って大地に突き刺そうものなら大地が割れて溶岩が地を埋めるだろう。

「ふむ。どうやら、我の力もきちんと使いこなしているようだな。重畳、重畳」

名も知らぬ神が笑う。

それはもう、とても楽しそうに。

皇名になってから、初めて実力が完全に上の相手を敵にしている霧輝に、答えるような余裕など無い。だが、それを悟らせないためにこちらも笑う。

「お前程度の力を自分の物にするのは簡単だったぞ。もっと難しい物だと思っていたが、この程度なら子供でも扱えるな。心配をして損をしたぐらいだ」

嘘だ。神の力を使いこなすのは並大抵の苦労ではなかった。今だって、一歩間違えれば街を吹き飛ばしかねない。神の力が人の身に余るのは、霧輝が一番分かっている。

だが、それを知ってか知らずか神はなおも笑み。

「こちらは苦労した。なにせ、人の体など初めて得たものでな。こちらに来てからは、食べねば死ぬ、眠らねば死ぬ、息を止めれば死ぬで困ったものだ。身を清めねばどんどん汚れていくのも困ったものだったな」

思考が止まった。

（今、なんて言った？

人の体。そう言ったのだ。
では、誰の体なのだ？
決まっている。あの容姿は天璃の物だ。成長しているが、あの容姿は天璃以外には絶対ありえない。それは最も近しかった自分が一番分かる。
では、いつ奪ったのだ？
あの時だ。神の半身を天璃が自分ごと神界に送り返した時しかない。反動で体がバラバラになったのだろうと考えていた。神のあの容姿は、気まぐれで模倣しているのだと思い込んでいた。
では、違ったというのか？
神は基本的に嘘を吐かない。他者を騙す事に快楽を覚える神でなければ、そもそも嘘を吐く必要が無いの　だから、それは可能性としてありえない事だ。そして、あの神は刀剣による戦以外に興味を持っていない。故に、嘘を吐く神ではない。
ならば。
ならば、ならば、ならば、ならば、ならば、ならば、ならば、ならば。
あの神の体は、本当に天璃の物なのか。天璃の体は神に奪われて、今目の前に晒されているというのか。自分は、天璃の体に刃を向けていたのか。
あの体が天璃のもなら、一体、どうすれば良いのか）

全く、何も、分からなかった。霧輝は目の前の現実に打ちのめされて、立ち尽くす。

「・・・・・・・・・・僕は、どうすればいいんだ？」
「どうした？　私を殺すのだろう。早くせねば、神が降りるぞ？」

霧輝の心の内が理解できない神は、天璃の体を使い、天璃の声で言ってくる。その声が響くたびに、霧輝は絶望が体に圧し掛かって

来るのを感じた。
打つ手が無い。
（天璃を傷付ける事なんで、僕にはできない）
天璃の仇を前にして、待ち望んでいた場所に立って、絶望が霧輝を襲う。神は霧輝との殺し合いを望んでいる。霧輝も神との殺し合いを望んでいる。
だが、神は天璃の体を何とも思っておらず、霧輝は天璃の体を傷付けられなかった。
最後の最後で、双方の食い違いが望みの達成を邪魔している。その事に神は気付かず、霧輝は絶望で言葉にできない。いや、言葉にしたところで、神が天璃の体を離すのか。
天璃の体を盾にされれば、霧輝にできる事は無い。
あの神は剣による殺し合いを望んでいるが、人質や不意打ちを卑怯とは思っていないかもしれないのだ。あっさりと天璃の体を解放する可能性もあったが、そうでなかった場合、霧輝に打つ手は無いのだ。
動かない、否、動けない霧輝に痺れを切らした神が、口を開いた。
「来ないなら、こっちから行くぞ？」
そう宣告し、一瞬で間合いを詰めてきた。流れるような動作で、刀を振り下ろしてくる。
それをいなして、霧輝は気付いた。
気付いてしまった。
「《白満月祓》！」
黒三日月祓と対を成す神弑刀。神殺しの魔刀。それの、本来の所

持者は――――

（それは――――！）

怒りが満ちていく。記憶にある笑顔。怒り顔。泣き顔。ね顔。膨れっ面。様々な顔が一瞬で流れていく。そして、最後に凛々しく清々しい戦場で見せる顔。

「・・・・・・それは」

神の斬撃をいなしながら呟く。それに神が耳を傾けた瞬間、爆発した。

「――――それは、天璃だけの刀だ！」

怒りは神の力も先程までの躊躇も全て消し去り、霧輝は力技で白満月祓を跳ね上げた。そのまま返す刀で神を――――

「――――っ！」

斬れなかった。あと一ミリでも振り下ろせば神に刃が喰い込む。斬れる。なのに、斬れない。振り下ろせない。殺せない。腕が、それ以上振り下ろす事を拒む。

（斬れ、斬れ、斬れ！）

心内で叫ぶ内に、神は一足飛びに下がった。その手に白満月祓は無いが、今度は別の、純白の剣が握られている。それは、霧輝の知らない剣だ。

それを弄びながら、神が口を開く。

「ふむ。今の一撃は見事だった。そのまま振り下ろされていれば、我とてただでは済まなかっただろう。だというのに、何故止めた？理解できぬ」

神の言葉に歯噛みするしかない。霧輝は神を殺す最大の好機を自ら捨てたのだ。ただ、神が最も大切な者の体に宿っているというそれだけの事で。

殺さねばならぬ時に殺せなかった。

もはや、先程と同じだけの好機は訪れないだろう。怒りが生み出した千載一遇のチャンスを、自らの実力で生み出せると思うほど、霧輝は楽観的ではない。それに、もしできたとしても、やはり、刀は天璃に触れられない。

（今、天璃の体に刀を向けていられるだけでも十分に異常な事だ）

あの時の事を思えば。刀を向けるどころか、刀を持つ事すらできなかったあの頃と比べ、現状のなんと異常な事か。霧輝は今、最も愛した者の体躯に向けて刀を構えているのだ。

以前までの自分なら、考えらない事だ。

だが、それだけだ。やはり天璃の体を斬るなどできない。昔は訓練中に木刀で叩いたりしていたが、今はそれすらもできないような気がする。天璃の体を傷つけるという行為に対して、ある種の拒否反応がある。

歯を噛み締めて動かない霧輝を見て、神がふと何かに気付いたような顔になる。

「まさかとは思うが、この娘の体を傷付けられないとかか？」

「っ！」

見抜かれた。そんな思いが反射的に表情へと出してしまった霧輝は即座に後悔する。これは、相手に弱みを教えたのと同義だ。この戦いにおいては、戦場で敵兵に背を向けた状態で突撃するに等しい愚行だ。

だが、意外にも神は困った様子で頬を掻いた。

「参ったな。本気の殺し合いをしたいのに、相手が自分を傷付けられないなんて面白くない。勝ちの決まった勝負なんて糞以下だ」

そう言った。だが、ついで絶望を口にする。

「しかし、この体から出る方法は私にも分からない。出られるものなら、今すぐにでも出てやりたいんだが、こればっかりは分からないからどうしようもない。だとすると、お前にこの娘の体を斬る覚悟をしてもらうしかないって事だ。できないか？」

本当に困った様子でそんな事を口にする神。完全に、殺し合いをする事しか頭に無い。天璃の体などどうでも良くて、殺し合いをするためだけに邪魔だから天璃の体から出ようという程度の認識だ。

一体、どうすれば良いのか。

この神は、もし天璃の体を殺せばそこから出れるというなら喜んでそうするだろう。それで霧輝がどう反応するかなどどうでもいいと考えている。霧輝が怒ろうが絶望しようが、殺し合いをする事しか考えないだろう。

神ゆえに、人間個人を見ていない。霧輝の事を見ているのだって、実際は霧輝の剣才を見ているに過ぎない。自身を脅かしかねないほどの、殺し合いを楽しめるだけの実力がある存在として見ているに過ぎない。死ねば、霧輝の事など簡単に忘れるだろう。

人から神を剥がす法を霧輝は知らない。いや、世界に存在する文書の全てを調べた所で、そんな方法は見付けられないだろう。

まさに正しく絶望だ。霧輝には、現状を打破する知性も能力も無い。

「・・・・・・神を人から剥がすなんて、どうすればいいんだよ」

「まさしくその通りだな。神である私であっても、そのような方法は知らない。全く困ったものだ。せっかくお前が死力を尽くして戦いを挑んでくる状況を作ったというのに、これでは全く意味が無いではないか」

死力を尽くして戦いを挑んでくる舞台。それを作る為だけに、新たな神を降ろす舞台を作り上げたというのか。

呆れると共に、剣の神と言えどもやはり神なのだなと思う。人間には、剣を磨きながら膨大な知識を溜め込むような器用な真似はできない。神降しなど、召喚師のそれも上級の者でなければ持ち得ない知識だろう。

そんな知識の持ち主が知らないというのは、存在しないという事ではないのか。

思わず、そんな思いが過ぎる。

「さて、解決方法など見付からない訳だが・・・・・・・・そろそろ覚悟を決めてくれないか。私はお前と殺し合いをしたい。お前は私を殺したい。その障害はお前がこの体を斬れない事だけだ。お前がこの体を斬れるようになれば、問題は解決する」

「ふざけるな！　また天璃を殺せって言うのか！」

「その通りだ。案ずるな。私が乗っ取った時点でこの娘の魂など砕けているはずだ。人間が神の魂に耐えられるはずが無いからな」

確かに神の言葉通りだろう。あの体に彼女はいない。天璃の魂はすでにその中には存在しない。だからといって、どうして斬れるものか。大切に思っている相手を斬るなんて真似が、どうしてできる

ものか。
神は霧輝が天璃の体を斬れるようになるのを待っている。だからこその膠着状態だ。今、この場に存在を許されているのは、偏に神が殺し合いを望んでいるからだ。
そんな中で、霧輝はふと足元に転がった白満月祓に気付いた。黒三日月祓の対となる、純白の刀。この二振りは元々楼峰家の宝刀だった。二振りで一対の神弑刀。昔、天璃が得意げに語った話によると、神代の時代、楼峰の租が使っていた物らしい。
つまり、本来は一人でこの二振りを使うのだ。二刀流、否、双刀術と言うらしい。
霧輝は元々一刀流だったし、天璃は一人で二本は無理と言って一刀用に変えて使っていたために、霧輝は双刀を同時に操る方法を知らない。だが、それなのに、なぜか白満月祓へと視線が吸い寄せられた。
自然と片手が伸びて、巨大な隙を晒しながら拾い上げる。

「どうした。二本持てば斬る覚悟ができるのか？」

神は攻撃してくる事も無く、待っている。それを見る事すら無く、霧輝は不思議と手にしっくりと来る白満月祓を見つめる。まるで、黒三日月祓と共に、昔から持っていたかのような感覚。懐かしい、とすら感じる。

（なんだ、これ）

刀がしっくり来るだけではない。先程まで一本の糸の上で綱渡りをするような危うさで無理矢理に操っていた神威までもが、完全に静まっている。二振りのこの刀が揃った事で収まるべき所に収まったとでもいうように、意志一つで完璧に操れるようになっている。
ただ、先程までとの最大の差異は、体に満ちる異常なまでの全能

感だ。
なんでも斬れる。心意気や過信、傲慢、信念、そのどれでもなく、ただ純然たる事実として、この世に存在する物ならば時間すらも斬れるという事実としての認識。
（ありえない。いや、あり得てはいけない。これは、まずいものだ）
何でも斬れる、という事実。それはつまり、神の域に足を突っ込んだという事に他ならない。許されざる神域に足を踏み入れたという事に他ならない。これは、人間の分を過ぎたとか、そういう次元の話ではない。存在してはならない類の物だ。
事実ではなく直感でそう思う。
霧輝の変化が伝わっていない訳ではなかろうに、神は未だに笑って見ている。嬉しそうに、見ている。敵が現れた事を。殺し合いができる事を喜んで、待っている。
神はこの時に、霧輝がまだ硬直している間に殺すべきだった。
「すまない。僕は、お前を殺せるみたいだ」
単純な現実として、霧輝は告げた。今なら分かる。今ならできる。天璃の体を斬らずに、神を斬れる。
どうすれば斬れるのか、ではない。そういう風に斬りたいと願い、斬るだけで斬れる。それだけで神だけを斬る事ができる。
それを実行するために、霧輝は一歩踏み出した。
二歩目に、神の前に立つ。
「ほう」
神が言う。霧輝はそれに構わず、右手に握った黒三日月祓で斬り

上げた。それを、神は軽く横にステップするだけで躱す。
そこに、すでに動いていた左手が白満月祓で薙ぎを放っている。
それは神があらかじめ構えていた剣によって流されて、霧輝の体は神の前に大きく開いた状態で晒される。
突きが来た。
霧輝の放った斬撃も神速の域にあったが、それをさらに越えた速度の突き。人間には、およそ躱す事が不可能な攻撃を霧輝はそれでも体を横にして紙一重で躱す。
それと同時に振り下ろされた黒三日月祓を、神は片手で裏拳を放つ事によって軌道を変える。だが、それを予測していた霧輝は、振り下ろした腕が軌道上から外れた瞬間に次を放っていた。
先程のお返しだというかのような、神速の突き。
神の放ったそれよりも一段早い突きは、神が体の前で構えた剣によって簡単に受けられてしまった。そのまま、神は背後へと飛び退る。
ここまで、お互いに未だ様子見の応酬。
常人ならば放たれた攻撃の分だけ死ねるような応酬が、全て単なる牽制でしかなかった。見ている者がいたら、攻撃を目で追える者がいたら、「信じられない」と言うしかないような今の交錯が、未だ遊びの域。
そんな中で、霧輝は自身の変化を完璧に把握していた。

（神の身体能力と、自由に斬る能力か）

今の交錯の中で、自分が得た力を冷静に、冷徹に観測していた。調べていた。その結果、得たのが神の本気に付いて行ける身体能力と斬る物を意志で選択する能力だと理解した。そして、その試運転も今の交錯で済ませた。
おそらく、この二つだけなのは体が耐え切れないからだろう。霧輝の体はあくまで人の体なのだ。この神の身体能力と自由な斬断能

力だけで、体が悲鳴を上げている。それを、霧輝は実感ではなく一歩下がった客観で理解している。
だが、それでも最後まで持つだろう。ここからは、手の読み合いとその実行だ。決着に擁するのはおそらく最高二十手程だろう。不安要素は刀剣の神に、斬り合いの読みで勝らなければならない事だ。それができなければ、天璃の体を解放できない。神を斬れない。

（最悪、相打ちもあるけど）

それは、本当に最悪の場合だ。霧輝が生き残らなければ、二人揃って軍による解剖の憂き目を見る事になりかねない。だから、自分が死んで神が生き残るような事態になりそうな時の、本当の最終手段だ。
だが、そんな覚悟があるか否かは、読み合いに影響する。相打ちすらも覚悟する目は、往々にして読みを誤らせる。させた事も多いが、それに誤った事も少なくない経験がある。おそらく、それは神も変わらない。
後は、霧輝が神よりも多くの手と状況を想定して、無限近い手の中から、相手を自分が勝つ流れに引き込む事だ。
見た目で誤解されがちだが、戦闘もきちんとした頭脳戦なのだ。技や力は切るカードであり、それを磨くのは自身のカードに高い威力を持たせるためのものだ。剣技や強力が重要視されるのは、力が全てと信じている輩しか戦場にいない場合だ。
そして、目の前の神はそんな愚か者ではない。知が、賢が、戦場で大きな力となる事を知っている。剣における最上の存在が神なのだから、むしろ知っていて当然なのだ。なら、この戦いは結果として読み合いと技の競い合いという二面性を持つ事になる。

（いくら先を読んでも、剣の実力が追いついてなければ、無意味だし）

そう思ったが、すぐに無用の心配だと思い直す。先程の交錯で、自身と神の間に明確なレベルの実力差が無い事は理解している。つまり、この戦闘の中でどちらかの腕が劇的に上がらない限り、先の読み合いこそが勝敗を分かつピースだ。

後は、どれだけ不確定要素に対応できるかどうか。

ようやく立つ事ができた対等の部隊で、霧輝と神はジリジリと間合いを計る。その間に流れる空気は、触れれば発火するほどに熱い。

「――――そういえば」

不意に、神が口を開いた。

「そういえば、お互いに名を知らなかったな」

「確かに。ここまで来て、一度も名乗り合っていない。必要だとも思わないけど、殺す相手に名を告げるのは、最低限の敬意か」

霧輝も納得する。普通は初対面で名乗り上げるものなのだが、出会い方が特殊だった上、その後もまともに話し合うような事がなかったせいでズルズルと来てしまった。

賛同を得た神は一度構えを解き、大仰に両腕を広げて見せる。

「では、名乗り上げよう。私の名はコリシュマルド。万剣と万刀の神である。私に操れぬ剣は無く、私に振るえぬ刀は無い！　恐れ、崇めよ！　そして私に刃を向けるが良い！　それこそを私は望み、万勇の猛者としてその者を称えよう！」

「・・・・・・まるで騎士の名乗り上げだな」

呟き、そして霧輝も倣う。

「日本国が侍、位は皇名。生国は日本の都東京にて育ち、今ここに二振りの刃に賭けて全力の死合いを誓う。性は梳美咲。名は霧輝。貴殿を最大の敵と認め、いざ、尋常に参る」

互いに初めての名乗り上げを行い、霧輝も神――――コリシュマルドも構える。余人にはとても間に入る事などできない程に空気が張り詰める。

〈カラン〉

何かが倒れたか転がったか。どちらにせよ、それが合図となった。刹那の内にコリシュマルドの姿が掻き消え、しかし背後を振り向いた霧輝がその刃を見当違いの方向へと技で誘導する。

同時に放たれた霧輝の反撃は空を斬り、離れた防衛省官舎の壁を刻んだ。

ゴバッ、と遅れて空気が爆発する。

「――――っ！」

発生する衝撃波に乗って、霧輝がその場から飛び退いた。寸前まで霧輝が立っていた場所をコリシュマルドの剣が突き刺し、百メートルほどの亀裂が入る。溶岩は出なかった。

代わりに、水道管を斬ったらしく水が噴出すが、その時には二人とも水が掛かるような範囲に留まっていない。

霧輝はグランドヒルの壁を三角飛びの要領で蹴り、上空五百メートルまで一気に跳び上がる。人外の脚力に驚く事も無く、コリシュマルドは霧輝のような小細工も無しに同じ高さまで跳び上がった。ここまで来れば、もはや飛び上がると言うべきか。

肉薄してきたコリシュマルドに対し、霧輝は大きく体を捻る。そこから放たれるのは、回転による遠心力に肉体のしなりを加えた空

中にあってありえない威力の一撃。
それを、コリシュマルドは圧縮した神威の刃で盾を作って防いだ。
（・・・・・・卑怯臭い）
空中だったために斬撃の威力そのままに吹き飛んでいくコリシュマルドを見ながら、眉を顰める。防がれるとは思っていたが、今の防ぎ方は完全に予想外だ。
今の攻防で霧輝の着地は若干遅れ、コリシュマルドに一拍遅れた形で着地する。
故に、その時にはもう眼前に刃が迫っている。
仕方なく双刀を合わせて後方に飛び退りながら受けるが、あまりの威力に腕が若干痺れてしまった。追撃を体捌きだけで回避して、一旦距離を取る。
だが、それを相手は許さない。
まだ少し痺れの残る腕でいなして避ける。だが、それだけではコリシュマルドの猛攻を防ぎきれず、足で敵の剣の唾を蹴り上げて無理矢理体を開かせた。腹に足を当て、一気に吹き飛ばして距離を取らせた。
霧輝から足技が出た事に多少驚いたようだが、コリシュマルドはすぐに笑みを浮かべて剣を構え直す。腕の痺れが今の攻防の内に取れたのを分かっているのだろう。
距離が離れた事により、一時的な膠着。
だが、それを長く続ける訳にはいかない。長引けばコリシュマルドが配置した剣鬼達が神降ろしを始めてしまう。ここにもう一柱、それも二人の意志が及ばない神が降りてしまえば、収拾のつかない事態になっる。
だが、その事を霧輝は頭から追い出した。ここで焦ってしまえば、平常心を失ってしまえば負ける。それはそのまま首都の崩壊を意味してしまう。

（最悪、二柱まとめて斬ればいい）

それだけの事だ。今は目の前の斬り合いに、殺し合いに集中すればいい。一度に二つの事はできないのだから。二兎を追い、二兎を得る事ができる程、器用じゃない。

「僕はお前を斬る。それだけだ」

「・・・・・・いい覚悟だ！　それでこそ、私と死合うに相応しい！」

霧輝の言葉を受けて、剣神は歓喜する。それこそが、己の求めてきたものだと叫ぶ。

その意気を断ち切るように、霧輝は神速を持って斬り込む。黒三日月祓を振り上げて、正面から一気果断にコリシュマルドを、神を斬ろうとする。

「まだまだ甘い！」

言って、コリシュマルドは剣でそれを受ける。それを見て、霧輝は獰猛な笑み。

（それが――――）

剣に当たる瞬間、僅かに振り下ろす角度を変えた。

「――――狙いだ！」

コリシュマルドが目的に気付いて驚いた表情をするが、遅い。黒三日月祓は、その手に握られた剣を中心から切断する。

「僕は固有の技を持っていない。だけど、それは型を持っていないという事じゃない。技として名前を付ける意味を見出せないだけだ！」

剣を切断した勢いを殺さずに、刃の向きを反転させて斬り上げる。それを残った剣の刃を使って辛うじて防ぎ、後退する。

「どうやら、実力を見誤っていたようだ」

「評価を改めるのが遅いよ。お前に武器はもうない。終わりだ」

「いつ、武器がそれで最後だと言った？」

返された言葉に、霧輝は眉を寄せた。そこで、気付く。

（そういえば、さっきの剣はどこから出した？）

コリシュマルドの体に剣を収める鞘など無い。かといって、あの剣は刀身を晒したまま手に持っていた訳ではない。初めは、白満月祓を両手で構えていた。ならば、一体どこにあの剣を隠していたのか。

霧輝が気付いた事を察し、コリシュマルドは笑みを浮かべる。

「そうだ。私が持っている剣は今の物だけではない。《神万倉庫》という物だ」

言ったその右手には、片手持ちの大剣が握られている。どこからか、新たな剣を出したのだ。霧輝が見ている前で左手が一瞬消え、そちらには壮麗な大太刀が現れる。

「こちらの剣が《グリアルト》といい、太刀の方は《正宗》とい

う。どちらも秘蔵でな。斬ってくれるなよ？」

グリアルトという名前は知らなかったが、正宗の名に霧輝は僅かに緊張する。神の持つ刀の名として、最高の刀鍛冶として名を馳せた相州正宗の名は十分過ぎるだろう。彼が鍛えた刀は、神すらも気に入るのか。

防衛省程度は吹き飛ぶかもしれない。そう思いつつ、霧輝は間合いを計る。どちらも、一歩で最低でも百メートルは跳べるのだから、あまり意味の無い行為だ。だが、それでもジッと立っていれば新たに加わった　名刀という名前の圧力に屈してしまいそうになる。

村正と並び、人が持っても千人斬りを可能とする刀。神が持てばどれだけか。

だが、それでも霧輝はここで退く事ができない。退けない理由がある。天璃の体を解放するという理由が、できてしまった。次の機会を待つなんて事はもうできない。

故に、次はこちらから肉薄する。

「――――シッ！」

覇気を乗せて斬断の刃を振るう。全てを断ち切る神威を刀に乗せて振るう。

それに、コリシュマルドは同じ力を乗せた剣をぶつけて来た。

これは剣神の神威ではない。

（やっぱり、二重顕現のまま天璃の中にいるのか）

今霧輝とコリシュマルドが振るったのは、万斬万断の神《世斬界断神》の物だ。あの日、コリシュマルドと重なって顕現した神の力。その神の意識は霧輝の中に眠っているが、コリシュマルドの力が霧輝の中にもある以上、万斬万断の力も向こうにあると考えていた。

それが、図らずも証明された。

（分かってよかった。これで、天璃の中の神を残らず斬れる）

神速の斬撃を連続して繰り出し、相手を防戦に追い込みながら安心する。これで一柱分だけ斬って気を緩めるような失敗はない。そう理解したから。

二柱分の神威。その全てを斬るために、霧輝は刃を振るう。

二振りの刀を振るう時は流れるように淀みなく。昔、天璃から聞いた基本を忠実に守りながら、攻める。この際、自身の損害はそこまで気にしない。相手が攻撃してくれば、その隙を突いて殺す。そう決めた。

だが、やはり向こうは剣神。剣における闘いにおいて間違った手など打たない。今は守る事が上策と知っていて、徹底的に亀のような守りに入る。

型はあっても技の無い霧輝では、同程度の実力を持った相手が守りに入ってしまうと、それを崩すだけの手札が無い。

まして、今まで使った事の無い二刀流。

これがもし一刀なら、万の技が記憶にある。体の中に蓄えられている。これまでに戦い、敗れていった者達から受けた技が蓄積されている。それを持って打ち破る事に、何の呵責も無かっただろう。

だが、二刀流の者はいなかった。二刀で霧輝の前に立てる実力者はいなかった。

そのせいで、知らない。分からない。二本で目の前の防御を破る方法が霧輝の中には無い。唯一、それを体現できただろう者は、霧輝の前で二刀を一度も持たなかった。

（泣き言だ）

やるしかないのだ。無ければ生み出せばいい。創ればいい。

新しく、この双刀に相応しい術を。
決めたら、後は実行に移すだけだ。過去の莫大なデータから、経験から、双刀に相応しい動き、軌道、技を選択して洗練して生成する。

（これが、僕の双刀術だ）

莫大な経験、記憶から生み出した物に問題は存在しない。存在し得ない。それを単純に実感として理解した。
目の前の防御を破れると、理由も無く確信して、動く。

双刀術《崩し双月》

突然洗練され変容した動きにコリシュマルドは付いて行けない。前触れもなく上がったギアに対処できない。
今まで才能でのみ振るっていた刃が、型のみだった斬撃が、技を得た。
たったそれだけだというのに、たったそれだけだからこそ、霧輝は神を越えて神を圧倒する。神才が人の技を手に入れた事で、神を殺す牙を手に入れた。
そして、続けて放たれたのは神殺しの御技。

双刀術《神斬り》

神を殺すための、神を殺すためだけに創り出した技。双刀に斬断されて、しかし体には一切の傷もなくコリシュマルドは倒れる。倒

れた天璃の体からは、先程まで溢れていた、神を神足らしめる神威の一切が消えている。

（斬った）

そう思い、神殺しを成した事にようやく心が追いつく。

そこまでが限界だった。

全身から血が噴き出し、鮮血に染まりながら仰向けに倒れる。人の身で神威を行使した、神と同じ領域に足を踏み込んだ愚行の報いだ。

耐え切れなかった体は先程から悲鳴を上げていた。それを無視して、押さえ込み、殺し合いを続けた結果がこれだ。戦闘中に倒れなかっただけ、僥倖だったのだ。もはや視界は真紅に染まり、指先は一ミリも動かない。

神を破り、神の立つ領域まで踏み込み、神を殺した男の末路。

だが、後悔は無かった。もうすぐ降りる神の対処をメティとシェリスに任せてしまった事はすまないと思いつつも、霧輝は満足する。

天璃の死から始まった因縁を、ようやく断ち切れたのだから。

遠く、声が聞こえた気がしたが、それを確かめる余裕がある訳も無く、その意識は黒い本当の闇へと落ちていく。

まず初めに知覚したのは、瞼を閉じて尚も侵入してくる強烈な光だった。

（生きてる、のか？）

そう思ったが、目の上にかざそうと思った右腕が動かない。ならば、ただ死に損なっているだけなのだろうと判断を改める。瞼を開くのも億劫で、そのまま死の帳を待つ。

そんな折、閉じられた視界を侵食していた光が遮られた。

（――――なんだ？）

そう思った次の瞬間に自らを襲った出来事に、開ける気も無かった瞼を押し上げて目を見開いた。

まず目に入ったのは、眼前、触れ合わんばかりの距離にある閉じられた双眸。その上にある眉は蒼銀。視界の端に見える髪もまた、同じく蒼銀だ。だが、霧輝が驚いたのはそこではない。

霧輝の唇が、眼前の少女のそれと重なっているという事実だ。

あまりに唐突で、あまりに脈絡も無く陥った状況に、まともな思考能力など残る余地も無く動揺してしまう。

戦場にあって誰よりも冷静な霧輝が、現状に頭が全く追い付かない。

そんな霧輝の状態に気付いた訳でも無いだろうが、シェリスは重ねていた唇を離して、上体を起こした。それによって直接降り注いできた光に、反射的に手をかざす。

（待て）

内心で呟き、眼前の手をマジマジと見やる。それは確実に自分の手だ。破れ、血塗れだったはずだというのに、一切の傷がない。だが、それでも自分の手だというのは間違いようが無い。それに加えて気付いたもう一つの事実に、今度は現実を疑った。

（何故、体の傷が癒えている）

神の力を使った反動は、簡単に治るような生易しいものではない。神威が傷口の周囲に停滞し、結果として再生を遅らせる。全身の血管が破れ、そんな状態になっていたのだ。たとえ高位の《慰術師》でも、再生など叶うはずが無いのだ。つい先程目が覚めた時には確かにそんな傷で動けなかったというのに、なぜ治っているのか。

そんな霧輝の戸惑いを、シェリスの言葉が中断させた。

「傷が関知している事が疑問だとは思いますが、その前に言わせていただきます」

驚愕から立ち直った霧輝が、ようやくシェリスへと視線を戻す。そこで、先程シェリスが自分にしていた事を思い出してしまい、柄にも無く顔が真っ赤になった。

霧輝が何を考えたか理解したのだろう。シェリスもまた、あまり表情の動かさない顔を真紅に染める。

「先程の行為はあまり考えないでください。それよりも――――あなたは、自分の命が一体何だと思っているのですか！」

雷が落ちた。それに、霧輝はビクッと肩を震わせるしかない。傷が治っているとはいえ、神威によって痛んだ体や一度は枯渇した生命力が戻った訳ではない。腕を上げる程度なら可能だが、まだ身動ぎが精々だ。

そうして霧輝が動けない事を幸いと、シェリスは説教を続ける。

「いくら相手が半神で自分が神の力を奪っているとはいえ、神に単独で挑むなどあり得ない事です！　今だって倒せたから良かったものの、一歩間違えれば最悪の事態になっていたのですよ！？」

「いや、それは勝算があったし・・・・・・それよりも空の魔方陣の方が――――」
「完成まであと十分はありますから問題ありません！」
霧輝の弱々しい反論を一言で叩き潰し、睨む。ふと視線をその背後へと向けたところ、メティが我関せずといった態度で立っている。つまり、周囲に霧輝の味方はいない。いや、敵になっていないだけマシなのか。

「そもそも、ここにいたのが私でなければあなたは死んでいました。人間の体で神威を無理矢理に扱った反動で筋肉はおろか内臓すらも傷付いていましたし、血管は大動脈まで破れていました。心臓が無事だったのは偏に運が良かったというだけに過ぎません」
「ああ、うん。それに、傷口に神威が纏わりついて人の力で傷を治せるような状態じゃなかったよね。そんな状態だったのを助けてくれたのは本当に感謝してる」
「はっきり言いますが、そんな言葉では足りません。あなたの傷を覆っていた神威は、治癒術に抜きん出た竜である私でも治せない程のものでした。竜の中でも強大な力を持つ私が不可能なのです。それがどういう意味を持っているか、分かりますか？」
「ええと、それこそ神様でもなかったら治せないって事だよね」

心底怒りが頂点に達している様子のシェリスにやや怯えつつも答える。竜でも治せないとなれば、それは神人でも不可能という事だ。そこまでになると、世界の規則を破る事ができる神にしか状況を打開できない事になる。
そこまで考えて、疑問が浮かんできた。

「ちょっと待って。なら、僕はどうして助かってるの？」

不可能な状況から霧輝は確かに命を拾っている。今の話に嘘が無い事は、怪我をした当人である霧輝が一番分かっている。ならば、今自分が助かっている事はありえない事だ。
そんな霧輝の疑問に、シェリスは顔を赤らめて珍しく躊躇を見せる。

「それは、ですね・・・・・・」
「・・・・・・・・・もしかしてだけど、さっき目が覚めた時のあれと関係があるの？」

さすがに口に出すのは抵抗があって遠回しに聞くと、シェリスは顔を真っ赤にしながらも頷いた。竜といえどもさすがに恥ずかしいらしく、紅潮して元に戻る様子の無い顔のまま説明をする。

「私たち竜は、特別な儀式として《聖神契約》というものがあります。同族の竜ならば共鳴による能力の増大、他種族の竜ならば互いの能力を共有する事になります。キリキを救うために、私の持つ治癒能力を共有し、神威の影響が無い内側から治したのです」
「何となく分からなくもないけど、それって軽々しくやっちゃいけないようなものじゃないのかな。僕なんかのためにそんな事をして大丈夫なの？」
「大丈夫ではないでしょうね。ですが、私がやると決めましたから。他の者にはたとえ両親であろうとも異は唱えさせません。この答えでは不満ですか？」

まだ若干顔が赤いながらも、挑むような声音と表情で言い切る。それに、霧輝はゆっくりと首を横に振った。

「ううん。そこまでの危険を冒してまで助けてくれた事は素直に嬉しいよ。降りてくる神を二人に任せて死ぬのは、正直悪いと思っ

てたから」

言って、体を起こす。一瞬シェリスは心配そうな顔をしたが、すぐに切り替えて静かに立ち上がった。それを横目に、霧輝は両手を開いて閉じてを何度か繰り返し、両肩を交互にグルリと回した。

「とりあえず、戦えないほどじゃないかな」

これぐらいなら、と霧輝は内心で付け足す。少し休んだおかげで気力も体力もある程度回復できた。普通ならこんな短時間で立つ事など不可能なはずなのだが、化物じみた回復力である。それだけでもう人間じゃない。

（人間離れしてるとか、そういう話じゃないよね、もう）

軽く溜息をついて、霧輝は空を見上げた。光はもう、目を細めなければ見る事も適わないほどに強くなっている。鬼が出るか、蛇が出るか。低位の神ならいいな、と思いつつも空の魔方陣を見続ける。

およそ十秒後。

顕れた。

何が、と問うまでも無く、神が、だ。しかも、一目見た瞬間に高位の神格だと分かってしまうようなオーラを纏っている。

遠目にもはっきりと仔細が分かるような巨大な虎に跨った女だ。恐ろしい事に腕が十本もあり、それぞれに武器が握られている。中でも特筆すべきはその手に持った三叉の槍で、それだけで他の武装全てを凌ぐような威圧がある。

「ドゥルガーですね。遥か太古にインドに顕現した事のある神です」
「確か、破壊神シバの妃が変身した姿だったよね、伝承では。実際は全く別の神だって最近になって分かったけど、シバの妻になってるパールヴァティーと同格の神としか分かってない神。できれば、こんな有名所じゃなくて、下級神が出て欲しかったんだけど」
「それは高望みね。とりあえず、出ちゃったものは仕方ないからどうにかしましょう」
「主にどうにかするのは僕だと思うんだけどね」

言いつつ、霧輝は一歩前に出た。砂を踏む音に反応した訳でもあるまいに、遥か遠くに顕現しているというのにドゥルガーがこちらを見る。

「ひっ」

聞こえたのはメティの声だ。おそらく初めて神と真正面から相対しただろうから、その反応は当たり前だろう。むしろ、シェリスが何も声を上げなかった事に感嘆すべきだ。

「メティは超遠距離から援護して。ただ、無理そうなら下手に介入しなくていいから」

それだけ言って、霧輝は周囲を見回す。そんな霧輝の前に、二振りの刀が差し出された。それを持っているのはシェリスだ。

「ありがとう」

礼を言って受け取る。黒三日月祓を抜き、面倒なので鞘は地面に

置いた。どうせ戦闘中鞘に収めるような事は無いのだから、単純に邪魔なだけだ。
それから、こちらを窺うように見ているドゥルガーを見やり、一度だけ刀を空振りする。

「じゃあ、行ってくる」

背後の二人と、神から解放された返事も無い彼女の体に向かって言葉を放ち、霧輝は疾駆した。先程コリシュマルドと死闘を演じていた時の数十分の一、普段から見ても二分の一以下のスピードだ。神威の影響はかなりきつい物がある。

（全く、参ったね）

低姿勢で疾駆してくる霧輝の姿に刺激させたのだろう。虎が咆哮を上げ、ドゥルガーが理解できない言葉で叫ぶ。多分、殺すとかそんな言葉だろう。
どうやらドゥルガーが駆る虎は普通の虎と同程度の運動能力しか無いらしく、コリシュマルドのような神速移動が行われなかったのが救いだ。それはつまり、ドゥルガー本人も神速で動けないという事になるのだから。
多分、そんな事を思ったのは甘かったのだろう。神が、それもかなり上位に入るような神がそんな簡単な訳が無い。

（僕じゃなかったら、多分一分持たないんじゃないかな）

落ちてきた鎚を躱しながら思う。続けて剣が横薙ぎに襲ってきて、霧輝がさらに下がると神速の槍が襲ってくる。そう、なぜか槍を突く時だけ神速。それだけではなく、腕一本一本の速度がバラバラでリズムが取れない。

霧輝ですらその速度差にやられそうになるのだから、皇名でも近接戦闘系じゃない奴は瞬殺だろう。これでどの武器の習熟度も達人級なのだから始末に負えない。

（全く。この神速とか、経験が無かったら躱すなんて不可能だよね）

そう考えている内に神速の三連突。霧輝はそれを、軌道とタイミングを読んで紙一重で避ける。他の奴なら、今ので完璧に死んでいるだろう。躱せたとしても一発だけだ。

全く持って、コリシュマルドとの戦いに助けられている。

一瞬逆だったらどうなっていただろうかと考えて、即座に思考を放棄する。そんな事、それこそ運命の神でもない霧輝に分かるはずが無い。それに、霧輝からすればどうでもいい事だ。

死角から襲ってきた斧の一撃を回避して、どうも集中できない事に舌打ちする。

（コリシュマルドとの戦いで燃え尽きたのかも）

そう思って、笑えないなぁ、と苦笑いする。それから、霧輝はバックステップを踏んで距離を取る。このままでは、神相手に長期戦という最悪のシナリオを辿る事になる。

そんな風に、目の前の戦いに集中せず、そんな事を考えていた事が悪かったのだろう。

ドン、と。

あまりにも軽く背にぶつかった物に目を見開く。変な事を考えている間に、いつの間にか壁際まで追い込まれていた。

そこに、横薙ぎで迫る鎚。

霧輝はギリギリでわざと体を落とし、虎の爪を辛うじて躱して背後へと抜ける。そんな霧輝の耳に、轟音が届く。振り返ると、鎚で

殴られた官舎が崩れ落ちる所だった。

「ほんと、神様っていうか、怪物だよね。ていうか、明日からの防衛省の業務とかどうするんだろう」

完全に他人事で霧輝は呟く。そんな言葉は軽くスルーして、ドゥルガーは虎と共に悠然と振り向く。その顔に、官舎を粉砕した感想など微塵も存在していない。

そこで初めて、ドゥルガーは口を開いた。

「貴様は、何者だ」

今度は、きちんと日本語である。それに、霧輝は苦笑を隠して肩を竦める。

「さあ。神か人か、それとも別の何かか。僕が聞きたい所だ」

「なぜ、我に刃を向ける」

霧輝の言葉に対して何の感慨も浮かべず、再び問うて来る。一体、この神は何を考えているというのか。

「神は神のいるべき場所にいてもらわないと困るから、かな。正直、地上に降りて来られたら迷惑なんだよね。帰ってくれるなら、こうして戦う必要も無いんだけど？」

「迷惑だと言うのならば、何故、我を呼んだ」

「呼んだのはあなたと同じ神様だよ。理由を聞こうにも僕が斬ったから分からないな」

霧輝の答えに、ドゥルガーは沈黙する。奇妙な沈黙の中、虎の唸り声だけが戦場に響く。

「何故、斬ったのだ？」
「それが僕の目的だったから。殺せたから殺した。そこにそれ以上の理由は無いよ」

色々と理由があるような気がするが、そういった物は後付けだ。突き詰めて考えたら、殺したいと思った時に殺せたから殺した。それだけだ。殺したいと常に考えてはいたが、殺せないと判断すれば退く。その程度の分別はある。
殺せると判断できたのが、たまたま今日この時だったとうだけ。

「僕はこれでも現実的な考え方をする人間だからね。必要性の無い殺し合いはしない。あなたが神界へと帰ってくれるのなら、こちらとしても刃を向けるような理由はない。この願い、聞き届けてはもらえないかな」

霧輝としては、何の縁もゆかりもない相手と殺し合いをする程、血に餓えてはいない。ここでドゥルガーが引き下がってくれるのなら、それに越した事はないと考えている。
だが、そんな願いを抱く事自体、愚かと言うしかなかった。

「不可能だ。我は戦神。我の魂が満足するまで、我は血を求める」
「・・・・・・やっぱり神は神、か。じゃあ、最悪でも僕で満足してもらえるように努力するかな」
「良き心掛けだ。その刃で見事我を満足させてみせよ」

言葉と同時に槍が来た。
返答する余裕も無く全力で身を逸らして回避する。そこで初めて巨大な火炎が飛んで来てドゥルガーに直撃する。いや、戦斧を回転させて防いでいる。

背後を一瞬だけ振り返ると、驚愕した様子のメティが目に入った。さすがに、無傷なのはショックだったのだろう。だが、防御に出させただけでもすごい事なのだ。皇名級の攻撃力が無ければ、それこそ防御すらしてもらえない。当たっても無傷で終わりだ。

だが、今はそんな事を一々フォローしているほどの余裕は無い。防御動作が終わると同時に距離を詰め、先に乗っている虎を殺す事にした。下段から一気に斬り上げる。

しかし、それは横から鎚と鎖の先に短剣の付いた武器が刀を折ろうと迫り、断念する。

（なんでこう、絶望的なまでに強いかな）

こちらも神威を使って対抗しようにも、そもそも神力がほとんど底を突いている。先程シェリスから聞いた契約云々は、詳細も知らずに推測だけで頼るのは抵抗がある。結局、最後に頼れるのは自分の経験と技術だけだ。

「・・・・・・・・本当に不幸な人生だよ」

呟くが、それ以上に嘆くような暇も無い。十からなる異常な手数をこちらは二本で捌いているのだ。これはむしろ、喝采をもらってもいいくらいに善戦している。良いタイミングで入るメティの援護のおかげでもあるが、休む暇の無さに正直泣きたくなる程だ。

ただ、そんな時間も無駄という訳ではない。

この短時間で、女神の持つ武器の属性が少しずつ分かってきた。

まず、最大の脅威である三叉の槍だが、これは水だ。槍が神速で繰り出されるのは、槍自身が纏った水と空気中の水分を支配する事で空気抵抗をほぼ絶無としているからだ。普通、一種類の属性を支配するだけでは不可能なのだが、それはさすが神と言うしかない。

他に分かったのは、斧が風を支配している事と剣が炎を操る事、

鎚が大地で鎖に短剣が取り付けられた武器――――今後は鎖剣と呼ぶ事にした――――が雷の属性という事だけだ。
他の大鎌や鞭等の能力は未だによく分かっていない。

（いや、ある程度の予想はできるんだけどね）

これまでの経験と実際に攻撃を受けた感覚から、多少の予測はできている。だが、まだ確信して動けるほどではない。神相手に確信も無く動けば、殺されてしまうので動けない。
しかも、最初こそメティの攻撃は隙を生む事ができていたが、今ではほとんど牽制にしかなっていない。防戦一方になっている理由の一つは確実にそれだろう。
だが、それを責める訳にはいかない。精霊術は精霊を操り、時に強大な精霊と契約して力を借り受ける術式ゆえに、一定以上の威力を持たせにくいのだ。しかも、強大な精霊を行使する時ほど、世界への影響も大きくなる。前者はあまり関係ないが、後者のせいで、メティはこの場において牽制しかできていない。

（それに、メティが本気で動けば先に倒れるのは僕だろうし）

神と人間では根本的に耐久力が違う。メティが本気になればもっと遥かに強力な攻撃ができるはずなのだ。それができないのは、霧輝がそれを避けたり防いだりできる程回復していないからだ。明らかに、それを気遣って威力を落としている。
ただまあ、あまり本気になられても困るのだ。神を倒す代わりに地球の自転が一時的に停止したり、地図を書き換えなければならない程の地形変化が起きても困る。
東京都内にいきなり湖が出現したり山ができたりするのは、誰でも遠慮したい事だ。

（しかも、それで確実に倒せると言い切れないから本当に困るよね）

この場合、最も周囲に影響が無いのは、先程やったような神威を圧縮した戦闘だ。それによって一撃の威力も上がるし、何よりも気を付けていれば周囲を破壊しない。これは、人間からすればかなり嬉しい方法だ。

ただ、それを神に使われるのは遠慮願いたいが。

（さっきできた亀裂なら、まだ自然に塞がるからいいけど、官舎粉砕とか、今頃責任者は絶叫してるだろうな）

霧輝は気を使ってあまり壊さないようにと考えているが、壊れてしまったものに対する罪悪感などは無い。認識としては、壊すのは良くないが壊れてしまったら仕方が無いという程度の物だ。多分、政府の偉い人が聞いたら泣く程に適当な認識だ。

そんな事を考えている間にも、避けた鎌が崩れたのとは別の官舎の壁をごっそりと削り取る。多分、今日の戦闘だけで国家予算の何割かは確実に飛ぶだろう。天災よりも神災による被害の方が、得るものがない分単純に金の無駄だ。

それなのに予算を専用に振り分けなければならないのだから、世の中というのは本当に救いが無い。

そういった事に関する思考は横に置いておく事にして、鎌の属性を確信する。

（悪喰、だよね）

十中八九、あの鎌は刃に触れた物を区別無く喰らう能力だろう。でなければ、刃で斬った場所が抉り取られたかのように消滅する理由が無い。初めは重力かと考えもしたのだが、重力ならば建物全て

が消えるか、最低でも抉る以上の量が消える。

（それに、瞬間的に呑み込むから、一瞬残像が残るんだよね）

原理は理解できないが、重力によって呑まれると残像が一瞬だけ残る。呑み込まれ方によってはできない事もあるが、少なくとも今のような消え方だと残って見える。それは、今までの経験から知っている。

残像が残らず消えるのは、おそらく光ごと鎌の周囲を喰らっているという事なのだろう。

（鎌が一番厄介な武器かもしれないな）

霧輝は内心で溜息をつく。何故なら、あの鎌とぶつかった際に双刀が呑まれないという補償はどこにも無いのだ。神威を纏わせれば別なのだが、神威無しで呑まれない自信が霧輝にはない。

ただ、他の武器はそこまで理不尽ではないという事は理解できる。雷や火、水などは、喰らってもまだ我慢できる攻撃だ。ただ、体をごっそりと持っていかれかねない鎌の攻撃だけは絶対に避けようと思う。

その後も緩急織り交ぜた様々な力を宿す攻撃が襲ってきて、霧輝はその能力を少しずつ把握していく。こういった点は、人間を見下す神のほぼ共通している性格に感謝した。

（鞭が毒で球体の圏みたいなのが斥力。あと、錫杖は爆発か）

爆風に合わせて背後に跳びながら情報を蓄積する。メティの攻撃は大抵斧か鎚で防いでしまうので、情報収集は基本的に自分の腕が頼りだ。

さらに、誘導して肉食動物の顎のような武器を地面に当てさせる。

顎は易々と地面を喰い、内側の地面が消失して背後十メートル程の位置に現れた。つまり、食い千切った物を強制的にテレポートさせる能力ということだ。
どれもこれも、単純だがそれゆえに対処の難しい能力ばかりだ。しかも、先程顎などもドゥルガーが乗っている虎と同じぐらいの大きさがあるのだから救いが無い。

（それに、多分この神も武器庫みたいの持ってるよなぁ）

というより、これだけ多くの武器を扱う神が持っていないと考える方がおかしいだろう。槍、剣、斧辺りは変えないだろうが、他の武器は平然と変えてくると思った方がいい程だ。
武器を変えられる前に決着を着けないといけないと思うが、それはやはり難しいだろう。少しでも気を抜けば、十ある武器の一つが確実に急所を貫く。
氷の刃が雨のように降り注ぎ、霧輝は十の武器から一時解放されて息をつく。
だがそれも本当に一時だ。緊張を解くような余裕は一瞬も無いし、そんな事が許されるほど戦いに集中してもいない。いや、集中していたとしたら、なおさらにそんな事をするなんて不可能だ。
だからこそ、だろう。次の瞬間に起きた事に対応できたのは。

地面が消えた。

一言で起きた事を表現するならばそういう事になる。唐突に地面が消え、一瞬の浮遊感だけ残して五メートルは落下する。怪我をしなかったのは、単にそういう馬鹿げた戦闘に慣れていたからだ。皇名となれば、高い位置からの自由落下程度は意外と多く経験する。

だが、その後の事は予想外だった。

「・・・・・・・え？」

落下の衝撃を足のバネで殺し、立ち上がってから気付いた。ドゥルガーが何故、このような無駄な事をしたのかという疑問に対する答え。

蓋がされていた。

ドゥルガーを中心に半径約十メートル程の穴。その天頂が美しい氷の蓋で覆われている。しかも、パッと見でその厚さが異常なものだと分かる。透明度が高いので分かりにくいが、その厚さは軽く五十メートル以上はあるはずだ。

そうでなければ、時間を掛ける事もなくメティがその氷の全てを溶かしている。以前に北極でそれぐらいの氷山の一角を蒸発させるという無茶をして見せた事があるから間違いない。そして、それが示す事は三つ。その内問題は二つ。

一つは明確で、この女神と一対一で戦わなければならなくなったという事。

もう一つは、この空間にある酸素が一定量を下回る前に女神を殺さなければ敗北が確定するという事だ。このままでは、酸欠で敗北する事になる。

そして最後の一つは、目の前の女神が持つ能力、技量を勘違いしていたという事。少し考えれば、武芸の技量はともかく、超常現象を操る能力が見せていた程度ではないのは分かりきっていた事だというのに、どこかでその程度と決め付けていた。

（この規模の力を初めから使われていたら、死んでいた）

そうだっただろうという予想などではなく、ただ事実として悟る。殺し合いの場にあって、ドゥルガーはずっと手加減していたのだ。

おそらくは、霧輝が超常的な能力を持たない武士だったが故に。
でなければ、このような力を温存していた理由が無い。どういう気まぐれか、彼女は、人間でも最高の実力者の一人である霧輝に対して、手加減をしていたのだ。死ぬ可能性があったにも関わらず。

（信じられない）

改めて思う。怪物だ、と。目の前にいるのはコリシュマルドや霧輝の中に眠る神と同格の、人など息するよりも簡単に殺す事ができる規格外の怪物だと。
霧輝が殺した二柱の神。その神を殺せたのは相手が神として半分の存在になっていたからだったのだと改めて実感した。
もしも重複して顕現していなければ、霧輝も天璃も無為に、何の意味も無くただ死んでいた。
もしもコリシュマルドが本来の単一の神格であったなら、霧輝は今ここに立っていなかった。
それほどに圧倒的だった。
それほどに差が存在した。
人と神とはこれほどまでに違うのかと、これほどまでに圧倒的な差が開いているのかと思わされる。
霧輝は刀という武を極めた場所に限りなく近い位置にいる。だが、だからこそ魔術等の形式の違う物はもとより、他の武器を同じ域まで極める事はできない。才能があったのは刀だけだし、何年もの時間を修練に捧げたからこそ今の場所まで辿り着いたのだ。
それを、神は超越する。
全ての武を等平に極め、際限なく全ての魔を、術を行使する。
人がそれに並ぶなど、初めから不可能だ。人間にはその場所まで辿り着くような能力がそもそもない。あれば、地球など遥か太古に消滅している。
だからこそ。

だからこそ、霧輝は嗤う。決して他の人間には見せない笑みを浮かべて見せる。
世界の規則など超越した強者の存在に。
それを殺せる現実に。
狂気を孕んだ、否、狂気のみで構成された喜びを見せる。女神と女神が駆る神獣が怯えを見せるほどの狂った笑みを。
これこそが梳美咲　霧輝の本質だ。
唯一、楼峰　天璃だけが知っていた狂気だ。
だからこそ霧輝はこの若さで皇名となる事が可能だったのだ。常人には決して得る事のできない天性の狂気があったからこそ、霧輝はたかだか数年の修練であらゆる武者を超え、数多いる人の中で頂の一つに立つ強者となった。
強きを求める狂気。
強者を越える強者となろうとする狂気。
文字通りの最強を求める狂気。
誰よりも強くあろうとする、向上心や上達志向という言葉に収まりきらない欲望こそが霧輝の抱えた力の根源だ。それが、コリシュマルドという天璃の死を象徴する存在を殺した事で、今までの抑圧の分も含めて一気に噴出したのだ。
神をも恐怖させる狂気。
そして、それを日常では完璧に抑えてみせる精神力。
もしかしたら、神殺しの資質とはそういうものなのかもしれない。神を越える狂気と、それを抑えられるだけの精神力が神殺しという一方に向いた時に、神殺しの成る条件が揃うのかもしれない。
それが、今ここに完全な形で揃った。
揃ってしまった。
神と神殺し。二つの存在だけが在る、他者という存在の介入し得ない空間。そんな中で、霧輝は自身の狂気を抑える理由が無い。そして、今までその狂気に枷をしてきた事柄が、一旦とはいえ決着してしまっている。

そんな、梳美咲　霧輝という神殺しが完全に解放された事による圧迫に耐えかねたのか。
最初に動いたのはドゥルガーだった。
驚く事に虎から降りて、手に持っていた武具のほとんどを――――おそらくは武器庫のような異空間に――――消し、代わりに八本の腕に剣を、二本の腕に槍を持った姿になった。
本当の意味での、完全武装。
それを成した女神は、今までの先頭の中で初めて、自ら攻勢に出た。霧輝とメティの攻撃をいなし、手近な霧輝を義務のように殺そうとしていた先程までと明らかに違う。その動きも虎に乗っていた時とは明らかに次元が違う。
バギン。
それを霧輝は難なく受け止めた。女神の十からなる攻撃を、黒三日月祓と白満月祓の強度に任せた力技で、十の斬撃を同時に受け止める。しかも、内二つの攻撃は柄の方で受けている。一歩間違えれば、確実に指が飛んだというのに。
普通ではありえない現実に、ドゥルガーは驚愕した。見た目からは分からないが、ドゥルガーの一撃は一つ一つがそれこそ防衛省の官舎程度は軽く粉砕する膂力で放たれたものだ。それを十の攻撃全て防ぐなど、人という種の中で、一体何人が可能か。
一瞬遅れて、気付く。
霧輝から感じられる気配。それが明らかに人外――――神のものだという事に。

「まさか、神だったというのか」
「違う」

女神の言葉を、少年は簡単に否定する。その目は狂気を孕みながらも完全に理性を保った矛盾をえている。それに、女神は一瞬呑まれた。

瞬間、女神が大地の壁に叩きつけられる。
蹴られたと女神が気付いたのは単純に宙を飛びながら霧輝が足を戻す様を見ていたからだ。神でありながら、霧輝の眼に呑まれて何をされたのか把握できなかった。
そんな女神に、神殺しは一切の容赦など見せない。
一瞬を越えて刹那の内に距離をゼロとして女神を殺すために腕を振り下ろす。それは、二本の剣で防がれた。さすがに神が持つ武具。ただの業物ならば力任せでも切断する一撃を受けてヒビすら入らない。
それを無感動に受け流して放たれた薙ぎは三本の剣で防がれる。
カウンターの形で放たれた二本の槍と残りの剣の一撃を回避して、霧輝は一度離れる。だが、それも今まででではありえないほどの近さだ。
そんな霧輝を後方の死角から氷の槍が音も無く襲うが、ただの肘鉄で砕かれた。続けて放たれた極大の火焔も、ただ一刀の元に両断された。
どちらも、今の体の状態では使ってはならないはずの神威による防御行動だ。
狂気の求める所を成す為ならば、一片の迷いも無く悪魔に魂を売るような者に、勝利の後、生き残った後の事など何の意味も無い。コリシュマルド戦は覚悟を持って神威を使用したが、今の霧輝はただ体の安全よりも神殺しが優先されるから使う。
理由など、使えるからというだけで十分。
それが狂った思考だという事も、これまで知り合った全員が望まない行動だという事も十二分に理解している。分かっている。この行動が愚行である事など百も承知で、しかしそれら全てはただ強くあるために後回しにされる。
無視する訳ではない。
解らない訳ではない。
ただ自らの狂気こそが優先されるというだけだ。泣かれる、怒ら

れる、恐れられる事よりも、狂気の成就が今はただ優先される。一度スイッチが切り替われば、狂気が求める事以外は瑣末時として処理してしまう。
　狂気を自覚していながら止まらない事こそが、おそらくは最大の狂行なのだろう。
　そんな、常人には絶対に理解されない狂気に突き動かされるまま、霧輝は女神を追い詰める。もう発散される狂気に呑まれなくなった過去最大級の強者を殺すために行動する。

　斬、斬、斬、斬、斬、斬、斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬斬

　それこそ残像の存在すらも許さない速度で斬る。神を越える狂気を持って、それを抑えられる程の精神力を持って、神の力と速度を持って斬る。
　刀を選んだ霧輝にとって、強くある事は斬るという事だ。そのために、霧輝は狂気に導かれるまま斬る以外の全てを除外する。
技も型も無く、ただ斬るために最善最高の速度と道を体現する。
或いは、斬るための武器を持った全ての者が望む理想が、その姿にあったかもしれない。
だが、その理想は狂気によって成った物だ。
本来あるべき姿はその斬撃を辛うじて捌いているドゥルガーのような完成された武でなければならないはずだ。型と技の極みによって到達する場所でなければならないはずだ。
　決して、狂気によって到達して良い場所ではない。

だが、霧輝はそれを成してしまった。狂気のために、それを成せてしまった。ただ斬るという武における至高の一つを成してしまった。

その狂気に犯された至高が、完成された女神の武を斬断する。

腕が舞った。

時にすれば数秒、しかし対峙する二者からすれば過去にない程永い攻防の末に舞ったのは一本の腕。

剣を握った女神の腕が宙を飛び、地に落ちた。

これで状況は確定。勝敗は確定した。十の腕があって初めて防げていた霧輝の斬撃を、九になった腕で防げるはずが無い。超常たる術が通じない事はすでに分かっている。

霧輝は勝利を確実にするため、黒三日月祓を振り上げ、そして振り下ろす。一瞬。

「駄目」

突如として現れた影がその一撃を受け止めた。広がる黒い髪に、霧輝は視界を奪われる。

だが、それよりも。

「・・・・・・・・・どう・・・・・・・して・・・・・・・」

未だ狂気は霧輝の内にある。だが、狂気よりもさらに優先される事を前に、手が止まる。その霧輝の様子に、彼女は笑みを見せた。

「どこかの馬鹿が無茶してくれたから、私を取り戻せたの」

記憶にある笑みで、記憶にある声で、彼女は言った。たったそれだけの事で、心が、体が震える。狂気すらも、ただその名付けようの無い感情に押し潰される。

「・・・・・・天、璃・・・・・・・・・・」

「そう、私」

戸惑い、それでも名を呼んだ霧輝に、肯定の返事をする。それに、霧輝の目から自然と涙が溢れた。

「・・・・・・天璃・・・・・・・天璃、天璃・・・・・・」

何度も名を呼びながら、霧輝は崩れ落ちた。もう二度と会えないと思った存在が目の前にいる。自らの過ちによって失った大切なものが戻ってきた。その事実に、全身から力が抜けてしまった。

戦場に、戦場であった場所に、神すらも殺す少年の嗚咽がいつまでも響いた。

## 第四境『神と人』（後書き）

後から思うと、神も空気を読んだんだなぁ、と思ったり。まあ、武人としての矜持が不意打ちを許さなかったんだと思うのだけれども。とりあえず、改稿前のは次で最後です。

## エピローグ『平和な日常』

初めに、その後の事を少しだけ。

まず、防衛省の官舎が一部全壊したり半壊したりした事は、ニュースやネットの掲示板、はたまた人伝の噂話によって広まる事となった。事が国の根幹に関わる建造物の崩壊故に、隠蔽などほとんど不可能だったに違いない。

特に、テレビなどでは事が起こるまで避難勧告すら無かった事を強く糾弾している。

次にそんな大事を起こした一人である霧輝の処置だが、天皇家の介入でお咎めは無しとされた。これについて一部不満の声も上がったし、霧輝も何らかの罰は必要だと訴えたが、頑として受け入れられなかった。

ちなみに、霧輝に関してはもう一つ、二つ名の改名がなされる事となった。神弑魔刀の名は改められ、《双刀の鬼神》という名が新たに登録された。ちなみにこの異名を考えているのは天皇だったりする。話では、今回の事の顛末を聞いて、嬉々としてこの名を考えたそうだ。

どれだけ暇なのだろうか。

後、白満月祓の返却を天璃が受け付けず、双刀佩きになってから、最近は楼峰父が霧輝に双刀術を仕込もうと勧誘してくるようになった。しかも、結構露骨に。少し面倒臭い。

それから、防衛省に降りたドゥルガーは、天璃によってすぐに神界へと送り返されたらしい。霧輝は天璃を見て泣き崩れてそのまま意識を失っていたために記憶にないが、メティやシェリスによるとあの武神を武力で脅したとの事。その辺り、天璃は天璃だなと思わされる所業だ。

その天璃は、驚くべき事に何の枷も無く世界への復帰が許されている。一番驚愕の事実は、本人たっての希望とやらで、霧輝のクラ

スに転入する事も決まっている事だ。学校の間違いではなく、クラスである所が色々と裏を感じさせてくれる。
ただ、それは霧輝にとってはあまり嬉しくない処置だ。つい先日、皇名の権限を使ってシェリスを転入させたところへ、間を置かずに新たな関係者が入るのだ。それによって、霧輝の立場がどうなるかなど考えるまでも無い。

（ホント、学校に行くのが憂鬱だよ）

三日ほど書類仕事に忙殺を余儀なくされた霧輝は、久々の登校を前に陰鬱な気持ちで溜息を吐いた。ここ数日で、不幸が一生分は降りかかって来ているような気がする。思わず、天璃が帰ってきたという幸福の反動なのかと考えてしまう。
そこは天璃が戻ってくる事にそれだけの価値があるのだと思う事にして、久しぶりに制服を着て部屋を出る。そこには、すでに仕度を終えていたシェリスが待っていた。何度見ても、シェリスの容姿に制服が完敗を喫している。

「・・・・・何かありましたか？」
「いや、何でもない。あんまりゆっくりしてると遅刻するし、行こうか」
「遅かったのはキリキだと思いますが」

グサッと来る発現はとりあえず軽く流して、マンションを出る。今日は特に出すべきゴミも無いので、そのまま学校に直行だ。
そう思い自動ドアを潜って外に出ると、キッ、と赤いスポーツカーが目の前に停まった。運転席にはメティが座っている。車種は知らない。

「学校まで乗ってく？」

「そうしてもらえると助かるかも。シェリスもいいよね？」

霧輝の問いにシェリスはコクリと頷いて許諾。後部座席を開けて乗り込んだところ、思わぬ先客がいた。その先客は、はっきりと怒気を持たせて霧輝を睨んでいる。

「どうしたの？　早く乗りなさいよ」

思わず乗るのを躊躇した霧輝にメティが言う。とぼけているが全てを分かっている声だ。堪えた笑いで声が思い切り震えている。

「あー、今日はやっぱりえん――――」

「キリキ」

まるでシェリスが呼ぶような片言で、シェリスでもここまでじゃないだろうという平坦な声で名を呼ばれた。その声には、もう本当に硬直するしかない。

「座りなさい」

命じられて、霧輝はぎこちなく車に乗り込んで座席に座った。多分、座るのが車の座席でさえなければ、条件反射で正座している。それほどに、彼女の声は怖かった。

「・・・・・・聞いてはいたけど、本当に同棲してるとは思わなかったわ」

正直に怖い。シェリスは平然と隣りに乗り込んできたが、霧輝からすれば、この車内は地獄よりも恐怖すべき空間と化している。ここと地獄とどちらかに一日いなければならないというのなら、迷い

も無く地獄を選べる自信がある。
そんな状況を改善するためにも、霧輝は無謀と知りながら口を開く。

「ええと、同棲じゃなくて、一応、同居にな――――」
「どっちも一緒」

一言で斬って捨てられた。

「天璃、せめて最後まで話を――――」
「聞く意味がどこにあるの？　私は言い訳を聞きたくて怒ってるんじゃないの。霧輝を怒りたいと思ったから怒っているのよ」

あまりにも非情で無茶苦茶な暴論だった。だが、暴論ゆえにその理不尽な論理を崩す事はできず、霧輝は沈黙するしかない。助けられる第三者は、二人とも傍観の構えだ。内、一方に至っては笑いを噛み殺す事にその神経を注いでいる。

「霧輝、こっちを見なさい」

言われ、頑なに逸らしていた視線を向ける。そしてすぐさま従った事を後悔した。いや、後悔ではない。そこに何があるかは分かっていたのだから、改めてそれに恐怖したと言うべきだ。

「・・・・・・・・・何か言いたそうね」
「な、何も言いたくないよ」

鬼みたいだなんて言ったら殺される。
しかも、鬼のように怖いのは顔じゃない。整った顔は霧輝を睨む目元以外は無表情だ。だが、発散される空気や向けられる視線が鬼

なんかより遥かに怖い。お化け屋敷で見たら失神するか即座の逃走を選択すると思う。

（死刑台に向かう時って、こんな気持ちなのかな）

ギロチンよりも大斧を持った死刑執行人が待っている方が近いだろうか。ただ、死刑執行人も、今の天璃よりは怖くないはずだ。

そんな事を考えていたのがバレたのか、天璃の発する怒気が増した。反射的にビクッと肩が跳ねてしまう。

「天璃ちゃん。そんなに急がなくても学院まではまだまだ掛かるわよ」

「それぐらい分かってる。ギリギリまでちゃんと締め上げる」

宣言通り、学院に着くまでの約三十分間、霧輝は地獄のような時間を味わった。

学校に着いたら着いたで、何故か周囲の視線がとても痛かった。女子男子問わず霧輝の姿を見ると何事かこそこそと話し始め、男子は妬みと嫉みの視線を、女子は蔑みと好奇の視線を向けて来るのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・二人とも、自己紹介で何か言った？」

「特別な事は何も言っていません」

「分かり切った事以外は何も言ってないけど？」

（絶対何か言ったな。特に天璃は確実に言ってる）

二人の言いように確信するが、ここで追及しても周囲に恰好の噂話を提供するだけだろう。そう判断して、この件は後で、人のいない場所で追及する事にする。

今後の予定を一つ決めて、霧輝は三日ぶりとなる教室のドアを開けた。

「おー、朝から両手に花――――って、何か妙に疲れてないか？」
「そこはほっといて。今日は朝から精神的に追い詰められて参ってるんだよ」

教室に入るなり声を掛けて来た銀月の問いに投げやりな言葉を返し、霧輝は自分の席に座る。それから、自然な動作で左右の席に着いた二人へ疑問の視線を向ける。

「なんで隣りの席に座るの？」
「香村先生に要望したところ、空けていただけました」
「右に同じだけど、何か駄目な理由でもあるの？」

先程向けられた視線の理由の一つが分かって、霧輝は天井を仰いだ。天璃は昔から常識よりも自分の判断を優先して動く人間だったが、シェリスまでもが同じ事をしている事に若干衝撃を受けた。正直、もう少し周囲に合わせる物だと考えていたのだ。

（ていうか、先生もどうしてそんな要求を通すかな）

何を考えているのか分からないが、何かにつけて頼れるあの担任が制止しなかったのだから、この学院で二人を止められた者など一人として存在しない事になる。いや、霧輝が居合わせていれば違ったかもしれないが、仮定は無意味だろう。
ちなみに、光葉が天璃に何かで勝った事など一度も無いので、初めから期待していない。

「ちょっとトイレ行って来る」

二人に挟まれ続けるという拷問にも等しい状況と周囲の視線に耐えかねて霧輝は逃げた。それに銀月が素知らぬ顔で付いて来たので、状況把握のためにも話を聞く事にする。

「率直に聞くけど、あの二人は一体何をやらかしたのさ。朝から周囲の視線が無茶苦茶痛いんだけど」

愚痴も混ざった言葉に、銀月は野性味に溢れた笑みを見せる。

「二人というか、四人だな。光葉と柚花ちゃんと四人であれこれ争ってたからな。シェリスちゃんは一歩退いた感じだったんだが、聞かれた事には答えるし、一番爆弾を落としてたのは確実にシェリスちゃんだ。全部は見てないから絶対とは言えないけどな」

「何か、それだけで起きた事が想像できるから嫌だな」

四人の名前が並んだだけで、そこで行われた不毛な争いが容易に想像できてしまう。いや、基本的に全員頭も性格も良いのだ。ただ、シェリスは知らないが、他の三人は暴走しだすと止まらないのだ。三人が三人とも暴走したのなら、それはもうカオス以外に無い。

我ながらひどい評価をしているなと思いつつ、当ても無く歩く。天璃とシェリスの二人が一緒にいないからか、もしくは銀月が横にいるからか、周囲から受ける視線は少ない。

そんな風に思考を弄びながら銀月と当り障りの無い話をしていると、ドタバタとした空気が背後から近付いてきた。思わず溜息が出る。

「先輩！」

声と共に背後から飛びつかれたが、予想できていたので一歩前へ出るだけで済んだ。目だけど横に向けると、案の定柚花の顔があった。

「先輩先輩先輩！　柚花はお家まで行ったのに会えなくてショック症状が出る寸前でした！　慰めてください！」

同じマンションに住んでいるんだから家まで行くも何もないだろうに、そんな事を言って顔をすり寄せてくるものだから周囲の視線がかなりキツイ。ただでさえ柚花は額院内でアイドル的な扱いをされているのだ。その視線に殺意が込められるのも時間の問題だろう。

という訳で、同じく背後から現れた光葉が柚花を剥がしてくれたのはとても助かった。

「柚花ちゃん！　何度も言ったのにまたくっ付いて！　私の見ていない所で手遅れの事態になっても遅いんだからね！？」

たぶん、手遅れの事態とやらがどういうものかは聞かない方がいいのだろう。

「光葉、助かったよ。銀月は絶対傍観してただけだろうし」

お礼を言うと、光葉は一瞬にして顔を真っ赤にした。どうでもいいが、隠し芸として通用するのではないだろうか。

「わ、私は柚花ちゃんが襲われたら大変だと思っただけよ！　霧輝にお礼を言われる筋合いなんて絶対ないんだからね！」

「それでも、僕が助かったのは間違いないから、勝手にお礼を言わせて貰うよ。本当にありがとう」

「・・・・・・・・これで天然だから手に負えないんだよな」

銀月が何事かを呟いていたが、その前に霧輝は再度の抱き付きを敢行してきた柚花の猪突猛進を受け流すのに意識を向けていたので

気付かなかった。ふと見れば、光葉も赤い顔で何かブツブツと早口に呟いている。

「いや、平和だなぁ」

いつもの面々といると、本当にそう思う。このまま死ぬまで鬼やら神様やらと戦わなければならないような事態にならない事を願いたいが、そうはいかないんだろうなとも思う。

「先輩、どうして避けるんですか！？」

柚花の抗議をとりあえず聞き流しながら、霧輝は口元に諦観の混じった微笑を浮かべた。

## エピローグ『平和な日常』（後書き）

とりあえず、改稿するまではこのままです。改稿後は別物になりますので、指摘されても直す事はないので、ご理解の程をお願いいたします。

では、また今度お会いしましょう。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7856t/

人と神の境界

2011年8月26日23時01分発行